



---

「転換期」における稲作農業の可能性と農村社会の再生

---

(課題番号13610191)

平成13年度～平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))  
研究成果報告書

平成15年5月

研究代表者 小林 一穂  
(東北大学大学院情報科学研究科助教授)

本研究では、稲作農業および農村社会が大きな変動を経過している状況のもとで、日本列島の南北における稲作農業と農村社会がどのような影響を受け、稲作を中心とした社会構造や農民意識がどのように変容しているのか、そしてそれらが「転換期」といわれる21世紀初頭にどのような方向をとろうとしているのかを明らかにするために、北海道地方、東北地方、沖縄地方における稲作農村の実証調査を実施し、各地の稲作地帯の地域的特性を比較した。

これまで水稻単作地帯だった山形県庄内地方では、米の生産調整が開始されてから以降、複合経営や兼業化への構造的な変化が深化しており、それとともに農家女性の役割が重要になってきていること、北海道地方においては、畜産が困難な状況に陥っており、複合経営が打撃を受けていること、沖縄地方では、畜産や葉タバコとの複合が進展しており、サトウキビが安定的基幹部門となるなかで、稲作は本土復帰以降減少していること、が明らかとなった。また、稲作農業の今後の展開にとって重要な要因となるのは、中国における稲作栽培であるが、中国山東省において日本品種の試験栽培が行われており、日本の米生産にとって大きな脅威となると思われる。

こうした稲作農業の多様化のなかで、とくに複合化の進展は家族農業経営や営農志向に大きな影響を与えており、農村社会が等質的な農民の集合という性格から、多様な性格をもった農家による農村社会の再構築へと向かっていることが明らかとなった。

#### 研究組織

研究代表者：小林一穂（東北大学大学院情報科学研究科助教授）

研究分担者：細谷 昂（岩手県立大学総合政策学部教授）

研究分担者：徳川直人（東北大学大学院情報科学研究科助教授）

#### 配分額

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合 計
平成 13 年度	1,800	0	1,800
平成 14 年度	1,600	0	1,600
総 計	3,400	0	3,400

#### 研究発表

##### （1）学会誌等

小林一穂，農家女性の村落内年序集団と同年代仲間集団，

社会学研究，第 71 号，平成 14 年 6 月 18 日



## 目 次

第1章 問題状況と課題設定 .....	1
第1節 日本農業の変動 .....	1
第2節 課題の設定 .....	2
第2章 対象地の概況 .....	2
第1節 沖縄農業の概況 .....	2
1) 沖縄農業の歩み	
2) 各農業部門の現状	
3) 沖縄の稲作	
第2節 八重山の概況 .....	9
1) 八重山農業の歩みと現状	
2) 八重山地域の水稻作	
第3節 石垣の概況 .....	13
1) 石垣市の特徴	
2) 石垣農業の歩み	
3) 石垣市の農業の現状	
4) ヒアリングから	
第3章 対象集落の概況 .....	32
第1節 川平集落の歩み .....	32
1) 部落会誌から	
2) 村史から	
第2節 川平集落の概況 .....	37
第4章 川平集落の農業 .....	43
第1節 川平の農業の現状 .....	43
第2節 事例の分析 .....	45
引用文献 .....	56
<資料>	
1950年 郷土史 川平部落会 .....	57

## 第1章 問題状況と課題設定

### 第1節 日本農業の変動

日本農業は内外の厳しい環境のもとで、危機的な状況をみせている。なかでも、水稻作を中心に展開してきた農村社会は、激動の時代を迎えて久しい。

第二次世界大戦の終了とともに日本社会は大きく変動した。占領政策のなかでも日本農業と直接にかかわる農地改革は、戦前の寄生地主制を基本的に解体して戦後自作農を創出し、日本農業はこの新たな生産力層が担い手となって発展した。

1950年代後半から70年代初頭にかけての高度経済成長によって日本社会は激動する。農業においても、1961年に制定された農業基本法にもとづく構造改善事業の展開によって、農業生産の基盤整備、自立農家の育成などの近代化政策が推進される。他方で、農村からの労働力流出、農業技術の変化、都市的生活様式の浸透など、農村社会の構造は一変した。

この高度経済成長によってもたらされた農民層分解は、現実にはごく一部の上層農が上昇発展したにとどまった。それは、ほとんどの農民が下降没落するという全般的な落層化といえる傾向を示し、兼業化と離農離村があいついだ。こうして、1960年代後半以降の高度経済成長の進行は、総農家戸数の減少のなかでの専業農家の激減と第二種兼業農家の激増という兼業化の深化、野菜、畜産、養鶏などの商品生産農業の展開、集落と生産組合の機能的分離といった農村内の諸組織の機能集団化など、農村社会の都市化を急速に押し進めた。

さらに1980年代にはいると、「国際化」の嵐のなかで日本農業の存在そのものの消長が問われてきた。とくに農産物輸入自由化は、日本農業の存立基盤を揺るがしてきている。それとともに、国内における米流通の自由化の進展は、米価格の減少、農家経済の悪化など、日本農業そのものの危機的状況となって、まさに農家生活や農村地域における破壊的な影響をもたらそうとしており、それにとまなう諸問題が噴出した。それとともに、農村のあり方も急速な変貌をみせている。

稲作農業は、1970年以降に本格化した米の生産調整という未曾有の農政の影響を大きく受けた。稲作の環境悪化ははなはだしく、水稻単作地帯における農家経営およびそこでの農民の営農意識、さらには農村地域のあり方にまで、大きな影響をおよぼしてきている。

「米過剰」への対策として70年代から本格的にすすめられてきた米の生産調整では、1976年から開始された「水田利用総合対策」をへて78年からの「水田利用再編対策」において転作率の大幅な上昇が強行された。さらに1987年からは「水田農業確立対策」が推し進められたものの、90年代にはいつてきてからは、米の備蓄量が基準を下回る時期もあって、減反緩和策が打ちだされるなど混迷が生じている。しかし、生産調整の基調は変わらず、「水田営農活性化対策」や「新生産調整推進政策」から「緊急生産調整推進政策」、さらには「水田農業経営確立対策」へと、米作への重圧は深まるばかりである。

他方で、国際的な農産物貿易をめぐる問題と日米貿易摩擦の問題などによって、1990年代以降になると「米の自由化」が展開されており、米輸入のための減反とさえいいうような事態が進行している。こうして、これまで水稻を中心として農家経営をすすめてきた農村においては、きわめて厳しい現実が迫ってきている。

このように、今日の稲作農村においては、さまざまな問題が浮かびあがっている。

一方では「減反」や「米の自由化」が進展するなかでコストダウンの重圧がかかり、機械化、兼業化の荒波のなかで、稲作経営の共同化、請負化を推し進めざるをえない。他方では経営の担い手のあり方が問題となっている。後継者難が深刻化し、農村社会という地域の存続そのものすらが危ぶまれるような状況になっている。

こうして、日本農業や農村社会の現状をどのようなものとして把握し、そして今後のあり方を展望するのか、がまさに焦眉の課題となっているといえるだろう。国内における産業化の進展や国外からの農産物輸入問題、また、水稻作の減反政策や自由市場化などによって、輸入農産物と競合する部門だけにとどまらず、基幹部門である水稻作経営の悪化をはじめとして、農業の全般にわたる困難が重なりあっており、それがもたらす農民の営農意欲の低下、過疎化や都市化による農村生活の変容などの、さまざまな諸問題が生じている。

## 第2節 課題の設定

ここでは、こうした稲作農村の現状をふまえつつ、日本においてもっとも南部で水稻耕作をしている沖縄県石垣市での稲作農民や農村の状況を調査実証した成果を示すことにしたい。

これまで、各種の文献資料や統計資料を収集し、公的機関においてヒアリングを実施し、対象集落および個別農民へのインタビューをおこなってきたが、以下では、まず、文献や統計にもとづいて対象地の概況を分析する。つぎに、対象集落の現状と個別農家の事例をインタビューにもとづいて示す。最後に、参考資料として対象集落の『部落史』を掲載する。

## 第2章 対象地の概況

### 第1節 沖縄農業の概況

#### 1) 沖縄農業の歩み

#### 地理的・自然的条件

最初に、沖縄県の稲作にかかわる自然条件についてごく簡単に確認する。

「沖縄県は、我が国の最西南端にあつて、東西1,000km、南北400kmの広大な海域に島孤状に点在する大小160の島しょ（うち有人島49島）からなり、我が国唯一の亜熱帯地域である。」（沖縄県農林水産部 2000: 1）

「県土の総面積は2,267km<sup>2</sup>であり、うち沖縄本島は総面積の53%（1,202km<sup>2</sup>）で最も大きく、次いで西表島、石垣島、宮古島と続き、この4島で全体の約83%（1,872km<sup>2</sup>）を占めている。」（沖縄県農林水産部 2000: 2）

「本県は、亜熱帯海洋性気候に属し、年平均気温は22.4℃と周年を通じて温暖な気候

となっているが、夏秋期に襲来する台風や冬期における北東の強い季節風は、農作物の生育を阻害する大きな要因となっている。また、年間平均降水量は2,037mmと多いが、年、季節、地域的に降水分布にばらつきがあり、しばしば干ばつの被害が発生している。」（沖縄県農林水産部 2000: 4）

戦前から戦後にかけて

沖縄の農業全体を戦前から戦後にかけて概観する。

戸谷修氏によれば、

「1930年代における「職業別戸数」の状況をみると、全戸数の70%以上が農家戸数によって占められている。」（戸谷 1995: 51）。「1933年総戸数に対する農家戸数比は全国平均では44.8%であるから、沖縄の72.2%を示す農家戸数比は本土に比べて著しく農業にウエートを置いた産業構造であったかを確認することができる。」（戸谷 1995: 52）。

「昭和戦前期においては農業が圧倒的な比重をもっていたことを確認することができる。もっともこの当時の農業は、自給作物として甘藷、雑穀の栽培および畜産のほか、黒糖の原料となる砂糖きびを栽培しそれから黒糖製造を行っていたことにみられるように、家内工業的部門、より積極的にいえば未分化とはいえ工業部分をしっかりと結びつけた農業であった。」（戸谷 1995: 53）。

「戦前（1934-36年平均）と復帰直前の1971年時点との、それぞれの産業別所得構成比ならびに就業構造比を比較する」（戸谷 1995: 63）。「沖縄の産業構造ならびにそれに伴う就業構造は、質的变化ともいえるような大きな構造変化をしている……所得構成比をみただけでも、農業の著しい衰退、第3次産業部門の異常な膨張、第2次産業全体としては伸びやなんでもそのなかでの建設業の急激な伸びを確認することができる。……戦後の沖縄では、第1次産業から第3次産業へと一足とびに構成比が移っていることは著しい特徴と考えられる。」（戸谷 1995: 64）。

復帰後の概況

沖縄は、19（昭和4）年に本土復帰をはたした。その後の変化について概観する。

戸谷氏によれば、

「復帰から現在にいたる20年間の産業構造の推移……農業生産の担い手となっていた砂糖きび生産がこの20年間に総体的に減少の傾向をたどっていることは重視すべきことである。1960年代には沖縄農業といえは砂糖きびといわれたほどその生産に特化していた構造が、1980年代前半以降崩れようとしているのである。」（戸谷 1995: 72）。

「農業粗生産額の推移についてみると、……1980年代に入って野菜・花卉の生産が軌道にのり、かつて砂糖きび生産に特化していた農業構造が多様化して大きく変りつつあることがわかる。」（戸谷 1995: 73）。

「復帰直後、砂糖きび（30.6%）、パイナップル（5.8%）、畜産（豚18.0%・肉用牛5.8%）に支えられていた沖縄の農業は20年間の経過のなかで大きく変容し、価格競争に敗れたパイナップルが主要農作物の座から転落し、1992年現在では砂糖きび（21.7%）、畜産（豚16.5%・肉用牛7.6%）、それに新しく伸びてきて成長が期待されている花卉（14.9%）・野菜（18.4%）の主要農作物が農業生産を支えている



が、その前途は必ずしも楽観できるものではない。」（戸谷 1995: 74-5）。

「農家・農業就業人口の動向についてみると、農家数では復帰以降減少の一途をたどっており、……沖縄の農業の零細性は現在なお解消されてはいない。」（戸谷 1995: 75）。

大城喜信氏によれば、

「本土復帰後の沖縄農業の粗生産額の推移……復帰直後の1973年の280億円から85年まではほぼ直線的に増加して795億円になった。その後、増減を繰り返しながら89年には792億円になったが、これを境にして減少傾向に転じている。このように、粗生産額で見ると沖縄農業は停滞または衰退の傾向を示している。」（大城 1997: 8-9）。

「サトウキビは本県の基幹作物として、1960年代から重要な役割りを果たしてきた作物である。復帰直後の138億円から85年まではほぼ直線的に上昇し、374億円になった。90年から減少が著しく、その後、漸減傾向を示している。」（大城 1997: 9）。

「本県の野菜類の生産は、冬春期の温暖な気候条件を活かし、サヤインゲンやスイカなどの施設野菜を中心に、本土市場への端境期の供給をめざして定着しつつある。粗生産額は復帰直後の73億円から80年まではほぼ直線的に上昇し、その後85年までは緩やかに上昇してピークを示し、近年は穏やかな減少傾向を示している。」（大城 1997: 12）。

「本県の花き類の生産は、冬春期の温暖な気候条件を活かし、キクなどの切り花を中心に、本土市場への端境期の責任産地として定着している。粗生産額は復帰後の6億円から93年の163億円まで毎年増加し、94年から停滞傾向に転じている。」（大城 1997: 15）。

「葉たばこは、サトウキビとの複合作物として、離島地域に定着している。粗生産額は復帰直後の5億円から85年までは毎年増加して34億円となった。その後、89年には24億円まで減少したが、再度増加傾向に転じ94年には43億円となっている。」（大城 1997: 17）。

「パイナップルの粗生産額の推移……復帰後においては、80年の31億円が最大の粗生産額であり、その後減少傾向で推移し、17億円で停滞している。」（大城 1997: 20）。

「復帰後の農業粗生産額は……急激に増加した後、85年以降は減少傾向に転じ、近年はほぼ横ばいで推移している。作物別に検討してみると、質的に大きな変化が起こっていることが解る。その内、減少傾向を示しているのはサトウキビ、野菜類、パイナップルであり、花き類、葉たばこ、果実類は増加傾向を示している。水稻、茶、いも類などはほぼ横ばいで推移している。」（大城 1997: 21）。

## 2) 各農業部門の現状

以下、『平成11年度 沖縄の農林水産業』（沖縄県農林水産部、2000）によりながら、沖縄農業の現状を概観する。

### 農家経済

「本県の平成8年度における県内総生産は、3兆3,528億円である。うち、農業は604

億円で全産業の1.7%（第1次産業は771億円で2.2%）となっている。また、農林業就業者は34,000人（平成10年平均）で、全就業者の6.2%を占めている。（第1次産業は39,000人で7.0%）」（沖縄県農林水産部 2000: 5）

「農家所得については、兼業機会が少ないこと等から全国（都府県）平均の51.9%と低水準にあり、全国との格差は依然として大きい。又、農業粗生産額、生産農業所得についても低い水準にある。」（沖縄県農林水産部 2000: 6）

「農家所得（＝農業所得＋農外所得）は平成4年以降は、景気低迷による農外所得の減少等から横ばいないし減少傾向で推移している。平成10年の農家所得〔＝341万円〕は、さとうきび、畜産収入などの農業所得は、約5万円（4.7%）増加したが、長引く景気の低迷による給与、俸給等の農外所得が約22万円（8.6%）減少したことから、前年に比べて約18万円（4.9%）減となっている。全国（都府県）を100とした農家所得の水準は、昭和48年度の53.4%から昭和57年度には78.0%まで向上したが、その後、農外部門における格差が拡大し、平成10年には51.9%となった。」（沖縄県農林水産部 2000: 7）

#### 農家と農業労働力

「本県の農家数は減少傾向を続けており、平成10年の総農家数（＝販売農家＋自給的農家）は29,990戸で、前年に比べて420戸（1.4%）減少した。このうち、販売農家数は22,180戸で610戸（2.7%）の減少、自給的農家数は7,810戸で190戸（2.5%）の増加となった。販売農家数について、その内訳を専業・兼業別にみると、専業農家数は8,430戸で180戸（2.1%）の減少、兼業農家数は13,750戸で430戸（3.0%）の減少となっている。一方、専業農家率、中核農家率はそれぞれ38.0%、27.1%となっており、全国平均の17.2%、15.2%に比べて大幅に上回っている。」（沖縄県農林水産部 2000: 8）

「農業就業人口は減少を続けていたが、平成10年の販売農家における農業就業人口は37,470人で、前年比1,990人（5.6%）の増加となった。年齢別の構成比を昭和50年以降の推移でみると、若年層の農業参入の減少により、30歳未満層が昭和50年の16.7%から平成10年には4.0%に低下しているのに対して、60歳以上層は31.4%から63.4%へと年々その構成比を高めており、農業労働者の高齢化が急速に進行している。」（沖縄県農林水産部 2000: 9）

「農業労働力の減少、高齢化が進む中で、16歳から35歳以下の就労青年は昭和55年の2,000人をピークに年々減少傾向で推移し、平成10年には661人となっている。また、新規就農者もここ数年70人前後で推移し、平成10年には57人と前年度に比較して減少した。農家の世代交代を30年とみた場合、中核農家6,020戸に対する必要後継者数は201人が見込まれ、その補充率は28.4%と低く、将来の担い手を確保する観点からみれば、現状は依然として厳しい状況にある。しかし最近の動きとして、数は少ないものの、非農家出身の新規就農者の参入など従来とは変わった傾向がみられる。就農青年の経営部門については、花き経営が32.9%と最も多く、次いで野菜16.0%、さとうきび15.5%、畜産15.1%、葉たばこ7.6%となっている。」（沖縄県農林水産部 2000: 11）

#### 農用地

「耕地面積は、農業生産基盤の整備が発展し、基礎的条件が整う中で年々拡大してきたが、ここ数年は減少傾向で推移し、平成10年には42,700haとなっている。このうち、田の面積は945haで、前年に比べ6ha減少した。畑の種類別では、普通畑は34,600haで前年に比べ1,100haの減少、樹園地は2,110で10haの減少、牧草地は5,040haで190haの増加となった。」（沖縄県農林水産部 2000: 13）

「県及び市町村、農業委員会等の関係機関・団体では、平成8年度から「農地流動化1・1・1の1,000ha運動」を展開している……（1人で1年間に1ha以上の利用権設定）により、県全体で1,000haの農地流動化（利用権設定等）を達成しようとする」）（沖縄県農林水産部 2000: 14）

「県下6市町村を重点市町村として選定し、県農地流動化促進連絡会議による現地指導を行った。（名護市、糸満市、仲里村、具志川村、平良市、石垣市）」（沖縄県農林水産部 2000: 14）

#### 各部門

「平成9年の農業粗生産額は985億円で、前年に比べて25億円増加した。部門別にみると、耕種部門では、さとうきびは生産量の増加及び価格の上昇から、約34億円（22.5%）の増加、野菜は家格が全般的に下落したため、約20億円（13.0%）の減少、花きはきくが減少したことから、約3億円（1.6%）の減少となった。一方、畜産部門では、豚は前年並みであったが、肉用牛は、子牛の生産量が増加したことから約11億円（10.5%）増加した。平成9年の農業粗生産額を構成比でみると、さとうきびが18.9%（186億円）花きが16.2%（160億円）、豚が15.9%（157億円）、野菜が13.3%（131億円）、肉用牛が11.6%（114億円）となっている。」（沖縄県農林水産部 2000: 15）

「さとうきびは、本件の基幹作物として、ほぼ沖縄県の全域で栽培されており、平成10年における栽培面積は20,604haで全耕地面積の約48%、栽培農家数は20,347戸で全農家数の64%を占めている。また、平成9年の粗生産額は185億7,500万円で農業粗生産額の約19%を占めている。昭和60年から平成10年までの生産の推移を見ると、収穫面積は23,130haから13,536haへ、収穫量は174万トンから99万トンへと減少傾向で推移している。平成10年は、農業従事者の高齢化等による労働力不足や他作物への転換等により、収穫面積が13,536haと対前年比2.1%の減少となった。収穫量は、986,000トンと前年比10.6%の大幅増産となった。また、甘しや糖歩留は、分みつ糖10.86%、含みつ糖13.43%で、前期に比べて減少した。」（沖縄県農林水産部 2000: 17）

「本県の野菜の生産は、亜熱帯の温暖な気象条件を生かし、冬春期のさやいんげん、すいか等の施設野菜を中心に、本土大消費地向けの野菜供給産地として定着しつつある。……平成9年における粗生産額は、113億円と対前年比13.0%の減少となり、農業粗生産額全体に占める割合も、2.4%減少し、13.3%となった。平成10年の野菜の生産状況は、作付面積が、3,270ha、収穫量が65,400tと前年より減少した。」（沖縄県農林水産部 2000: 18）

「本県の花きの生産は、冬春期の温暖な気象条件を生かし、生産農家や出荷団体の意欲的な取り組みや産地育成のための各種施設整備を図ってきたことにより、キクを中心に着実に増加し、平成9年には、作付面積1,309ha、出荷額で187億円となった。平成10年の生産状況は、作付面積・出荷量・出荷額ともに前年より減少した。作付面積

は1,270haで前年に比べ39ha（3%）減少し、出荷額についても184億8,300万円となり、2億9,000万円（前年比1.5%）減少した。……品目別出荷額では、切花類が全体の91%を占め、なかでもキクが切花類の80%、全体の73%と最も多い。キクに次ぐ洋ランは切花類の5%、切花・鉢物を合わせ全体の6%を占めている。また、観葉切葉・熱帯性花き等、品目の多様化が図られつつある。」（沖縄県農林水産部 2000: 20）

「パインアップルは、国内では本県特有の作物として、沖縄本島北部や八重山などの酸性土壌地域で栽培されており、昭和44年には栽培面積が5,000haに達し、収穫量も10万トン台となった。しかし、その後の外国産との競合や需要の低迷等により、平成10年には栽培面積が750ha、収穫量は12,800トンにまで落ち込み、平成9年の粗生産額も10億7,500万円となった。一方、平成2年4月のパインアップル缶詰等の輸入自由化に伴い、優良種苗の増殖や省力化対策、生産対策、加工対策、価格補填制度など、各種の国内対策が実施されてきた。その結果、生食用パインアップルは増加の途にあり、今後は加工用を含め、バランスのとれた生産振興が課題となっている。」（沖縄県農林水産部 2000: 22）

「本県の果樹類（パインアップルを除く）の生産は、マンゴー等を中心に増加傾向にある。平成10年は、高温や日照不足等による着果不良により、生産量4,766 t、粗生産額は20億4,400万円（概算）と前年度より落ちたものの、昭和60年と比較すると約1.75倍の伸び率となっている。」（沖縄県農林水産部 2000: 23）

「葉たばこは、さとうきびとの複合作物として、宮古、八重山、伊江などの離島地域を中心に生産が行われ、現在では地域農業を支える貴重な作物として生産拡大が図られている。平成10年には、収穫面積1,305ha、収穫量2,190トンと、面積は前年に比べ96ha（7.9%）増加したが、収穫量は大雨による根痛み、疫病、白星病等の大発生により、前年に比べ901トン（29.1%）の大幅な減少となった。」（沖縄県農林水産部 2000: 25）

「本県の肉用牛の飼養頭数は、恵まれた自然条件を背景に、復帰後、草地基盤整備等の各種肉用牛進行施策が積極的に推し進められたことから飛躍的に伸びてきている。平成8年には、初めて7万頭台に達し、その後も全国的には飼養頭数の減少が見られる中で、繁殖雌牛を中心とした増加傾向は続いている。平成10年には、飼養戸数は前年に比べ1.7%減少して3,523戸になったものの、飼養頭数は、前年に比べ3.5%増加して78,660頭となった。その結果、一戸当たりの飼養頭数は1.1頭増加し、22.3頭となった。飼養規模別にみると、20頭以上の飼養規模階層の割合は年々増加し、平成10年には全飼養戸数の23.3%、全飼養頭数の75.2%を占めており、経営規模の拡大が進んでいる。」（沖縄県農林水産部 2000: 27）

「本県の酪農は、全国でも有数の多頭飼養経営で、一戸当たりの規模は55.0頭となっている。平成10年の飼養戸数・頭数は減少したものの、生乳生産量は増加している。また、経産牛1頭当たりの産乳量は、6,039kgで全国平均の約8割、乳価体系は、飲用向け乳価のみで、価格は本土よりも若干高めである。使用形態は、舎飼い中心で、…」（沖縄県農林水産部 2000: 28）

「本県の豚の飼養頭数は、昭和62年をピークにその後は減少基調で推移してきたが、平成2年以降は、ほぼ横ばいの状態で推移している。飼養戸数については、依然とし



て減少傾向が続いている。平成10年には、飼養戸数は前年に比べ4.8%減少して550戸になった。飼養頭数は、前年に比べ1.1%減少して297,312頭となった。その結果、一戸当たりの飼養頭数は20.4頭増加した540.6頭となった。豚の出荷頭数は、飼養頭数を反映して昭和63年までは増加基調で推移してきたが、その後やや減少し、平成4年以降の出荷頭数は48万頭前後で推移している。」（沖縄県農林水産部 2000: 29）

### 3) 沖縄の稲作

#### 稲作の現状

「本県の水稲は、本島北部離島や八重山地域が主産地であり、当該地域における重要な農作物として、近年生産が伸びてきている。その要因としては、基盤整備の拡充や機械の普及による省力化があげられ、これにより、二期作の作付が増加している。平成10年には、作付面積1,130ha、収穫量3,020トンと、前年に比べそれぞれ30ha（2.6%）、620トン（17.0%）の減少となった。これは、八重山地域において干ばつの影響により二期作の作付が減少し、また、台風襲来により被害を受けたことによるものである。」（沖縄県農林水産部 2000: 24）

#### 品種の変化

「本県の水稲の品種は、昭和5年に台湾から導入され、9年に奨励品種となった「台中65号」が作付面積の主流となって普及されていたが、その後、昭和50年に奨励品種となった「トヨニシキ」が倒伏や耐病性に強く、多収性であることから、これまでの台中65号に変わる主要品種として普及し始め、50年代後半まで作付面積の約4－6割が栽培されている。また、昭和60年に奨励品種になった「チヨニシキ」は、これまでのトヨニシキをしのぐ耐病性や倒伏に強く、なおかつ食味も良好であることから昭和62年頃から急速に普及し、現在では作付面積のほぼ10割を占めている。」（石垣統計情報出張所 1997: 7）

#### 生産と消費

「復帰後の本土産米移入量の動きをみると、昭和47-53年度までは8万t前後で推移していたが、それ以降は7万t台まで減少し、更に平成5年以降は6万t台で推移している。また、県内生産量をみると、昭和47年は7,780tであったが、その後減少傾向がみられ特に58年は史上最低の2,120tまで落ち込んでいる。しかし、60年頃から回復がみられ、平成7年はこれまでの2千t台から3,740tとなり増加傾向がみられる。ちなみに、過去45年間（昭.25－平.7）で県内の最も生産量の多かった年は、昭和35年の3万1961tとなっている。次に、沖縄県における米の消費量（推定）をみると、昭和49年の8万7034tをピークに年々減少し、平成7年には6万4210tとなり昭和49年に比べ73.8%とかなり減少している。一方、自給率をみると、平成7年は5.8%となり、わずかながら増加傾向がみられる。」（石垣統計情報出張所 1997: 23）

「沖縄県における米の1人当たり年間消費量は平成7年で43.8kgとなり、これを昭和47年の81.0kgと比較すると37.2kg（54.1%）と大幅に減少しており、米の消費量は年々減少傾向にある。ちなみに、全国（本土）をみても、同様に減少傾向が見えるが、その減少幅は比較的ゆるやかで、年間消費量は沖縄、八重山をかなり上回ってい

る。」（石垣統計情報出張所 1997: 24）

## 第2節 八重山の概況

### 1) 八重山農業の歩みと現状

#### 地理的・自然的条件

「八重山群島は、北緯24度3分ー25度25分、東経122度56分ー124度30分の範囲に位置し、有人島11、無人島20からなり、与那国町はわが国最西端に、波照間島はわが国有人島のなかで最南端に位置している。有人島は11でその中9島を竹富町が占め、石垣市及び与那国町はそれぞれ1島から成っている。無人島は尖閣諸島を含めて石垣市が12、残り8島は竹富町に含まれている。」（石垣統計情報出張所 1997: 2）

「群島総面積は590.70km<sup>2</sup>で、全県面積2,265.42km<sup>2</sup>の26%に相当し、石垣市228.85km<sup>2</sup>、竹富町333.97km<sup>2</sup>、与那国町28.88km<sup>2</sup>となっている。」（石垣統計情報出張所 1997: 2）

「年間平均気温は、石垣島で23.8℃、西表島23.3℃、与那国島23.5℃と高く、とくに夏場は30℃を越える日が多い。」（石垣統計情報出張所 1997: 3）

「年間降水量は、石垣島2,065.8mm、西表島2,342.5mm、与那国島2,332.7mmとわりあい多く、特に5ー6月梅雨期と8ー9月台風期に集中するので、その時期に降雨が少ない年は干ばつになりやすい。」（石垣統計情報出張所 1997: 3）

#### 1960年代

1960年に八重山を調査した大阪市立大学の報告書から概観する。

「八重山では住民の約8割が農業に従事しており、農業が最大の産業であることはいうまでもない。1960年には総戸数9,620戸のうち79.3%の7,629戸が農家であった。行政別にみれば石垣市の農家比率が比較的少なく総戸数の67.5%、ついで与那国町の83.5%、竹富町の90.9%、大浜町の92.2となっている。……1950年では八重山総戸数のうち61%の5,412戸が農家であり行政別には石垣市50.6%、与那国町61.2%、大浜町70.9%、竹富町78.4%であったから、10年前に比べてどの地区でも大きく増加した。」（宮井・中村 1963: 47）

「経営規模は一戸当たり平均111aで1ha以上の農家は農家戸数の42.6%である。（1960）……1950年には1ha以上の農家が農家戸数の26.4%であったから10年間に農家戸数が増加した上に経営規模も拡大した。」＜表28 農家戸数＞（宮井・中村 1963: 47）

「水田率は全琉球で15.8%（1959年）、八重山では22.8%（1960年）であるから八重山の稲作率は比較的高い。この点宮古が蔗作主体であるのと異っている。これは長い間八重山が琉球における稲作地域として重要な地位を占めてきたためである。」（宮井・中村 1963: 49）

「パイナップル生産で琉球の約7割、甘蔗生産で約1割を占める八重山農業は、近年この二つの換金作物の導入で激しい転換期に立たされているといえよう。甘蔗は古くから栽培されているがパイナップルは新しく、特に近年パイナップル作が伸びてきた。1955年パイナップルの八

重山輸出額に占める割合は5.0%であったが、1959年には54.0%に増加した。この間甘蔗（砂糖）は29.2%から17.1%に減少している。」（宮井・中村 1963: 53）

「米は琉球でも政府の買上げによって換金作物となった。八重山では1期作、2期作、陸稲を栽培しているが、2期作、陸稲の作付は少ない。水稻は1960年1期2期合せて4,114トン、10a当り収量は1期作で191kg（1.3石）、2期作で120kg（0.8石）であり、全琉球の1期255kg（1.7石）、2期195kg（1.3石）より低い。」＜表36 水稻一期二期＞（宮井・中村 1963: 53）

「米は補給金制度によって年々1千トンあまりを輸出しているが、八重山では自給できないので2千トンあまりを輸入している。なお八重山における米の生産高は全琉球の2割を占める。」（宮井・中村 1963: 54）

「幕藩時代、島津氏によって製糖制限の行われていた八重山では、明治維新後1881年（明治14）沖縄県庁から新しく甘蔗苗が導入され、1886年（明治19）に製糖が始められた。しかしその後も台風やマラリアのため甘蔗栽培はあまり振わなかった。1891年（明治24）名蔵に八重山糖業株式会社ができたり、1917年（大正6）平得に南洋製糖株式会社が大型含蜜糖工場を設立して大規模な開拓事業に手を染めたりしたが、いづれも台風、マラリアのため工場を閉鎖せざるを得なかった。……1930年（昭和5）頃から県の奨励で……優良種が普及し栽培面積も増大した。……優良種と圧搾技術の改良によりしだいに糖業は軌道に乗り、産糖高も年々増加し、輸出品の首位を占めるようになった。」（宮井・中村 1963: 58）

「1958年（昭和33）八重山製糖株式会社が磯辺に大型分蜜糖工場を建設、翌年から操業を開始した。1961年（昭和36）石垣島製糖株式会社の製糖業が許可され、現在大型蜜糖工場の建設をもくろんでいる。」（宮井・中村 1963: 58）

「パインは1883年（明治21年）小笠原諸島から在来種を導入、沖縄本島国頭郡に広めたのがパイン栽培の初まりである。八重山では1930年（昭和5年）台湾から種苗を取りよせ栽培したのが端緒となっている。」（宮井・中村 1963: 65）

「1955年より琉球政府が経済振興5カ年計画でパインを取上げ、奨励したのと本土の特恵措置の結果、パイン栽培が急速に伸張し、なかんずく、八重山石垣島は自然条件にも恵まれたことからパイン栽培面積の拡張が著しかった。現在、琉球で八重山のパイン面積は全体の2/3を占めている。（残りは沖縄本島北部）。」（宮井・中村 1963: 65）

「琉球の家畜頭数は戦前に比べて少ない傾向にあるが、その中で八重山のみが家畜数の飼育において戦前の水準に達しているか、あるいは凌駕しているのが認められる。中でも牛の飼育が最も発達していることが知られ、沖縄、宮古に比べると農家当りの飼育頭数に大きな開きを示している。このように八重山で牛の飼育の盛んなのは、戦前よりこの地域に未開拓地が多くて、それが広大な牧野を形成して、家畜の飼料に恵まれていたことによる。」（宮井・中村 1963: 74）

「かつて牧場は村の共有であり、放牧は自他村の区別なく行われていた。自村外への放牧は他村民に委託して報酬を与えていたといわれる。現在牧場は町有地などに多く、永小作権により借地している。」（宮井・中村 1963: 75）

農業の現状

「八重山地域の作物別の粗生産額の推移……本地域は北部地域と同様に栽培される作物の種類も多く、多様な農業が展開されている。農業生産は、野菜類を筆頭にしてサトウキビとともに粗生産額の中では主な位置を占めていたが、82年ごろからサトウキビが野菜よりも多くなり、その後はサトウキビを中心とする農業になっている。サトウキビが84年にピークを示し、その後、急激な減少傾向に転じていること、野菜類やパインアップルも減少しているために、全体的に八重山地域の粗生産額は減少傾向を示していると言える。花き類が88年ごろからわずかに生産されているが、その額は小／さい。八重山地域は粗生産額でみると、サトウキビに対する極端な偏りがなく、水稻や葉たばこ等多くの作物が栽培されているのが特徴である。」（大城 1997: 65-6）。

「八重山農業の粗生産額は、100億円から120億円の間で推移している。生産額の推移を作物別にみると、昭和48年にはパインアップルが25%を占め、さとうきび（18.6%）とともに基幹の座を占めていたが、昭和55年には、本土出荷冬春期野菜の進展により野菜が20%を占めてパインアップルと入れ変わった。その後、さとうきび価格が2万円台で推移したことにより、さとうきびの粗生産額が30%を超え、基幹作物の地位をゆるぎないものにしてきたが、平成2年は台風の相次ぐ襲来によって大幅な減産となり、平成2年から平成5年までは20%台のシェアで推移した。平成10年は、大型台風の襲来がなかったこと等、比較的気象条件にも恵まれ、粗生産額は約24億円となり、粗生産額全体に占めるシェアは、平成9年に引き続き20%台となった。一方、畜産は、平成5年には肉用牛の価格低下等もあって30%台に低下したものの、平成6年以降は回復し、平成8年には50%台に推移し、粗生産額及び粗生産額全体に占めるシェアは、年々着実に増加している。なお、全県に占める八重山の割合は、平成10年は12.3%で、ほぼ前年並の割合となっている。」（八重山支庁農林水産振興課 2000: 4）

## 2) 八重山地域的水稻作

### 概況

「八重山地域は県内稲作の主要産地であり、平成10年産の水稻作付面積は、1期、2期合わせて672ha（前年比96.3%）と県全体の59.7%を占める。また、生産量も1,680tで県全体の55.7%を占めるものの、前年に比べ大きく減少した（前年比74%）。これは、昨秋八重山地域を襲った台風10号の影響により、2期作が壊滅状態となったためである。ちなみに、2期作は1期作の約半分（47.7%）の作付実績である。1期作の10アール当たり収量は、八重山地域333kg、県平均350kgとなっており、全国平均515kgに対してそれぞれ64.7%・68.0%と未だ低い位置にとどまっている。食管法が施行され規制緩和がすすむ一方で、慢性的な米余り、自主流通米価格の低迷など、水稻作をとりまく状況は依然として厳しいが、そのような中、島産米販売向上のため、関係者の努力が続けられている。平成6年には与那国町、平成7年には石垣市にそれぞれ近代的設備を備えたライスセンターが再整備され、更に本年度は、従来品種より食味に優れ有利販売が期待できる新品種「ひとめぼれ」への切り替えが行われた。今後



も病虫害防除、適切な水管理、適期刈取、土づくりなどの一連の栽培管理の徹底により、引き続き良質米の供給を図る必要がある。」（八重山支庁農林水産振興課 2000: 15)

#### 水田面積

「平成8年の八重山地域の水田面積をみると、544haで県全体に占める割合は56.7%と最も高い位置にある。これを復帰後の昭和47年と比較してみると、25年間で556ha(49.5%)と大幅に減少し約半分程度となっている。ちなみに県全体をみると、復帰時の2,440haから平成8年には960haとなり大幅に減少している。この要因は、昭和38年の大干ばつに加え、36年のキューバ危機による砂糖の国際価格の急騰の影響を受けて、さとうきび生産者価格が急騰したため、農家が水田を転換しさとうきびに転作したためと思われる。」（石垣統計情報出張所 1997: 8)

「八重山地域の全耕地に占める水田面積のシェアをみると、平成8年には6.4%となっている。ちなみに、復帰時の平成47年をみると全耕地の14.0%のシェアを占めていたものの、その後は年々減少を続け、昭和55年までは10%台を推移しながら推移していた。しかし、昭和56年から再び減少傾向がみられ、60年にはこれまでの10%台を大幅に下回り、以後、ここ数年は幾分増減を繰り返しながらも概ね6%台で推移している。また、県全体の水田面積に占める八重山地域の水田面積割合をみると56.7%となっており、県内ではかなり高い地位にあることがわかる。」（石垣統計情報出張所 1997: 9)

「八重山地域の水稲の作付農家数をみると、昭和45年は1,598戸で、総農家数の40.8%であったが、その後次第に減少傾向をたどり、平成7年には325戸となり、総農家数の13.9%となっている。1戸当たりをみると、昭和45年の1.0haから、平成7年には約倍の2.1haと県平均の1.6haを大幅に上回り、規模拡大が進んでいることがわかる。」（石垣統計情報出張所 1997: 10)

「八重山地域における水稲の作付面積は、ピーク時の昭和45年は1,543haであったが、昭和48年代からこれまでの1,000ha台を大幅に割り込み800-700ha台で推移し、昭和57年から再び減少傾向がみられ、平成5年までは概ね500ha台で推移している。しかし、平成6年からやや増加傾向がみられ、平成7年には673haとなったものの、それでも昭和45年と比較すると870ha(56.4%)も減少している。」（石垣統計情報出張所 1997: 12)

#### 水稲生産

「平成7年産の八重山地域の水稲作付面積は、1期、2期合わせて673haとなっており県全体の59.6%となっている。また、収穫量は2,070tで県全体の55.3%を占めている。これを期別にみると、全体の中で1期作が大きなウエイトを占めており、作付面積、収穫量ともそれぞれ65.8%、72.9%となっている。」（石垣統計情報出張所 1997: 14)

「八重山地域における水稲の収穫量は、昭和45年の3,968tをピークに、昭和50年代から作付面積の減少に伴い収穫量も大幅に減少している。また、昭和60年頃から平成6年にかけては1,400-1,900t台で推移していたが、平成7年には2,070tとやや増加の傾向がみられる。一方、10a当たり収量を参考までに全国平均(過去10年平均値)

と比較してみると、八重山は平均295kgで全国の486kgに対し60.7%とかなり低い位置にある。」（石垣統計情報出張所 1997: 16）

「八重山地域における平成7年産米の粗生産額は6億5900万円で全体の6.0%を占めている。ちなみに、県全体について米の粗生産額をみると、平成7年産で11億9200万円となり、そのシェアは1.2%とかなり低い水準にある。一方、八重山地域が県全体に占める米の粗生産額シェアは55.3%とかなり高い位置にあり、県内では有数の米生産地域となっている。」（石垣統計情報出張所 1997: 18）

### 第3節 石垣の概況

#### 1) 石垣市の特徴

##### 石垣市の歩み

「八重山は1390年、初めて琉球王国に進貢してその附庸になったといわれ、ついで、1500年の「赤峰の乱」を契機として王府の支配下におかれた。1628年、王府は八重山の25ヶ村を宮良、大浜、石垣の三間切に分けて、それぞれ頭職を置き、蔵元において統治せしめた。さらに、1632年には、行政監督官として在番を派遣、時には検使・使者など派遣して統治を監督させた。一時期、異国船を監視する大和在番が常駐した。……明治12年、廃藩置県の布達によって沖縄県となり、同時に在番制度は廃止された。翌13年、八重山島役所が設置され、同29年、八重山郡制施行により島役所は島庁と改称された。翌30年、間切役場が誕生し、蔵元は廃止となった。明治41年、沖縄県島嶼町村制が施行され、従来の間切は村に、村は字に改称されたが、八重山は特別町村制施行により、八重山村となった。大正3年県令を以て八重山村は、石垣、大浜、竹富、与那国の四村に分村された。大正15年石垣村は石垣町となり、昭和22年、南部琉球軍政府の認可によって市に昇格、昭和39年には大浜町を合併して一島一市になった。昭和40年7月、公有水面埋立地の美崎町を行政区に編入し、昭和45年、同じく新栄町を、さらに昭和53年浜崎町、平成2年八島町を行政区に編入した。」（石垣統計情報出張所 1999: 1）。

「平成10年12月現在、石垣市は人口44,676人で……」（石垣統計情報出張所 1999:

1)

##### 石垣市の自然条件

「石垣市は北緯24度20分、東経124度9分、鹿児島から1,200km、沖縄本島（那覇）から450km、台湾へ260kmの地点に位置している。地形は東西27.8キロ、南北31.3キロで、……中央北よりに沖縄最高峰於茂登岳（526m）がそびえ、……」（石垣統計情報出張所 1999: 3）

「八重山群島は、地理的に北回帰線のすぐ北に位置し、大小31の島嶼で形成され近海を黒潮が流れている。石垣島の年平均気温は、23.8℃で、四方が海洋であるため年間をとおして気温の日較差（日最高気温と最低気温の差）は小さく、湿度は78%と高いことから「亜熱帯海洋性気候」と言われている。」（石垣統計情報出張所 1999: 4）

「年平均日照時間は1,845時間で、……年間降水量は2,000mmを超え、」（石垣統計情

報出張所 1999: 5)

## 人口動態

「昭和30年以降の世帯数及び人口の動きを国勢調査結果からみると、世帯数は昭和30年には6,492戸で、35年、40年と増加していたが、45年は一時減少したものの50年から増加に転じ年々増加し平成7年には14,207戸となっている。これを昭和60年と比べると1,918戸(15.6%)の増加となっている。一方、人口は昭和30年の33,131人から35年、40年と増加、50年、55年にかけて一時減少、それ以降は増加に転じて平成7年には41,777人となっている。一世帯当たり世帯員をみると昭和30年5.1人から年々減少し、平成7年には2.9人に減少している。このことは人口の増加率以上に世帯数のそれが高くなっていることから分かります、それだけ核家族化が進んでいることを示している。」(石垣統計情報出張所 1999: 6)

「高齢化は進展しているが、生産年齢人口は下げ止まりを示している」(石垣統計情報出張所 1999: 7)。

## 2) 石垣農業の歩み

### 昭和初期の状況

以下では、1935(昭和10)年に刊行された『石垣町誌』によりながら概観する。跋文によれば、本書は「石垣町の調整施行十周年記念誌として、昭和9年4月、当時の町長山口盛包氏の依頼により、郷土史の研究家喜舎場永珣先生(当時49才)が編纂委員として執筆、翌10年8月脱稿、11月印刷出版されたもの」である。

「本町は其の面積七方里、本郡総面積の一割六分余、現住戸数三千五百五十九戸、其の人口一万八千四十七人、一方里当平均人口二千五百七十八人余にして、」(喜舎場[1935] 1975 311)

「県は各町村に農業技術員を設置する様大正6年県令を以て発布せられた結果、本町は大正7年農業技術員を設置した。大正11年町農会を設置し、技術員を置き、農会の下に農民の小団体である農事改良組合を作り、農政にかんする機関を少々完備させ、更に支庁及び本町にも県からの糖業・蚕業・畜産・普通農事・林野開発の指導員を駐在せしめて指導奨励を加へつゝ有る為に、事業経営一新し、発達の気運に向かいつゝある。」(喜舎場[1935] 1975 313)。

「本町に於ける農家戸数は二、一四一戸で、其の利用する耕地は田四、〇〇九反歩、畑一〇、〇六一反歩、外に民有有租地で山林四五、五六一反歩、牧場一三、一八〇反歩、原野一四、七一六反歩である。」(喜舎場[1935] 1975 313)

また、農家戸数表(昭和9年末現在)によれば、専業農家は自作982戸、自作兼小作407戸、小作415戸、計1,804戸であり、兼業農家は自作131戸、自作兼小作95戸、小作120戸、計346戸である。

「従来の米作は、1反歩当り僅かに9斗余であったが、大正13年頃より郡農会の努力で郡外優良種中村萬作台中65号を移入し、湧川原浦田原に於て採種圃を置き、各集団田地には指導圃を設置し、其の改善と金肥の利用等をなすと共に、米作に関する講習・講話並に立毛品評会・塩水選の励行等をなしたため、収穫高に於て2倍となり、更

に2期作の普及奨励、優良品種の移入栽培等のために、従来の生産高の4倍を上げ、反当り2石余の増収を得て居る。」（喜舎場 [1935] 1975 315-6）。

また、米生産高累計年比較表（自昭和4年至昭和9年）によれば、昭和4年から9年の間でもっとも作付面積および数量が多かったのは、1期作が4,158反9,012石（9年）、2期作が2,799反（8年）3,239石（7年）であるが、1期作が面積はほぼ一定で数量が倍増しているのに対して、2期作は面積数量ともに年によって増減している。

>（喜舎場 [1935] 1975 316）。

「甘蔗は明治14年本県庁より八重山島役所へ蔗苗を3株（10本余）の送付を得て、之れを元八重山蔵元敷地に植付たのを本郡甘蔗栽培の嚆矢とす。越えて明治17年に甘蔗苗8千本、県から送付され、育種場内2反歩余の試験地に植付けた。明治19年製糖を始め、一般農家には明治20年より蔗苗を配布して栽培奨励をなし、同25年頃より甘蔗共同耕作組合を設け、一層蔗作の普及奨励をなしたけれど、其の努力功を奏せず、同33年頃よりは全く中止の状態となった。」（喜舎場 [1935] 1975 319-20）。

「同39年糖業分業法に依る組合を設け、極力奨励をなしたが又数年ならずして解散の止むなきに至った。……大正6年東洋製糖会社八重山製糖所が大浜村「ペーギナー」に於いて設立され、益々斯業発達せんとする気運を見たけれども、時恰も欧州戦争当時で分蜜機購入困難に陥り、含蜜糖製造をなしたけれども事業予想通り運ばず、終に失敗廃止された。……支庁には昭和3年県より糖業技術員が駐在し、改良大茎種の植付指導奨励をなすと共に、昭和8年には本町にも駐在技術員を設置した。」（喜舎場 [1935] 1975 320）。

#### その後の変化

「八重山郡には分蜜糖工場がなく殆ど小型の含蜜糖工場であったが、昭和10年10月石垣島に台湾人謝元徳外6人を創立発起者とする資本金20万円の大同拓殖株式会社が設立された。……初年度の昭和11年期に黒糖419kgを生産したという。」（池原真一 1979: 208）。

「石垣島におけるパイナップル栽培面積の増加は、缶詰工場の建設を促進し、大城万栄、林発、りょう見福および山元仲彦等は相ついで小工場を建てたが、1954年これら4工場は合同して琉球缶詰株式会社を設立し又南琉食品加工組合が別に設立された。」（池原真一 1979: 297）。

#### 1960年代

以下では、早稲田大学による石垣および西表の調査報告書から概観する。

「現在石垣市にはパイナップル加工工場が7社8工場あり、各地で収穫されたパイナップルを加工して缶詰として本島、日本本土へ輸移出する。」（新井 1969: 15）

「パイナップル産業の有利な面と考えられるのは、それが換金作物であるということである。現金収入が得られることは農業経営にとって都合がよい。またあまり力仕事は要求されず、一度に集中した労働力は必要でないため、多くの農家で栽培されている。八重山の土質、土壌及び気候条件がこれに適するのは当然だが、さらにこの作物は、風邪や干害に対しても他作物よりも比較的強く、産地傾斜地にもよく生育するので、山地開発によって栽培地を拡張することが出来た。このこともパイナップル産業を発展させる大



きな要因になった。経済的にみた場合でも、パイン産業は加工度の高い産業である故、他産業への波及効果が期待出来るのである。」（新井 1969: 15）

「本土の製糖会社の資本導入による合併会社が石垣島に一社ある。全石垣島のさとうきびはここに集められ、加工され分密糖、黒糖として輸移出される。」（新井 1969: 16）

「さとうきびは春植えと夏植えがあるが、一度植えさえすれば収穫期まであまり手入れは必要でない。だが収穫時には一度に多くの労働力が要求される。」（新井 1969: 16）

「結回（ユイマル）という共同作業組織があるが、収穫時期が重なるので、他から人手を調達しなければならない。人手の不足の折、賃金も上昇する。1日当り男2ドル女1ドル50セントの協定賃金も破られがちである。従って人手調達が困難な農家では、作付面積を拡張するのも考えものだ、ということになる。」（新井 1969: 16）

「67年度の石垣島の農家人口は201000人であり、その他の就業状況は（表-6）の通りである。サービス業、商品販売業に従事する人々の数が目だつが、とりわけ、製造加工業の従事者が全従業者の65%を占めていることが注目される。その中でも農産物加工業（パイン缶詰製造）が全就業者の52%を占めている。もっともこの人数には季節短期工も含まれているが、それでも石垣島の非農業従事者の40%近くが農産物加工に従事していることはおどろくべきことである。しかも農家自体もこの加工業への原料供給がその経済の主力になっていることになると、まさに石垣島、八重山はパイン産業に依存しているといっても過言ではない。この製品は主として輸移出され、金額にして全体の60%を占める。おまけにさとうきびの輸出高を加えると全体の80%がこのパインアップル、さとうきび産業に依存しているのである。（表-7）」（新井 1969: 17）

「現在石垣には、畜産業としては肉用牛があり、ショートホーン種、ヘレホート種が中心であり、沖縄本島に生産仔牛を移出している。だがその経済上の役割はごく僅かである。」（新井 1969: 20）

「石垣でも離農、離村現象はみられ、そのうちでも15才以下の農家人口の減少が著しい。（グラフ-3）」（新井 1969: 21）

### 3) 石垣市の農業の現状

80年と94年の粗生産額をみると「石垣市においては57億2500万円から46億200万円となり、11億2300万円、20%の減少となっている。米、いも類、果実類、花き類および葉たばこなど多くの作物で増加した。サトウキビは急激に増加した後、減少し、ほぼ同額となっている。しかしながら、野菜類、パインアップルおよびその他の作物で大きく減少した。」（大城 1997: 67）。

以下は、『石垣市の農林水産業 平成11年3月』（沖縄農林水産統計情報協会、1999）によりながら、石垣市の農業の現状を概観する。

#### 農家戸数

「農業センサス結果からみると、石垣市の農家数は昭和60年以降年々減少し、平成7

年は1,709戸となっており、これを平成2年（前回）と比べると82戸（4.6%）の減少となっている。また、昭和50年以降の農家の動きをみると、年によって増減はあるが過去20年間で206戸（10.8%）の減少となっている。……次に、農家率（総世帯数に占める農家数の割合）をみると、総世帯数の増加に対し農家数の減少で、平成7年の農家率は12.0%となり、沖縄県平均の7.8%に比べると4.2ポイント高くなっている。これは、平成2年に比べ1.7ポイント、昭和50年に比べると9.2ポイントの低下となっている。なお、沖縄県全体に占める農家数の割合は5.4%となっている。」（石垣統計情報出張所 1999: 13）。

「石垣市の専兼業別農家数は平成7年農業センサス結果によると、専業農家は691戸（40.4%）、兼業農家1,018戸（59.6%）となっている。これを平成2年と比べると、専業農家は76戸（9.9ポイント）、兼業農家は6戸（0.6ポイント）とそれぞれ減少している。また、専業農家のうち男子生産年齢人口のいる農家は408戸で、平成2年に比べると94戸（18.7%）減少している。一方、兼業農家は、第1種兼業農家が329戸で平成2年に比べ2戸（0.5%）と僅かながら増加しているものの第2種兼業農家は626戸で、平成2年に比べ8戸（1.3%）減少している。なお、専兼業農家の割合を沖縄県の平均と比べると専業農家は7.2ポイント高く、兼業農家は逆に7.2ポイント低くなっている。」（石垣統計情報出張所 1999: 14）

「平成7年農業センサス結果によると兼業農家数は1,018戸で総農家数の59.6%を占め、平成2年並の結果となっている。これを、家としての主な兼業種類別にみると、恒常的勤務は701戸、出稼ぎ臨時雇157戸、自営兼業160戸となり、兼業においては雇用兼業858戸、自営兼業160戸となっている。雇用、自営兼業別に平成2年と比べると自営兼業は72戸（81.1%）増加したものの雇用兼業は逆に78戸（8.3%）減少している。因みに雇用、自営兼業別の構成比をみると、雇用84.3%、自営15.7%となっている。」（石垣統計情報出張所 1999: 15）

「平成7年の経営規模別農家数をみると、2ha以上は772戸（45.2%）を占め、次いで0.5-1.0ha未満が298戸（17.4%）、1.0-1.5ha225戸（13.2%）、1.5-2.0ha186戸（10.9%）、0.5ha未満135戸（7.9%）の順となっている。……特に2.0ha以上の農家の動きをみると昭和55年・60年・平成2年と37%前後で推移していたが、平成7年は45.2%となり、沖縄県平均の13.7%を大きく上回っていることから分かるように石垣市の農家の規模拡大が図られていることを示している。」（石垣統計情報出張所 1999: 16）「平成7年の総農家数は1,709戸で、このうち、自給的農家は84戸（4.9%）、販売農家は1,625戸（95.1%）となっている。その割合を沖縄県全体と比べると、自給的農家は19.1ポイント低く、逆に販売農家は19.1ポイント高く、販売農家はかなり高い割合になっている。販売農家について、農産物販売金額1位部門別農家数の割合でみると、基幹作物である、さとうきび・葉たばこの工芸作物部門が58.9%で最も高く、次いで肉用牛部門15.0%、果樹類7.5%、稲作6.4%と続きこの4部門が全体の87.8%を占めている。それら4部門の割合を、平成2年に比べると、肉用牛、果樹、稲作では6.5ポイント、3.0ポイント、1.9ポイントとそれぞれ増加しているが、工芸作物部門は16.0ポイント減少したものの、依然として1位部門の約6割を占めている。」（石垣統計情報出張所 1999: 18）

## 農業労働力

「平成7年の石垣市の農家人口は、5,936人で、平成2年に比べると580人（8.9%）減少している。総人口（41,777人）に占める農家人口の割合は14.2%で、平成2年に比べ1.6ポイント減少しているが、沖縄県全体の9.1%に比べると5.1ポイント高くなっている。……若年層と働き盛り階層で減少し、老年階層では増加傾向にあり、農家人口の高齢化が進行していることを示している。また、1戸当たり農家人口は3.5人で、沖縄県全体の3.7人に比べ僅かではあるが0.2人少なくなっている。」（石垣統計情報出張所 1999: 19）

## 農用機械

「平成7年農業センサス結果から、農業機械の個人所有台数をみると、動力耕うん機・農用トラクターは、1,726台で、平成2年に比べ150台（9.5%）増加した。これを機種別にみると歩行型821台（47.6%）、15馬力未満159台（9.2%）、15-30馬力175台（10.1%）、30馬力以上571台（33.1%）となり、平成2年と比べると歩行型は95台（13.1%）、30馬力以上は92台（19.2%）とそれぞれ増加し、逆に15馬力未満33台（17.2%）、15-30馬力4台（2.2%）減少している。また、さとうきび収穫関係の機械は、関係機関の機械整備に伴い個人所有は減少しているが、個人で確保しなければならない動力防除機は大幅に増加している。」（石垣統計情報出張所 1999: 21）

## 耕地

「平成10年の石垣市の経営耕地面積は5,470haで前年に比べ120ha（2.1%）減少した。これを、田畑別にみると、田は318haで前年同様であったが、畑は5,150haで前年に比べ、120ha（2.3%）減少した。これは、田畑とも新規開墾はあったもののそれを上回る耕作放棄等があったことによるものである。畑の動向を畑種類別にみると普通畑及び樹園地（主にパイン園）は牧草地への転換、耕作放棄、宅地への農地転用等で減少したが、牧草地は普通畑（さとうきび畑）樹園地（パイン園）等からの転換や草地開発事業の実施に伴い増加した。1戸当たり耕地面積は沖縄県平均が1.2haであるのに対し、石垣市は3.6haと沖縄県平均の3倍となっており、大規模経営農家が多いことを示している。」（石垣統計情報出張所 1999: 22）

「石垣市における平成9年の農作物作付延べ面積は、5,250haで前年に比べ80ha（1.5%）減少したが、耕地面積の減少が作付延べ面積の減少を上回ったことにより耕作利用率は93.9%となり、前年に比べ1.5ポイント上昇した。次に、作付延べ面積を作物別にみると、さとうきびが42.5%で最も高く、次いで飼肥料作物34.3%、水稻9.2%、パインアップル4.2%の順となっている。これを、前年と比較すると、水稻は9ha（1.9%）、飼料作物は40ha（2.3%）それぞれ増加したが、さとうきびは前年並み、パインアップルは加工場が閉鎖したことから119ha（35.0%）減少となっている。」（石垣統計情報出張所 1999: 23）

## 各部門

「石垣市のさとうきびの生産動向をみると、収穫面積は昭和63年から平成元年にかけて増加しているが、その後は減少し、平成4年以降大きな変動はなく1,100-1,200haで推移し、平成9年には1,150haとなり、前年並の面積となった。これを、作型別割合でみると、夏植は921ha（80.3%）、春植112ha（9.8%）、株出114ha（9.9%）と

なり、夏植収穫面積が8割を占めている。一方、収穫量は収穫面積の増減や台風干ばつ等の自然条件に左右されることから大きな変動が見られる。特に平成8年には干ばつや相次ぐ台風の襲来で大幅に減少し、近年最も低い64,000 tであったが、平成9年産は天候にも恵まれたこともあって、反収もアップし、91,200 tと豊作であった。」

(石垣統計情報出張所 1999: 25)

「石垣市の野菜生産の動向をみると、作付面積は、昭和63年には299haあったが、毎年減少を続け平成7年には150haまで落ち込み、その後は僅かながら増加に転じ、平成9年は160haとなっている。これを、昭和63年と比べると139ha (46.5%) 減少、平成5年と比べると11ha (6.4%) 減少となっている。一方、収穫量は平成2年には3,980 tあったが、その後は作付面積の減少に伴い、増減を繰り返しながら減少し、平成9年は2,540 tとなっている。種類別の作付面積割合をみると根菜類が23.8%を占めて最も多く、次いで果菜類16.3%、葉茎菜類10.6%、その他は41.9%となっている。」(石垣統計情報出張所 1999: 27)

「石垣市のパインアップルの生産状況をみると、経営体は昭和63年の226戸から徐々に増加したが、平成5年の276戸をピークに減少に転じ平成9年は137戸となり、平成5年に比べると約50%と半減している。栽培面積は平成2年の484haから減少傾向にあったが、平成8年に加工場が閉鎖され、さらに減少し、平成9年は152haとなっている。また、出荷量も昭和63年には10,700 tあったものの、それ以降は減少を続け平成8年の工場閉鎖で大幅に減少し、平成9年は2,090 tとなっている。これを平成5年と比べると23.3%で大幅な減少となっている。出荷量の内訳をみると昭和63年は加工用が93.3%、生食用は6.7%であった。ところがそれ以降生食用が増加しその割合は平成9年には78.9%となっている。」(石垣統計情報出張所 1999: 28)

「石垣市の切り花の生産状況をみると、栽培(作付)面積は、昭和63年は9haであったが年々増加して平成7年は31haとなった。平成8年から価格の低迷などにより減少に転じ、平成9年は28haとなっている。これを種類別にみると昭和63年から平成2年まではきくが約5-6割を占めていたが、それ以降はきく以外の切り花が増加し平成9年ではそれが約8割を占めている。次に、出荷量をみると、面積と同様に平成7年までは年々増加し4,670千本であったが平成8年から減少に転じ平成9年は3,930千本となり平成8年に比べ170千本(4.1%)減少している。これを種類別にみると、きく825千本(21.0%)、洋らん380千本(9.7%)、その他(ヘルコニア、ジンジャ類が主)2,730千本(69.3%)となっている。」(石垣統計情報出張所 1999: 29)

「石垣市では主な果樹としてバナナ、パパイヤ、マンゴー、パッションフルーツ等が栽培されている。果樹の結果樹面積は平成元年から25-31haの増減をくり返しながら推移し、平成9年は25haとなり、元年に比べ6ha(19.4%)減少している。これを種類別にみると、マンゴーは15haで元年に比べ13ha(650%)と大幅に増加してきたのに対しバナナは6ha、パパイヤは1haでそれぞれ10ha(62.5%)と3ha(75.0%)減少している。一方、収穫量・出荷量を種類別にみるとマンゴーは面積の増加に伴い平成9年は58 t収穫され、元年に比べ50 t(625.0%)、出荷量は51 tで44 t(628.6%)とそれぞれ大幅に増加した。……また、バナナ及びパパイヤは収穫量38 t、6 t、出荷量31 t、5 tとなっている。これを平成元年に比べると、それぞれ収穫量45 t

(54.2%)，11 t (64.7%)，出荷量31 t (50.0%)，3 t (37.5%)の減少となっている。」(石垣統計情報出張所 1999: 30)

「石垣市の葉たばこ生産の動きをみると，輸入自由化に伴い生産調整等，葉たばこ生産環境は厳しい状態が続いたが，平成元年から増産傾向に転じ，平成9年は栽培農家86戸，収穫面積226ha，収穫量582 t，生産額10億6,691万円となり，生産額がはじめて10億の大台に達した。平成10年は栽培農家90戸，収穫面積は256haで前年に比べ増加したが，長雨等の影響を受け，疫病，白星病，ヨトウムシ類の発生による被害があり，収穫量は302 t，生産額は5億6,139万円となり前年に比べ大幅な減少となった。平成9年を，平成元年と比べると農家は38戸 (79.2%)，面積は153ha，収穫量441 t (312.8%)，生産額8億683万円 (310.2%)とそれぞれ増加となり，生産額がはじめて10億円の大台に達した。」(石垣統計情報出張所 1999: 31)

「石垣市の平成9年の農業粗生産額は，97億2,700万円で前年に比べ10億9,100万円 (12.6%)増加となった。これは，耕種部門は47億8,900万円で4億500万円 (9.2%)，畜産部門は49億3,300万円で6億8,500万円 (16.1%)とそれぞれ増加したことによるものである。耕種部門は全体の49.2%を占めているが，その内訳をみるとさとうきびは19億2,200万円 (19.8%)，葉たばこ10億6,700万円 (11.0%)，野菜5億5,000万円 (5.7%)，米4億4,400万円 (4.6%)，パインアップル2億5,500万円 (2.6%)，花き2億2,500万円 (2.3%)等となっている。さとうきび，葉たばこは前年に比べ6億1,000万円 (46.5%)，4億6,900万円 (78.4%)とそれぞれ大幅に増加したのに対し，野菜9,600万円 (14.9%)，米3,000万円 (6.3%)，パインアップル6,400万円 (20.1%)とそれぞれ減少している。畜産部門は50.7%を占めており，その内訳は肉用牛が42億5,900万円 (43.8%)，豚は2億7,700万円 (2.8%)，鶏卵2億2,100万円 (2.3%)等となっている。肉用牛は，前年に比べ6億8,200万円 (19.1%)増加している。」(石垣統計情報出張所 1999: 32)

「石垣市の肉用牛生産は畜産基地整備事業や団体営草地整備事業等で畜舎の整備や採草地が確保されたことで，飼料生産のための機械等の導入が進展し，飼養規模の拡大が図られた。このことにより，平成10年の飼養頭数は2万6,510頭となり，前年に比べ1,520頭 (6.1%)増加し，平成元年に比べると1万6,939頭 (177.0%)と大幅に増加している。飼養戸数は平成元年には425戸であったが，平成10年には670戸となり平成元年に比べ245戸 (57.6%)も増加している。飼料生産のための機械の整備やラップサイレージ等の粗飼料生産技術が開発され，労働生産性が向上したこと等もあり，一戸当たり飼養頭数は平成元年には23頭であったが，平成10年は40頭となり平成元年に比べ17頭 (72.0%)の増加となっている。そのことからわかるように経営規模の拡大が進んでいる。」(石垣統計情報出張所 1999: 40)

「石垣市の豚の生産状況をみると，飼養戸数は平成元年には34戸であったが，その後は年々減少し，平成10年は飼養中止が1戸あったものの新規経営体が2戸あったことから16経営体となっている。これを，平成元年に比べると18戸 (52.9%)減少している。この主な原因は，豚価の長期低迷や飼養者の高齢化および後継者不足による労働力の低下並びに環境問題等によるものと思われる。一方，飼養頭数をみると，平成元年には8,361頭であったが，それ以降増減をくり返しながら推移し，飼養戸数と同様



な理由等からの大規模飼養者の飼養中止があり、平成10年には4,900頭となっている。これを平成元年に比べると3,461頭（41.4%）、平成9年に比べ2,900頭（37.2%）の減少となっている。一戸当たり飼養頭数は飼養戸数の減少に伴い平成元年以降年々増加し平成9年は520頭までになり、大規模経営傾向にあったが平成10年は306頭と、平成元年に比べると60頭（24.4%）増加しているものの、平成9年に比べると214頭（41.1%）の減少となっている。」（石垣統計情報出張所 1999: 41）

#### 水稻作の現状

「石垣市の水稻作付面積の動きを見ると、平成3年までは増減を繰り返していたが3年以降増加に転じ平成9年には484haとなり、ここ数年で最も高い作付面積となっている。これは、2期作の作付面積が増加したことによるものである。しかし、平成10年は干ばつの影響を受け作付け不能の水田があり、作付面積は465haとなり、前年に比べ19ha（3.9%）減少した。それでも、沖縄県全体の4.1割を占めている。一方、収穫量は作付面積の増加に伴い平成9年には1,600 tまで増加してきたものの、平成10年は、2期作において面積の減少と台風の被害を受け、1,150 tとなり、前年に比べ470 t（29.0%）減少している。」（石垣統計情報出張所 1999: 26）

#### 3) ヒアリングから

以下では、石垣市における各種機関において行なったヒアリングの結果を示す。

#### 石垣市農政課

##### (1)

##### 稲作について

稲作は県全体の1/4を占めている。水稻のみで陸稲はない。水稻は土地改良が進んでいる。二期作をやっている。6-7月と11月が刈取で、今は一期作の植え付けをしている。280haのうち180haが二期作で、100haは天水田なので一期作のみ。岩手県が凶作になったとき、種籾を供給した。それがきっかけで「かけはし」といって今も交流している。産業祭などで出品する。減反はJAと出荷量を調整しながら決めている。割当面積は来っていない。というのは、転作ができないので水稻を作らざるをえないし、出荷量を減らすためには二期作をしなければいいので。米は本島へ出荷している。

##### サトウキビ

農業はサトウキビが主体だが、最盛期に18万 t あったのが、今年は6万5千 t まで減少している。その理由。収益性が少ない、単作では生活できない、価格が数年来据え置きになっている、病害虫も多い。価格は北海道の甜菜とあわせて決めている。一昨年から糖度によって価格差をつけている。米と比べて、価格保証があっても価格そのものが低いので厳しい。本島では株出しがあるが、石垣島では、病害虫のために全体の15%にとどまる。ほとんどが夏植で、8-9月頃。暑いので重労働になる。手刈りが機械化されて、畜産に移っている。名蔵に製糖工場がある。サトウキビの株のあいだに大根などの野菜を植えて栽培面積を増やそう、という試みが去年の秋から始まった。土地改良が進んでいないので、干ばつなどで収量が低くなっている。台風の被害もある、突風が70m/秒もある。しかし、サトウキビやパインはそれに耐えられる。収

穫面積は耕地面積の半分になる。というのは、植え付けた翌年に収穫するので。株出しのやり方だと毎年収穫できるが。収穫は、トラックが畑にはいってクレーンでつり上げる。大型ハーベスタで刈り取りとチョッピングをする。

#### 葉たばこ

サトウキビの減少の代わりに、葉たばこが増えてきている。今年は230haになる。

#### パイン

パインは、最盛期に5万tあったが、今では2-3000tまで減少した。輸入自由化のため。96（平成8）年度は5500t。それで、本島から1000tもってきている。というのは、石垣産だけでは加工工場が成り立たないので。ところが、今年に工場が閉鎖されることになった。それで、生食用を主とすることになるが、生食用として出荷できないものは加工施設をどうするかが課題として残っている。本島の工場へ輸送することになるかもしれない。島の中央部が酸性土壌なので、作付けが集中している。開南、川原が中心。

#### 畜産

畜産はかなり伸びている。草地が増えているので、サトウキビ畑がそれに食われていく。肉用牛がほとんど。

#### その他の作物

マンゴーの栽培。輪菊の出荷、これは本土の彼岸にあわせてピークとなる。洋蘭は「トレファン」を本土へ出荷している。航空の積み残しが問題で、それは新空港の建設問題が解決されていないから。養蚕は、復帰後やってきたが、外国産に負けてやめている。本土と違って年中桑があるので、1年に10回飼うことができた。野菜は夏は作らない、本土から安くはいってくるので。冬はこちらで作って本土へ出す。行政としては自給をめざして指導しているが。

#### 近年伸びているもの

畜産（肉用牛）、葉たばこ。花は一時かなり伸びたが、病害虫が出て停滞している。熱帯果実（パッションフルーツ、ライチなど）。びわは名蔵などで栽培している。本土輸送は、いたみがでたためやめている。マンゴー、スイカ、メロン。これらは、川原、白保で栽培されている。いろいろなものを栽培するというよりも、サトウキビを基幹としながら、何かもう一つを作るという形だ。

#### 年間の農事

- 12月末－3月：サトウキビ収穫
- 3月：田植え
- 7月10日：米の刈り取り
- 7－8月：パインの最盛期
- 7月末：田植え
- 9月：サトウキビ植え付け
- 11月10日：米の刈り取り

#### 移入

星野、大果、伊野田は本島や宮古島からの移民による開拓。嵩田は台湾から昭和8年頃移住してきて、そこでパイン栽培が始まった。

## 兼業化

専業農家は少なくなっている。サトウキビ＋水稻、サトウキビ＋葉たばこ、とほとんどがサトウキビと組み合わせた複合経営となっている。兼業は、大工や日雇労務（土木）が多い。サトウキビは粗放的にやれるので、土日だけやってあとは勤めるというのも多い。

## 高齢化

農家の高齢化が進んでいる。若手がない。「ふれあいの翼」や「ふれあいの旅」などで若者同士の交流を図っている。タイなどへ研修する。

## 集落

川平：リゾート地域で黒真珠の産地。集落の隣に水田がある。土地改良されていないので天水田。新川：土地改良されている。水田は集落の近く。各集落に公民館長がいる。毎年1－2月に変わる。農業をやっているとは限らない。農政課では公民館長を6月におさえる。教育委員会のもとに公民館連絡協議会がある。公民館体制のなかに産業部がある。農協は、作目部会で集落に班長をおいている。製糖工場は、各地域に工場直属の原料担当員（原料員）をおいて収穫時期の調整をしている。

## 主要産業

観光産業は年間40万人の観光客。製糖工場。漁業。

## そのほか

1963（昭和38）年に石垣市と大浜町が合併した。農協は、94（平成6）年に、石垣農協、大浜農協、竹富農協が合併してJA八重山郡農協となり、単位農協はそれぞれ支所となった。営農販売課は大浜支所にあり、営農指導は大浜支所でやっている。

豊年祭は7月20-1日が新川、石垣、大川、登野城。

人口流出について。若者がここには産業がないので本島や本土へ行く。それで人口が4万2-3000人で変化しない。世帯数が増えているのは、大家族から核家族になってきているから。石垣でも北部が過疎化している。

本島より2℃高いが、夏場は周囲が海なので32℃くらい。だが紫外線が強いので海で甲羅干しはできない。

## (2)

### 作物

基幹はサトウキビで、90（平成2）年の粗生産80億円。パインは加工工場を去年12月に閉鎖して生食用のみ。というのは、8000tないとペイしないので。1000tは本島に加工用として運んでいる。畜産は、肉用牛で県全体の6割になる。石垣市で2万頭。現在、サトウキビとパインが落ちて、その分肉用牛と葉たばこが伸びている。

### 稲作

ライスセンターは3年前につくる。県下で最も多い。八重山地域で6割を占める。減反ではなく、むしろ増反政策。転作の割当面積はきつくて、書類はあるけど通用しない。米の自給率は3%なので増やす傾向にある。作付けは350haで、これを土地改良の積み上げ値である427haへもっていく計画でライスセンターができていく。品種はチヨニシキ。6月いっぱいまで収穫が終わるので、超早場米として全国出荷をねらっている。二期作は全体の1/3。一期作が350-60kg/反、なかには500kgもある。二期作は

収量が落ちる。一期目は1-2月田植えで6月収穫。二期目は8月田植えで10-11月収穫。一期作で米を作った後の裏作はやらない。米の流通は、大半は農協を通じておこなっている。

#### 製糖工場

10万tが適正規模だが昨年は6万4千tだった。88（昭和63）年の16万tが最高。昨年以下になると工場が大変なので、10万tにもっていくのが大きな課題だ。収穫面積は1100ha。単価はt当り2450円。この価格を上げるのは難しい。反収は沖縄全体で5.1t、石垣市は6.8t。これを10tにもっていけば、1000haあるので10万tになる。そのためには土作りが課題だ。反当11tとっている農家もある。がんばれば15tも可能だ。だが、土壌にあった土作りをやっていないとうまくいかない。離島には、含糖蜜工場がある。

#### 牧場

サトウキビ畑が採草地に展開している。というのは、畜産は機械化が進み、また台風の影響がないので、畜産が伸びているから。もともと牧場が多い。10ha以上は50ヶ所、全体で100や200もある。ほとんどが個人単位。市有地を50年間の永小作権で400ha近くやっているとところは共同で3ヶ所（平久保牧場、久宇良牧場、伊原間牧場）ある。最近は法人化している。

#### 葉たばこ

本土では減っているが、八重山地域では増えている。昨年は9億円、今年は10億円と粗生産額が毎年1億円上がっている。これを将来は15億円にしたい。労力は薬剤散布。若い農家も入り込んでいる。というのは、サトウキビは2年目で収穫、と比べると回転が速いというのが魅力だから。それに、収穫が6月に終わるので台風に遭わない。それに対して、サトウキビは台風被害があり、それがないと干ばつになる。

#### パイナップル

機械化が進んでいない。90（平成2）年に自由化した。原料価格で43円/kgが精一杯だ。1株に1個実る。3年目に収穫できる。当初は加工用中心で9工場で5万tだった。山手の農家が高齢化してきて、今では1万tを保とうとしている。生食用は手取り120円/kgあるので、そっちに向けようという傾向があり、工場への出荷が減って閉鎖となった。

#### その他

高齢化で担い手不足が問題。

伝染病を運ぶオオシマダニの駆除に成功した。1ヶ月に2回バイチコールという薬剤で駆除作業をする。これで作業がかなり楽になった。

#### (3)

#### パイナップル

工場閉鎖は96（平成8）年で伸び悩みが原因。だが、第3セクターで98（平成10）年に建てようとしていて、99（平成11）年夏からの操業をめざしているが、場所が問題となっている。全体で50haにもっていきたい。それは生産農家だけで、それに法人をあわせて70haとしたい。というのも、2500tが必要で、そのためには7-80haがいるから。

## サトウキビ

去年4年ぶりに9万t台にのった。収穫面積は1140ha。今年もそれくらいの面積がある。豊作型なら9万tはいくが、10万tにもっていきたい。しかし干ばつや台風があるとそうはいかない。今年はなんとか8万tにしたい。今日から操業開始だ。植え付け面積が増えない。1150haが目標だが、長雨で950haしかできなかった。春植でがんばろうというところ。10a当たり10tとれば10万tになるが、悪いときは7tを割るのでそれが問題だ。面積拡大が難しいので、収量を上げたいが、土地改良をしているが反収アップはなかなか。この辺が課題だ。株出しは4tくらい。高齢化が進んでいくなかで、機械化がないとだめだが、キビは土地利用型なので難しい。

## 稲作

350haで変わらず。減反政策のなかで二期作を減らすようにしている。

## 畜産

肉用牛がキビ、パインが減るかわりに伸びている。牛が粗生産額で入れ替わってトップで全体の4割を占める。畜産は、飼料にたいして台風の被害がなく、作業が機械化されている。キビから草地への転換が進んだ。家畜市場は1日490頭だが、増設しなければならなくなっている。糞尿公害もでている。計画を上回って伸びているので、これらが今後の問題となる。

## 葉たばこ

この数年間、毎年1億円増えて、今10億円くらい。

## 花卉

菊と洋蘭。法人化して大規模の施設を整備したが、遠隔地への輸送では価格が安くなってくると輸送料が大きい。それで停滞気味。新空港ができれば、コンテナ輸送ができるので伸びるが。

## 果物

8月がピーク時。生産の平準化を図っていかなければならない。生産量が落ちているからいいが、増えるとさばくのが大変になる。

## 後継者問題

全国と同じ。就業率2-30%（100人のなかで2-30人くらい）。県の農業大学へは年5名が石垣から行っているが、新規就農はほとんどない。「農業青年クラブ」が去年八重山全体でまとまった。石垣市では2-30名。県での農業青年の翼に参加したりしている。嫁不足は表面には現れていない。竹富町では、町内で結婚すると祝い金を出している。若手は、花卉、果樹（マンゴー）、葉たばこ、キビ、野菜（ピーマン、インゲン）をやっている。

## 兼業

専業が統計で増えている。60歳定年で、公務員を辞めて兼業から専業へということ。しかし面積が増えるわけではない。「定年帰農」はよそよりは多いと思う。

## (4)

## パイン

工場は平成8年に閉鎖した。当時は5-6千tあったが、8千tなければ安定しないので、生果でいくか加工でいくか議論があったが、小さな工場で造って何とかしよう



と中長期計画を作った。2千―2千500 t位の工場を造ろうとした。工場に必要なものを逆算して計画を立てたが、毎年80ha植えることが求められる。これまで200戸の農家が100戸に減ったものの、これでいけると考えたが、計画面積の半分しかいかなので原料の確保がむずかしく、先送りとなっている。100戸で40ha作っている。平均年齢は63歳。生果だけに絞ってきている。生果は150円/kgするので、加工用は43/kgなので、こちらに向いていかない。去年は天候がよくて生果用がよく農家はもうかったが、加工用は500 t もいかず、補助事業が入るので見直しがあるかどうか。平成16年をめでに2000 t の加工原料が作れるかどうか。5000 t のためには毎年80ha必要だ。4年に1度で植えて3年目にようやく収穫できるのが1個50円もいかない。しかし、行政がほうっておくわけにいかず、天候次第で生食用が5割を切った時を考えると、工場が必要と考えている。近いうちに県の案を出して、法人化して大量に作れないかと再構築に向けて検討中だ。国も県もパイン振興を図るということで、そのためには加工場が必要で、そのためには2000 t が必要で、それができるかどうかだ。だが、キビや草地に転換しているので再構築はむずかしい。

#### 葉たばこ

今は11億円。毎年伸びてきている。全国的には生産量が減っているが沖縄は全県的に伸びている。全国的傾向から5年遅れていて、全県で66億2千万円。来年は70億円になる見込み。石垣では目標15億円。今の調子で達成可能だ。全体で90戸が契約栽培している。平均で所得が1千万円以上になり、多い場合は3千万円にも。経費が6割かかるが所得がいいので魅力がある。1―2月植え付けで6月収穫なので、台風の影響がある。

#### 肉用牛

台風の影響を受けないのがメリット。県全体の4割を生産している。平成元年を境にキビと畜産の所得が入れ替わって、その差が拡大している。草刈りは機械化している。

#### サトウキビ

2千町歩を確保していて基幹であることは変わらない。機械化の遅れと台風で2割の増減があるのが問題。6割はハーベスタだが4割は手刈りだ。機械が重くて雨降り時に作業ができないので、ハーベスタはこれ以上増やさないといいが、手刈りは増えていない、というのは、高齢化で手刈りの重労働に耐えないから。機械の効率が上がると工場の操業期間が伸びるので、ハーベスタからそれに変わる機械への更新を考えている。

#### 花卉

洋蘭と輪菊で、生産量は伸びたが、価格が低迷して経営は苦しい。やっているのは中央部で、南方系の花をいろいろ作っているが、価格に問題がある。

#### 果物

マンゴーが70 t くらい。まだまだ農家の栽培技術にばらつきがあって、個人ではいいものもあるが、全体的にはまだまだで、宮崎などに負けている。J Aがブランド化へ向けてやればいいが、そこまでいっておらず、J Aで一元集荷をやるように考えている。パインも同じ。天候が悪くて質の悪いものを出荷したが、それで評判を落とした。

#### 野菜

右肩下がりできている。インゲンは少しよくなったが、カボチャも元気が出てきた。しかし、野菜全体は移入に頼っている。夏期は台風があつて露地物が伸びない。路地だと台風が来るとすべてが無駄になってしまう。通年の安定生産ができないので契約がうまくいかない。夏期でもやれるように低温の施設栽培をやろうとしている。そうでないと安定供給に乗り切れないが、事業でやるとコストがかかり、かなりの生産量が必要で、事業効果が出るかどうかかわからない。

#### 稲作

増やそうとしているが減反の問題がある。二期作で減反に同調しながら増反しようとしている。ライスセンターは427haをめざしている。350haが理想だ。品種はチヨニシキだが、一昨年からヒトメボレが入り、食味がいいということで、去年は8割、今年は全部となった。すぐに移行できなかったのは、地力が弱く技術的な問題があった。消費量では全県の3%しかないが、そのうちの6割は八重山で、そのうちの5割は石垣で生産している。

#### 川平

サトウキビの事業で15haの土地改良整備事業をしている。灌漑施設は入っていない。

### 石垣市農業委員会

#### (1)

##### 認定農業者

5年間なので、今見直しをして再設定するところ。また5年間で。スーパーL資金を当てにした農家も多かった。しかし、なかなか借りられず不満もある。経営改善まで踏み込んでいる農家はあまりないような気がする。機械化が進んで、農家は資金繰りに苦しんでいる。そこで、助成金などに敏感になっている。直接に農家に届くようなものが喜ばれる。組織化されて情報交換ができれば、と思うが、組織化そのものが行政側のリーダーシップがとれていないので、進んでいない。

##### 標準小作料

今年見直す予定だ。以前は3年に1回だったが、実情に応じて、ということで平成7年以来同一だった。

##### 流動化

これまでは賃貸借よりも売買が多かった。しかし最近は賃貸借が増えてきている。農業を始めるのに最初に借金を作っては苦しいから。耕地の売買は、坪当2000-2500円。まとまっている土地だとたまには3000円もある。担保力のために入手する場合もある。制度化資金を利用するために。小作料は、実情では標準の1.2倍くらい。人件費や物価変動などのため。余り上がると借り手の意欲をそいでしまうが、下がることはない。

### 八重山郡農業協同組合営農販売部

#### (1)

#### 川平

100-150戸くらいか。組合員数は118人。ユイマールはほとんどない。土地改良はそれほどない。天水田ばかりというわけではない。サトウキビや肉用牛をやっている。

#### 稲作

米の大部分は本土から移入している。1979（昭和54）年にライスセンターができた。その頃までは手植え手刈りもあった。土地改良が進み機械化が進んで、できないところがつぶれていった。94（平成6）年の不作で、やり方次第で儲かるという意識が出てきた。品種は愛知県のチヨニシキ。パインを作っているところでは米がない。農繁期にぶつかるから。田植え期にパインの日よけをしなければならない。

#### （2）

川原、三和ではパインを作っている。

畜産は和牛。

白保、宮良は移住による。昭和以降で戦後かも。大浜から市街地、川平は古い集落。

新空港予定地は三和付近に変更された。いつかは不明。

耕地利用率が低いのは、企業が新空港後を見込んで買い占めしているため。

#### 八重山郡農業協同組合営農指導課・農作業受託課

#### （1）

##### 農協の組織

合併前の大浜支所の窓口業務だけを残している。農協としてはすべて本所で行なっているが、各課はそれぞれに独立しておかれている。営農指導課と農作業受託課は大浜にある。営農指導は西表も含めて一本化している。

地区間のライバル意識が強いので活動はまとまっているが、ちょっとしたトラブルを起こしやすいので事務局が大変だ。農家にとっては自分の都合だけよければいい。まづいとわかっていても、しがらみがあるし、活動が停滞するのではという心配をする。地域性もある。

水稻部会は、石垣地区、竹富地区、大浜地区にある。

農協も変化している。合併前は、スイカが石垣で3億円、大浜で7-8億円あった。カボチャは5-6億円。それが合併して6年目で全部足しても3億円くらい。栽培農家が固定されて横ばいになっている。労力にあわないとか、連作障害による病気とかで。今作っている人は連作障害を技術で克服した。そのときにやめた人は今作っていない。受託課の所管は、ライスセンター、農協所有の機械によるキビの植え付けと刈り取り、草地の植え付けと刈り取り、農薬散布、整地、葉たばこの乾燥。年間のパート雇用は100名以上になる。多いときは4-6月の葉たばこの乾燥期に70名。キビの植え付け時に40名くらい。現在は15名。給料は農協が支払う。委託料は農家から農協へ。農協がパート雇用を斡旋する場合もある。

農家同士の生産組織や受託組織は2-30グループあったが、皆つぶれた。「なになに生産組合」と名付けてパイン栽培などで。トラブルが起きてうまくいかない。今は、生産法人を親子や兄弟でというのはある。他人同士だとトラブルが絶えない。トラクターの8年の耐用期間がすぎると解散してしまう。機械の補修や点検がずさんになる。そこで農協がそれをやるやり方がある。ハーベスタ、刈取機それぞれ数台。オペレー

ターが1人なので丁寧に扱うからそれほど壊れない。

農協が機械リースをするという方式は今後増えてくるかもしれない。法人に貸して作業を法人の側でやるというやり方。

#### 稲作

食味を重視し、消費者のニーズに応えるということで品種の交替をしている。所得が上がらないのでワンランク上の品種を選定している。地域性の特徴を持つ稲作経営をめざす。種籾の供給はしょっちゅうではないが。ヒトメボレを中心とした販売。去年の二期作にチヨニシキから転換し、今年は全面的に栽培している。食味重視の観点からで、生産性は1-2割落ちるので、栽培技術によって変わらないようにしたが、その分コストがかかっている。

台中65号：晩稲で160日。路地で播種して40日以上かかった。今はハウスで10数日。

トヨニシキ。チヨニシキ：収量が多い。倒伏に強い。

ヒトメボレ：正式には今年（2000年）一期作から全量に変わった。平成11年には3品種もあってライスセンターが困惑した。ヒトメボレは当分続く。食味がよく、収量は余り変わらない。北海道と沖縄は4類だったが、来年から3類に格上げされる。

ライスセンターの問題としては、農家の自家販売があるので、有機栽培への取り組みを始めている。小さい数量での取り組みから、意識の向上を図っている。

昔は稲作もユイマールでやっていたが、機械化が進んだので散財してやれるようになった。

稲作農家は、石垣島全体で309戸。

田は北は太田集落までで、それより南にしかない。稲作は白保集落の人が作るのも、それより北だと遠くなりすぎる。その人は移民なので作らない。

水田面積は増えていない。基盤整備で30a区画になって、機械の効率がよくなったのと収量が上がった。昔は300kgといわれていたが、今は400kgくらい。それで生産量が少し増えている。石垣島の水田としては500haあるが作っているのは300haくらい。200haは基盤整備中で、それが終わると生産量は増える。島外へでた人の田が残っているケースもある。これは基盤整備の時に事務処理が大変。

西表では面積が減っている。去年で東部が150t、西部が50t。畜産が伸びて田が草地に変わっている。

J Aでは95%が本島と本土に行く。自家販売は地元でモチ米を米屋に売る。

強制減反はない。自家消費米が3%に満たないので。減反しろという通知は来るが。奨励金があることになっているが減反している人はいない。草地にしても手続きしていない。石垣では西表と異なって水田を草地にしていない(?)。

#### 平得集落

種取祭をやっているのはここだけ。稲作農家は川平より少ない。大規模農家は2戸。

大規模農家も田もどこかにまとまっているわけではない。農家で田をもっているのは長い間住んでいる人で、移民で入ってきた人は作っていない人が多い。

#### 葉たばこ

今ユイマールに近いものは、葉たばこでやっている。整地作業でロータリーをかけマルチするが、雨が降るとだめなので、ロータリーの後すぐに土かぶせをする。農家3-

4戸でまとまっている。

7つぐらいのグループがあるが全79戸。このグループは集落をこえている。

#### 売上額

第1位は畜産で40億円近い。平成11年で36-7億円。第2位がサトウキビで17億円くらい。第3位は葉たばこ10億円。第4位は野菜や果樹で5-6億円（野菜が3億円少し）。第5位が米で5億円近く。パインは1億円もいかない。

#### 兼業

人間の数ではキビのほうが多い。畜産、キビは二種兼が多い、小規模ならば朝夕だけでいいので。キビも米もほとんど機械化されているので簡単に作れる。畜産も機械で草刈りする。朝1時間と夕方2時間で済む。4-50頭の専業農家のほうが赤字。機械購入費などで。だから兼業のほうがいい。市職員で牛をやっているのが100名いる。農協でも結構いる。給料で食べられるので安定している。それにプラスアルファが2-30万円。夫が農業で妻が職員も多いし、その逆もいる。

#### 後継者

畜産は多い。1戸42-3頭が平均で、800名くらい。大きい農家でも後継者がいるのが多い。葉たばこは50歳以下が主力で、青年部（50歳以下）が60名いる。米農家では300戸中で半分はいる。

若い人がいるので、離農した分を集めていくことになるのではないかと。基盤整備を毎年やっているのだから、離農分を放棄したりしない。今は10ha作るのも大変ではない。機械化しているし、農業用水は枯れることがない。飲料水はダムが不足で断水があるが。

#### 花卉

伸びないのは輸送コストのためで1kg100円かかる。本土のあちこちに送る。切り花出荷用は価格が問題。菊は残っている人が2-3人しかいない。以前は20名くらいいたが。花で成功している人はなかなかいない。

#### パイン

ジュース工場の小さいのが来年（2001年）3月くらいにできる。パイン以外にもジュースにする。パインは、量的には何千tもあるが、半分は個人出荷で、郵パックでやる。そのほうがもうかる。農協は500-1000t送るので高くない。1kg100-120円くらい。郵パックだと120-140円になる。生果で送れるのは7割で、3割はジュース用に回すしかない。今はそれを破棄しているのだから、この分をジュース工場で加工しようということだ。

#### 豊年祭

これは五穀にかんする祭。キビは明治以降、パインは50年間くらいと歴史が浅いので、祭にならない。

#### 八重山農業改良普及センター

##### (1)

#### 畜産

農業生産高は以前は耕種部門だったが、5-6年前に畜産に変わった。牛は石垣で3万6千頭、県全体では8万頭になる。あと1-2年で10万頭といわれている。台風の影響、



干ばつの被害で、サトウキビから草地へと転換した。

黒毛和牛のもと牛の生産。肥育はむしろやめてもらいたい。本土は気候や技術があるが、ここは夏の高温が問題。逆に草の刈り取りは年間6回。もと牛は粗飼料で育てる。、肥育は濃厚飼料。飼料には面積が必要だが、ここは、平均すると10頭前後で、それにみあった粗飼料畑がある。土地改良していないと年間4回の刈り取り。してあるとスプリンクラーで散水するので平均すると5回、草によっては7回。県の平均は4回で、それに比べても高い。肥育牛は出荷価格が6-70万円にしかない。今は、80万円以上でないと採算に合わない。それよりも子牛生産のほうが利益が上がる。豚は台湾から結構入っているが、価格が不安定。石垣では14戸と戸数が少ない。県全体の3.3%となる。

口蹄疫には神経をとがらせている。1頭でも出したら10-20km以内は全部処分しなければならない。国際的に運搬できなくなるので。宮崎と北海道ででたので、取り引きしていない。

#### 水稻

ヒトメボレは、一期作では十分に適応しているが、二期作では少し落ちる。しかし、一期作でチヨニシキと量は変わらないが質はまさっている。

面積は現状維持だ。基盤整備は平成10年で43.0%。畑の灌漑は7-8割。面整備が進まないのは、賦課金の問題。道路と灌漑は進んでいるが。整備後生産量は上がるが、しかし、整備した水田を草地にしている。

#### パイン

加工場の経営不振は、輸入パインに太刀打ちできないため。農家は生果用を郵パックで対応している。生果用のために密植して肥大を1.5kgにおさえている。品種も生果用に切り替える。

生産から販売までということで、農協などでの一元出荷となる。量が増えてくれば個人では対応できないからだ。生果用は伸びるが加工用は伸びない。民間の加工場はあるが大したことはない。

統計的には平成10年まで減少しているが、ここ1-2年は増えてきているはずだ。

#### 葉たばこ

現状維持だ。

肥培管理を徹底させている。今までは露地栽培で、定植が2月、収穫が4-5月となり、収穫時に雨が多く、葉に付着する白星病でやられる。それでマルチを奨励している。病気予防と、葉に砂や土が付かないので。

脇芽の除去を薬品で焼いていたが、平成15年に禁止になるので、手作業になる。大きく作っている農家は面積を減らすだろう。内地のキャンパーがバイトで作業に入っているが、それでも人手不足だ。

#### 花卉

バブル崩壊後落ち込んでいる。

主力になっているのは、切り花、ヘリコニア、ジンジャー。以前は洋蘭だったが。今のは1ケースに詰め込めるので、フライトにも向いている。

面積は、八重山全体で30ha。石垣のみでやっている。光度の施設がいらない。季節風

対策だけで平米単価は1千円。

菊が落ち込んでいるのは施設がかかるから。

だが、輸送料のコストが問題だ。石垣から那覇へ、そして本土へと運ぶ。ここでは65円が必要だが、本土は30円でいい。

ヘリコニアは石垣では年中出荷している。本土では年2回だけ。露地栽培でもできる。

洋蘭は価格が問題。施設の坪単価が3万円必要。

5年で品種が変わる。

#### サトウキビ

残余面積を維持して、優良品種を導入して、肥培管理を徹底して、反収を上げる。今は7t/反なので、8-9tへと上げていく。

今までは面積にとらわれていたが、そうではなく、肥培管理で反当を上げる。会社としての生き残り戦術でもある。機械化は進んでいる。石垣ではハーベスタ中型15台、大型3台。

問題は反収だ。労力を他へ回すということで、畜産に取り組む農家がでている。複合経営でキビプラス畜産だ。中規模はそうしないと食べていけない。この複合経営を今後伸ばしていきたい。労力もかち合わない。

水稻プラス畜産は、夫婦で十分やれる。畜産が労力がいらず、朝夕2時間でいいし、1人で100頭やれる。2-30頭の小さい農家は刈り取りを農協に委託するのが一番いい。

#### 後継者

本土からの就農者がでている。普及員にも本土出身者が14名中4名いる

### 沖縄総合事務局石垣統計情報出張所

#### (1)

##### 稲作

キビとの複合でやっている。肉用牛もあるが、大型化してきたので難しい。生き物は専門でないと。八重山で最高時は1000haくらいあった。昭和47年で1100ha。減少している原因は高齢化だ。

## 第3章 対象集落の概況

### 第1節 川平集落の歩み

#### 1) 部落会誌から

以下は、手書きで綴られた集落の歴史記録である川平部落会『郷土史』（1950）による。前書きでは、「当小学校の六十週(マ)年記念事業の一つとして部落の史記を書き残して…」と、その趣旨が述べられている。

#### 伝説

「昔神代時代は仲間に部落は在り其の時代の元家は四<五の誤り>で子孫繁栄して居

る……嘉平村元家南風野家……仲底家……高屋家……仲間家……田彗家」（川平部落会 1950: 1）。

「右の五家の元家より広がりて現在百戸余りの戸数が（パイテヌウフヤン）である事又は昔よりの伝説により村の始めは仲間村であった事が分るのである」（川平部落会 1950: 2）。

## 人口

「元禄十年……其の後部落は仲間 西村 慶田城 玉得 久場川 内原の六部落をして嘉平村となれり……寛永六年」（川平部落会 1950: 2）。

「安永五年の大飢饉享和二年並に嘉永五年の疫病其他マラリヤ等により人口減少して衰微して久場川 内原の二部落となり人口昭和五年十二月現在は五四三人で宝暦三年の人口調査票と比較して却って四八人減少せる状態なり」（川平部落会 1950: 3）。

「マラリヤ予防班設置前当部落の大正十年十二月の戸数は一〇三戸 人口四八五人なり」（川平部落会 1950: 26）。

## 農業生産

「主なる農作物としては米 粟 甘藷 大豆 麦 甘蔗等があり米と大豆は本郡内に於て其の産地として有名である 米を以て唯一の換金作物として居る関係上稲作に於いて最も関心が払はれ古ゑから行はれて居る行事より今日に至る行事の上より察するに農業の総べてが稲作に集中されて居る感がする」（川平部落会 1950: 15）。

「大正十年頃台中 長糯嘉義愛国等の優良品種が当時指導層により移入栽培されたが……此の蓬莱種は終了に於いて取扱ひの便質に於いて在来種より卓越せる所あり五、六年の後には在来種は其の姿を消したり」（川平部落会 1950: 16）。

「甘蔗も在来種（読谷山種）から優良品種たる大茎種に移り在来種と改良種は其の比ではないので一、二年の短年月に於いて見事改良され在来種はたちまちにして廃れた」（川平部落会 1950: 17）。

「畜産は有畜農業上欠く可からざる物で本部落でも古から重／要視され稲作と相併行して不動産を求めるに必要な資金は総べて畜産より出て居る 本部落の富豪家は此の畜産より築き上げた家が多い」（川平部落会 1950: 17-8）。

## 2) 村史から

以下は、川平村の歴史編纂委員会『川平村の歴史』（川平公民館、1976）による。それによれば「本書は川平村としては初めての本格的な記録で、今日まで永い間村民の個人個人の頭の中で記憶されていたことが、文字として総合記録されることとなったわけである。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 2）とうたわれている。

## 歴史

「川平村は石垣島の西北部に位し、きわめて古く成立した集落であると考えられている。平家の落武者の来島したという寿永4年（1185）当時、すでに集落が形成されていたようである。この点から見ても、石垣島では最も古い集落であると推測される。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 7）。

「然し戦後も三十一年を経過した今日、古い文化は年と共に捨てられて、新しい文化

がとり入れられつつある。……農家も専業農家の数は次第に減少して、兼業農家化する傾向が強い。従って村民の構成も、その職業は農業一色であったこれまでとはうって変わって利害相反する多種多彩となりつつある。又農作の中心をなした稲作は、パインや甘蔗にその首位の座を譲って、曾ってのその面影はまったくといってよい程失われている。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 8）。

「慶長の検地（1611）の記録には『川平間切川平村』とあるが、寛永6年（1629）間切改正の記録には『嘉平村』とある。……宝暦3年（1753）の記録には『川平村』とあり、以後川平村に定着しているようである。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 21）。

「川平村は石垣島の西北部、八重山支庁より北北西四十八軒（戦前は四里二十町といっていた）の地点にある。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 21）。

「村の発祥の地は仲間村であるといわれる。仲間岡を中心にして南風野屋、仲底屋、高屋、仲間屋があり、少し離れて田多屋があつて、この五家から村は始まったといい伝えられている。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 35）。

「以上五家をムトヌ、フヤン（元の大家）と云い、そこより分家したのを〇〇〇ウロール、パイディヌ、フヤンという。村がだんだん繁昌してさらに大口村、仲栄村、古場川村、西村、慶田城村、玉得村、大津原村、田多村が誕生し、これら九村を総称して川平村といった。その中で仲間村が代表的村であり、親村とよばれた。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 37）。

「慶長15年（1610）の検地記録によれば、……当時の川平間切の所属村は川平村、仲筋村、ふかい村、きやか村の四村であつた。……寛永5年（1628）の行政改革により、……川平村は宮良間切に編入された。明和5年（1768）の間切内部の改正により、今度は石垣間切となった。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 42）。

「八重山の最高行政庁蔵元は、……明治30年（1897）に廃庁となった。このとき従来の三間切は廃止されて、八重山を一円とする八重山間切が誕生した。……明治40年（1907）の制度改正により八重山間切は廃止になり、翌41年（1908）特別町村制施行と共に一郡一村の八重山村となった。……石垣村を……19字に分け、一、又は二、三の字をもって一区として区長を置いた。川平区は川平、桴海、仲筋、崎枝の4字とし、八重山村第5区となった。……一郡一村の八重山村は大正3年（1914）に石垣、大浜、竹富、与那国の4村に分村した。川平は石垣村の区域となった。石垣村は大正15年（1926）町制が施行されて石垣町に昇格し、戦後の昭和22年（1947）市に昇格した。したがって川平は現在石垣市字川平である。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 43）。

## 神事

「川平村には5つの御嶽があるが、何れも創建の年代は不明である。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 63）。

「御嶽を中心とする年中の祭祀行事は、その数27祭祀を数え、旧暦7月を除き毎月のように行われている。ひと月に三・四回の祭祀を数える場合もある。群星御嶽・山川御嶽・宮島御嶽・浜崎御嶽に代々受け継がれている4人の神司並びに、神のお告げによって自から浜崎御嶽の神司を志望、部落会の承認を得た2人の神司、合わせて6

人の神司によって年中のもろもろの祈願が行われる。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 77）。

「豊年祭・結願祭・節祭は部落の三大祭行事である。豊年祭は各所属御嶽の氏子で行い、結願祭と節祭は部落会の運営で行われていたが、戦後節祭の余興行事が廃止されたため、現在では結願祭の行事だけを公民館で運営している。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 77）。

#### 集落運営

「川平村の業務運営は、明治年代の初期頃は世持、次いで総代によって、運営されてきたと伝えられる……大正の年代を経て昭和に入ってからはず会、向上会、昭和16年以降は部落会などと幾度か名称にも変化があり、戦後の1962年（昭和37）以降は公民館となって現在に至っている。部落会時代には、部落の運営は正副会長という名称を用いず、台頭の資格をもつ代表者2人を選出し、その合議制で運営した時代もあった。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 166）。

「川平共楽会 この会は大正10年頃に発足している。古く人頭税時代、札人を御免となった年令（これを「札免」といった）を基に、すなわちクヌトウグンジュウ（49才）以上の男女によって組織され、老人会と称した川平独特の老人の一団体であった。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 171）。

「戦後の1954年（昭和29）に至り、老人会名は全般的の年令に相応しくないので、改名すべきであるという多数の意見に基き、公募した結果、喜舎場兼美氏提案の「共楽会」が当選し採用となった。……1964年（昭和39）1月老人クラブが設立されることになったので、共楽会は老人クラブに統合せられ、自然解消となった。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 172）。

「川平村では明治、大正の年代を経て、昭和3年までは部落の集会所が無く、当時の幹部私宅を利用し、または部落で一番広い家を、年間金20円也で借りて使用する有様であった。……昭和3年稚蚕共同飼育室が県の補助金8割、部落民2割の負担で建設認可となった。……30坪の平屋建茅葺が同年10月完成した。……翌年瓦に葺替え、部落会員の集会は素より各種団体等も活用し続けていた……1948年同敷地に更に30坪の茅葺平屋を建築したが、1959年の暴風雨に倒潰し、」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 174）。

「1962年当時の部落会長大仲登、副会長高嶺英三の両氏は、万難を排して公民館の早期建設を決意し、……建坪40坪のコンクリート平屋建に決定となった。……1962年（昭和37）9月8日起工式を挙げ、……12月25日総工費金7,500弗を要し、鉄筋コンクリートの近代的スマートな公民館が目出度く落成の日を迎え、」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 175）。

「川平石崎2番 原野61町2反5畝13歩」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 177）。

「明治年代に川平部落は牧場を経営することになり、……石崎原野は水呑み場所も二、三カ所もあり、年間を通じて牛馬は肥え立派な牧場最適地とされている。……戦後はこの石崎原野を貸付して、公民館の財源に充てることになった。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 178）。

「昭和47年4月29日公民館に臨時総会を開き、石崎原野処分の件を提案し、……処分



を決定した。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 179）。

「青年団 創立大正10年 構成年令16才より21才まで」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 200）。

「大東亜戦争後は青年会と改められた。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 201）。

「婦人会 創立昭和6年」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 201）。

#### 稲の品種

「八重山に古くからある稲は普通「在来種」とよばれている。又古くから米は一般に「マイ」、稲は「イニ」とよばれている。この在来米の特徴は籾先に「ヒゲ」のあることであった。然し在来米は現在の品種よりも反収は少なく、昭和5・6年頃まで植付けられていた。その頃から新品種蓬莱米が、当時の県技手仲本賢貴氏により指導普及され一般化した。然し特に猪害の甚しい田には、昭和8・9年頃まで依然として在来種の植付けがなされていた。……稲の品種はシヌグ米、ピニジミ、花ジグル米、シッソー米、ウシノウ米、ダーネ米、ガラシ米、ハカブサ米、モチ米等であった。町当局は新品種台中65号普及のため、各部落に採種圃を設置し、又部落毎に農事懇談会を催していた。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 202）。

#### 甘蔗栽培

「明治14年頃に「読谷山種」が、製糖用として八重山島役所へ送付され、八重山蔵元敷地内に甘蔗苗10本余が植付けられたことが、八重山での甘蔗の始まりと言われる。川平地区に甘蔗が普及したのは、明治15,6年頃のようなのである。古老の伝承によれば、現川平中学校敷地に製糖小屋があったらしいが、その後農地や水の不便などで、西苗代附近のタバガ原に部落共有の製糖場が建てられたという。当時の圧搾機は畜力による歯車三柱式で、……製造された黒砂糖は百斤の樽詰で、1樽を1挺とよんでいた。……当時部落内でも甘蔗作りは僅か5,6戸程度で、1戸当りの生産もこれまたわずか2,3挺位であった。その後部落共同精糖場は閉鎖され、大正末期頃仲野親族組合、昭和初期には宇根永春、松原茂志両氏を加えて、三ヵ所の精糖場が設置され、漸く部落内にも糖業熱が高まってきた。戦後は石垣永美、竹西与利、仲野幸一の三氏等が設置したが、この時から機械動力式に変わった。……各戸7,8挺程度の黒砂糖の製造となった。1959年八重山製糖株式会社が浜町磯辺に、大型分蜜精糖工場を設立した以後は、甘蔗は同工場に搬入されるようになり、石垣島全域にわたり糖業熱の高まりを見た。然し1社では間に合わぬとの農家の要望から、大日本製糖株式会社と地元株によって、1961年石垣島製糖株式会社が設立され、翌1962年石垣島名蔵で新型工場が建設され、さらに1967年には八重山、石垣両会社は合併して1社となり、名実共に基幹産業の育成に当りつつある。」（川平村の歴史編纂委員会 1976: 206-7）。

#### 生産組織

「農事小組合（親族組合）」

創立 大正3年頃から昭和初年期まで

目的 私的には個人的に相互扶助。公的には原勝負の競争組織である。

組織 親族を中心とし又は近隣を中心として組織されていた。

川平部落では次の6組合が組織されていた。／岸本屋親族組合、高嶺屋組合（俗に十人組合とも言う）、前浜屋組合、仲野屋組合、宮良屋組合（俗に士族組合と称してい

た），東竹西屋組合」（川平村の歴史編纂委員会 1976：220-1）。

「興農会，農事改良組合

創立 昭和2年

興農会は川平部落の上，下別々に設置されたが，2年後発展的解消となり，その後農事改良組合と改称された。」（川平村の歴史編纂委員会 1976：221-2）。

「農事実行組合（法人）

創立 昭和13年

川平部落一円で構成された。事業内容は販売，購買，信用，利用等とした。……その後農事改良組合に包含された。」（川平村の歴史編纂委員会 1976：222）。

## 第2節 川平集落の概況

以下は，1960年代の早稲田大学による石垣および西表の調査報告書による。

「かつては，川平，仲筋，浮海の3村をもって川平間切りと称し，その中心地であった」（新井 1969：10）

### 集落組織

「「川平公園」の管理・清掃を担当しているのが〔共楽会〕である。一年に500-700弗程度の補助を市から受けながら，十数年にわたって続けてきている。」（原岡 1969：25）

「川平部落は，吉原・仲筋・大嵩の各部落と共に石垣第十六区（行政区）を形成している。区には区長一名がいて，市長からの委任事務（徴税，保健・衛生関係業務，及び住民の確認—毎年4月1日現在で人の出入りを調べること）を行なう。この区の区長は過去ずっと川平在住の人から出ている。今年から，福祉員が部落におかれて，福祉事務所からは各種保護費を，又市からは各種の物資を該当家庭に届けている。更に部落には駐在所・消防署川平分団・小学校・中学校がある。」（原岡 1969：25-6）

### 公民館

「社会教育法によって川平にも〔公民館〕ができた。これは部落組織の改変を意味する。組織図は以下の通り。次に補注めいたことを列記する。（）内は人員である。役職は一見兼任者が多い。以下（）内は上表参照。部落会長（公民館長），副館長兼主事（総務部長），農事改良組合長（産業部長），青年会長（青年部長），婦人会長（婦人部長）及びPTA文化部長（教養部長）。教養部は新設である。産業部の系列には稲作グループ，4Hクラブなど。婦人部の系列には生活改善グループ。審議会構成者：正副館長，部落会選出7名，各部長4名，共楽会・老人クラブ正副会長，PTA会長。」（原岡 1969：26）

「〔部落会〕：各世帯主を会員とする。会費は本年の場合，4\$35¢（男の世帯主），2弗30¢（女の世帯主）部落づくり全般にわたって適宜協議し，道呂（予算の都合で市がやらない部分）・衛生・電灯・陳情・請願などについて種々取り決め実行する。

〔婦人会〕：殆ど全戸加入。一番目立つ活動は旅行。他には市街などから料理及び衛生関係の講師を招いての講演会など。出席者は大体30人くらいである。

〔青年会〕：離村者が増えたため、年齢の上限ははっきりしていない。昔のような活潑な活動はできなくなった。

〔共楽会〕：55歳以上の人を会員とする。業務は主として前述の公園のこと。会費無料。

〔老人クラブ〕：一般的には、老齢年金対象者（70歳以上）の集まりだが、川平では部落の規定として65歳で会員となる。活動はやはり旅行が中心。会費は50<空白>。」（原岡 1969: 27）

## 組

「公民館組織ではないが実質的な組織が他にもある。部落の祭りにあたって「ツカサ」と具体的な案を打ち合わせ作成する。（それに基づいて館長が決定。）部落の地域ごとの下位区分として組が九つある。大体、十軒前後（8－15程度）で構成されている。戦中隣組ができたのが、現在の組の原型だが、戦後は一時とだえて、近時、教育問題で学校と連絡を密にすることを目的として、新たに編成されたものである。

（〔教育隣組〕が正式名称。PTAの下位組織であるが、子供のない家も加入している。）しかし、学校関係にとどまらず、部落会・婦人会の下位組織でもある、連絡業務には、各一名の班長・婦人班長があたる。道路整備とPTAから割り当てのある校庭整備等の労働奉仕は、どの組も共通してやることだが、組によってはレクリエーション活動や小旅行をさかんにやっている所もある。PTAとしても下校後の子供の生活、ことにテレビのことで学校と再三協議している。PTAは文化部のほか、事業部があり、学校所有の畑を請負に出して僅かではあるが収益をあげている。」（原岡 1969: 27）

「共同作業は、各戸、年に合わせて3回程度。年輩の人達には協力の精神が薄れてきたと感じられるようである。」（原岡 1969: 27）

## 農民協議会

「農業では、パイン生産者を中心に農民協議会結成の動きがある。これは生産者が個々別々に分断されていて、力が弱いため、生産者団体を組織しようという意図のもとに行なわれている。このようなことは、まず第一に農協の職務であるはずである。石垣農協は、信用・経済・指導・事業の五部門をもって活動しているが、資金力が小さく（資金量は大体120万弗ほど。内、自己資金が六割、農林中金の資金が四割という比率になっている。）生産者のための組織として充分機能しているとはいえない状態にある。農民協議会運動もこういった事情を背景にしている。）」（原岡 1969: 28）

## 村落生活の特質

「石垣島川平における村落生活の特質を規定する一つの側面として、協同労働はどのようにおこなわれ、それはまた村落構造といかなる関係をもつかという問題がある。八重山群島における村落は、地理的にみても外部からの影響が少なく、内地の自然村に比してその生活圏は自己完結的に閉じた体系の性格を示しているのが普通である。また、社会組織の面においても、内地の村落が一般に「家」を単位として構成されているのに比して、八重山群島の村落は「個人」を単位として構成されていることは今日までの諸調査によって明らかにされていることである。住民の生活原理が同族組織

にもとづいている東北日本型の村落と、家あるいは親族を離れて年輩序列、村組による地縁性への移行という変容をとげている西南日本型の村落類型の区別の中で川平の社会関係はいかに規定されるだろうか。村落の社会関係の性格は、さまざまな側面から検討されなければならないが、共同体規制がどの程度強く作用しているかをみることは重要なメルクマールとなる。これについては特に共同の耕作や家の建造等の協同労働にみられる社会関係が、住民の主観的意味に従ってどのように維持されているかをみる必要があるだろう。また、農村問題がさまざまなかたちとなって深刻な影響を与えている今日、既存の村落の統合原理と産業化の経済合理的な原理とに如何なる相違があるのかが問題である。」（林 1969: 30）

#### ヒキ＝本分家関係

「普通、沖縄の血縁集団は、「門中」の男系親族集団がその特性としてとりあげられる。沖縄本島及びその周辺部においては、「門中」という男系的親族集団が形成されているのは平民階層であり、八重山群島にあっては旧士族層のみであるということは、江守五夫氏が西南型村落のプロトタイプの究明のためにおこなわれた調査で明らかにされている。この点に関して川平の場合若干の相違があるが後述したい。」（林 1969: 30）

「川平における本分家の同姓集団は、「ヒキ」と呼ばれている。これは、奄美諸島地域で用いられている「ハラ」の呼称と同様の内容をもつものである。「ヒキ」は血縁者のみの集団で自己を中心に上下に二世代を含むのが普通であり、祖父母から孫までの範囲と考えられる。」（林 1969: 30）

「沖縄における「門中」制度は、本家分家関係を基礎とするが、村落内に構成される同族とは構造的にことなるものである。つまり「門中」は村内だけに限らず、広く村外にまで及んだ血縁集団であり、「ヒキ」は村内における旧平民層の父系血縁の認識に基づくところの血縁集団である。」（林 1969: 31）

「川平では、住民の間に意識された「ヒキ」には、宇根、高屋、野底、仲底、仲間、仲く空白、南風野、仲本、田多の九家の区別がある。本家の呼称は、例えば田多家の場合であるなら総本家に対して「田多バルモティノフヤン」、また孫本家に対してなら「田多バルパイティノフヤン」と呼ばれる。しかし、宇根家と高野家は旧平民層に当たるが門中墓を有し、それぞれ、嘉善氏、憲章氏でもって示される。その他川平には唯一の旧士族層として現在八代目にあたる葉茂姓の喜捨場家があるが、孫本家にあたり村内に門中墓を有しない。この点に関して云うならば、八重山における「門中」制度は、単に旧士族層の中でのみ構成されたのではなく、「ヒキ」関係と共に旧平民層の中においても父系血縁の認識として存在するものと考えられるだろう。「ヒキ」関係は、上述の九家は特に村内の本家を中心に成員の区別がみられるが、すべての住民が各々の「ヒキ」集団を意識しているとは云えない。また地理的にみて、宮島御嶽以南の上村に九家の内七家までがあり、本家を名のる家の半分までが上村にある。そこから中村、下村へと分家がされていったのである。戦前までは「ヤームトゥノツーサドゥツーサ」（本家が強いとやはり次三男でも強い）という言葉が時折用いられたそうであるが、多分に優越意識のあのあらわれとしての意味が強く実生活上の較差に根拠をもつものとは思われない。分家は、長男が次三男の五一六倍相続した後で行

なわれ、結婚後一ヶ年一半年後に専業農家として創出した。分家がかかなり行なわれた  
事実は、川平が他の八重山群島中の村落に比して農業生業生産の条件が極めてめぐま  
れていることと即応する。」（林 1969: 31）

「土地が門中間の社会関係、あるいは本分家関係に影響をもっていないことは、川平  
のばあいにも妥当するだろう……土地所有における不平等も、家格には何ら関係ない  
ものである。」（林 1969: 32）

「本家筋が分家より所得が多いという傾向は考えられない。」（林 1969: 32）

「所得は扶養世帯数と正の相関をもつものであり（ $r = 0.502$ ），家族がその周  
期において膨張期にある時，労力を集中しうる為に所得の増加を生み出す結果になる  
ものとみられる。最も重要なことは、特に本家への労力集中によって、「ヒキ」の場  
合、及び、本家分家間の相互依存による他血縁集団との区別を生み出そうとする協力  
はないと思われることである。」（林 1969: 32）

「昔は村外へ嫁に行くのは、労力や神事上の必要性からよく思われず、地域内内婚が  
なされ、恋愛による婚姻がほとんどであった。……現在でも川平において支配的婚姻  
関係は、内婚的性格を有するものである。内婚率が高いことのもたらす社会的結果は、  
村落の性格に決定的な影響を与えるものである。本家を名の家は30家、全戸数の  
23%にも及ぶ。つまり、親族関係を複雑にし、「みんな親戚ですよ」と調査社を困  
らせるように、単系的な血縁集団の諸機能を否定することである。本家一分家の本末  
関係の否定は、「家」の否定をともない、「個人」を社会単位とした社会関係を可能  
にする状況を用意するものである。そこから恋愛婚の見合い婚に対する優位を生み出  
し、年令階梯制の機能をつくり出す。そこから共同体的諸規制も、「個人」「性」を  
基準にした原理によって維持されてくるものとみられる。また、通婚関係の錯綜は、  
姉女房夫婦の多い事実と共に、妻＝母の社会的地位の高さ、ひいては妻＝母の生家の  
家位を総体的に高くしている。」（林 1969: 33）

「八重山群島にあつては、旧暦一月十六日祭が盛んである。一月十六日祭には、島内  
から「一門」が集まり、宇根家や高屋家では、のべ数百名にもものぼるものである。」  
（林 1969: 34）

「祭祀における家格づけは関係がない。男女別、年令順に席が占められるのである。  
つまり、本家は意識的に区別されているだけで、＜性＞・＜年令＞による基準が、祭  
祀においても徹底していると思われる。」（林 1969: 35）「新暦で三月の下旬一四  
月の上旬には「清明の祭」があり、二週間前頃、親族同志の話し合いによって日を決  
定し、先祖の墓へまいる。しかし、最近ではあまり行なわれていない。その他、特に  
親族が会合したり、本家をおとずれたりするのは、豊年祭の翌日・苗まきの時や七夕、  
盆祭、十五夜ぐらいで日常生活ではあまりみられない。」（林 1969: 35）

「このように、村内における本分家集団や「ヒキ」関係は、住民の潜在意識の中には  
存在するとしても重要な機能を果たしているとは云えない。敢えて云うならば、男系  
親族集団は、その関係にまつわる「一見舞」や「一祝」が、村人をして「交際はやっ  
かいです」と意識させるように、村落の血縁適当度を不可能ならしめる傾向さえみら  
れるのである。川平にあつては、血縁関係が実生活を統合（integrate）するのに支  
配的な影響力を持っているとは云いがたい。家系に根拠をもつ優越意識が実生活とは



かけはなれた別の次元であらわれているだけと考えられよう。」（林 1969: 35）

「本家は普通「ヤームト」と呼ばれるが総本家は特に「トニムト」と呼ばれる。「トニムト」は部落の総元の家とみなされるが、「ヤームト」との区別は住民の間でも明確ではない。川平では、本家にあたる家は30戸あり、全戸数131戸の23%に及ぶ。しかもそのほとんどが上村にあり、家族は概して老令である。」（林 1969: 35）

「例えば、トラ年の親にウマ年の子供が生れたような愛称の合わないときには、愛称の合う他人に「ハナ米」をもっていって名前をつけてもらう。その名付け親を「養い親」と云い、祭祀等の行事の時には全く親子と同じように付き合う。」（林 1969: 36）

「赤子の健康が悪い時には、「ヨーマ親」といって別の親をたてる。名付け親に対しては正月やその他の祭祀には「シュウビ」（お祝い）をもってゆき赤子は生長し死ぬまで、「ヨーマ親」を自分の親より深く思うそうである。」（林 1969: 36）

「現在の川平においては、血縁的なしは「家」的な結合原理にもとづく「ヒキ」関係、「門中」制度が実生活を統合していないと云えよう。」（林 1969: 36）

#### 年齢集団

「別の統合原理つまり年令・性を基準とする原理に村落社会の特性を求めてみる必要がある。つまり、村落のあらゆる意思決定がどのようになされるのかという政治権力の配分が問題であり、血縁関係によって権力の集中がみられないのなら、年令割の原理がどのように権力を分散せしめているかに観点を置いてみるべきであろう。」（林 1969: 36）

「年令集団の中で、強い発言権をもつのは部落会であり、公民館組織の下で農事改良組合牧野組合、森林組合を中心に生産の向上を目ざしている。共楽会あるいは老人クラブは、名目的には公園管理や祭等催し物の企画を行うことになっているが、会の活動意欲は旺盛である。また、老人クラブと部落会との関係については、「一般に老人クラブが部落会等でしゃべるのはよくない。青年会にも口を出すべきではない。何事も世代毎で相談してきめる方がよい。」という意見が聞かれた。」（林 1969: 37）

#### ユイマル＝共同労働組織

「戦後の沖縄、特に八重山ではパイン栽培が中心であるが、戦前までは「米の島」とまで云われ米作が中心であった。田植時の繁忙は、ここに一種の労働組織を発達せしめた。即ち、「ユイ」の方式がこれであり、八重山では「ユイマル」・「ユイマロ」・「ユイマール」・「ユイマワリ」等のさまざまな呼び方がされている。しかし、原則としては親戚や友人同志で農繁期における作業や家造り、その他の村仕事を仕合うことにかわりはない。サトウキビの収穫を主に田植え、田草取り、米刈り等の農作業は、耕地の接近した者同志で「ユイマル」が組まれる。また部落会が中心になって、石垣市役所が直接行わない道の補修をする。そして特殊だが原理的には同じ、家づくりがある。これは全村的規模で「ユイマル」がなされる。その他、ネズミ取り、出産、葬儀、誕生祝い、結婚式における米つきの結等、「ユイマル」を組む範囲は広い。また、「ユイマル」の中でも、特に川平湾のむこう岸、字吉原の近くにある山林から材

木を切り出す「ユイマル」のことを「山バフ」（バフとは大仕事という意味）という。現在でも「家づくり」の際には「山バフ」がなされる。これは青壮年男子の奉仕による。」（林 1969: 37-8）

「農作業において、例えばサトウキビの収穫の場合、一軒につき1日10人—15人の労力と延べ6トン積トラック6台が必要であり、数ヶ月間キビ刈りの「ユイマル」が組まれる。労力依頼は耕地の地割に基づいてなされる。収穫には、サトウキビの堅い茎を切り倒してゆかねばならず、仕事の性格上主に青年が刈りと運搬をし、葉落しは老人が行う。この場合、女性であるから葉落しをするということはなく、同じように若い女性は刈りをやるのである。キビの葉落しとか田草刈り、畑の除草は老人の仕事と決っており、農作業の協同にかぎって云うならば、性別による区別はなく世代別による区別が明確である。」（林 1969: 38）

「このような「ユイマル」にかかわる主催者と労力提供者との間の関係をみると大きな特徴があることに気づく。つまり、形式的には取引きとして“give and take”の考えが原理的にはたらいっているようであり、各家毎で帳簿に、働いてもらった人々の姓名・日付・期間・作業内容を記入しておき、そして恩義を返す時にそれを見て、他の農作業でも労力の程度をてらし合わせた上同じ仕事量を返えすことが守られていることである。だいたい同じ仕事で返えすことが多いが、主催者の要請に従って異なった仕事で返えすことも可能である。そして、重要なことは、一見極めてビジネスライクにさえみられる権利と義務の関係は、云うならば義務の遂行を円滑に行うことによって、権利をわざわざ主張する必要がないかたちで労力交換が進められている点である。そこには特に主催者側にも微妙な心理がはたらいており、労力依頼をする場合、少し難しい仕事（例えば「山バフ」のような仕事）になると、遠い親戚を通して間接的に頼むのが普通である。また依頼を受ける方でも「ユイ」は親の死に目に会わないと云われるように、絶対義務と考えられており、「山バフ」のような奉仕的な仕事でも、「出ないとどうも気がそぐわない」と考えられている。どうしても出られない時は、依頼された家の方で責任をもって別の家へ代りを頼むか、物品でかえる。さらに主催者の方での接待が大変であり、キビ刈り、田植え、田草取り、ネズミ取りでは現在ではお互い様だからという理由でなされないが、稲刈りや家づくりの「ユイマル」では接待がされる。そこには単なる接待以上の意味として「義理堅さ」「余興」等の意味が発揮されているものと思われる。（林 1969: 38-9）」

「以上、川平における協同労働を概括しよう。各農家間の労力交換を目的とする「ユイマル」とその中でも特に労力奉仕を目的とする「バフ」や村仕事との区別は必要である。これら両者の区別は、協同労働の規模と主催者の性格を規準としたものである。つまり、「ユイマル」は各戸を主体に組み・耕地割に従って農作業がなされ、「バフ」や村仕事は部落会を主体に全村的規模でなされるものである。これらの協同労働の社会機能として重要なことは、単系的血縁関係の維持ではなく、あくまで対等のゲマインシャフト関係としての世代・年令関係の維持ということである。いうならば現在の川平の社会的統合は、農業生産では部落会が中心をなし、部落の生活でsymbolicな意味をもつ祭等では共楽会や老人クラブが中心として進められているのである。そしてこれらの主体の下になされる部落の秩序維持の一つの基盤は、協同労働の中に基

本的に認められる住民の行動規準としての労力交換の原理に求められよう。この労力交換は、経済的利害関係であるよりもむしろ、部落の生活における友好的関係の持続としての意義をもつものである。極端な言い方をすれば、現在の部落にあって部落内人間関係の契機となるものは、実生活では農業生産を媒介とした顕在的な「ユイマル」とそのポテンシャルなエネルギーのみではないかと思われる。住民にとって、「どこかの家から仕事を借りている」という明確な意識は、その家との間に友好的関係があるという事実と同じであり、「借り」を返してしまうということは部落内の付き合いをやめることと同義なのである。」（林 1969: 41）

「不十分ではあるが以上述べたことから川平の社会的性格をまとめればつぎのように規定できるように思われる。部落内部においては「門中」「ヒキ」の血縁関係は多分に住民の潜在意識に構成されており、実生活にあっては顕在的な影響を与えていない。そしてその反対に年令・性を規準とした原理を統合軸として機能しており、個人が社会単位として表われている。また、土地所有関係が直接社会関係に影響を与えず、生産の共同、及び平等な分配にもとづく共同体的労働規制は強くはたらいっていないように思われる。」（林 1969: 41-2）

「give and takeというよりもむしろreceive and returnとしての意味の方が妥当である。」（林 1969: 42）

「帳簿は各戸がもっており、しかも記入は「借り」た分だけで、貸した分は記入されない点は注意に値しよう。」（林 1969: 42）

「労力依頼は、家族規模や状態に照らし合わせて戸数割りではない。」（林 1969: 42）

「「家づくり」は、各戸が主催の「ユイマル」を組むのであるが、規模は仕事の必要に応じて近隣から全部落に及ぶ。この際、上村、中村、下村の区別は規準にならない。」（林 1969: 42）

## 第4章 川平集落の農業

### 第1節 川平の農業の現状

以下は、1960年代の早稲田大学による石垣および西表の調査報告書による。

#### 農家経営

「川平は世帯数131，総人口743人（1967年4月）（表-1参照）でこの世帯数の約8割以上が農業に従事している農村である。八重山の農業従事世帯数が約8割であるから、就業状況からは、八重山の平均的農村と言えよう。（表-2参照）」（新井 1969: 11）

「川平の総面積は35048アールで石垣島の面積25834ヘクタールの約100分の1である。川平の総面積に占める耕地面積の割合は70%であり、そのうち畑と樹園地で耕作地の80%を占めている。（表-3）。八重山の中心農作物はパイナップルとさとうきびであるが、川平もこの二つの農作物が中心であることがこの表よ

り推測される。」（新井 1969: 12）

「次に土地所有状況についてみてみよう。調査戸数95戸の平均所有耕地は24反、そのうち農家だけの所有耕地は26反である。この耕地所有規模の度数分布状況は平均（算術）より下の値で最大（モード）となり所有規模が大きくなるにつれて減少していく。（表-4、グラフ-1参照）」（新井 1969: 12）

「土地所有に関しては較差がはっきりしているといつてよいだろう。」（新井 1969: 13）

「一般に非農業従事者の所得が高い。ただ勤務員の所得が低いのは、従事者が若年のためである。」（新井 1969: 13）

「67年度八重山要覧によると全八重山の63年度の反当り平均農業所得は、33.36ドル、66年のそれは、32.28ドルである。川平の平均農業所得を（表-5）の数値から計算すると31.8ドルとなりやや平均よりも低い。（新井 1969: 14）

「川平の反当り農家所得は下位半分によってひき上げられていることになる。しかも、下位半分の値は八重山の平均値を上まわっていて、川平全体としてみた場合、八重山全体よりも土地生産性、所得の絶対額も高いから、八重山では比較的豊かな農村と言えよう。」（新井 1969: 15）

「経済的側面から川平の農業生活をみた場合、各農業世帯の較差はただ土地所有の規模によるのではなく、労働量と土地所有の規模によるのである。だから農業従事者（家族でもよい）が多く、また土地所有規模の多い農家がより収入の多い生活をしている。もっとも労働力の不足は機械化によって補填出来るが、パインアップルは省力化がむずかしい。」（新井 1969: 15）

「川平の農家は本土の地方地域でみられるような、いわゆる三ちゃん農業ではない。世帯主と主婦とが農耕の中心である。だが農業従事者の年齢は年々高齢化している。米も作っているが、自給用にする農家が多いという。野菜も消費地の近郊農村ではないので、商品にはならず自給用がほとんどである。ただ、川平には畜産組合があり、組合員25名が60ヘクタールの川平牧場に肉牛およそ60頭を放牧しているのが注目される。一般牛も110頭が35戸の農家で飼われている。」（新井 1969: 16-7）

#### 農作物

「サトウキビ：部落の農事改良組合が〔農協〕（石垣市全域を対象とする）にキビ苗の申込みをする。しかし、肥料と野草駆除用の薬品とは、製糖会社（石垣島に唯一ある石垣製糖）と個々の農家の間で取り決められる。又、技術に関する機関として、会社の他、〔改良普及所〕（琉球政府機関）がある。」（原岡 1969: 24）

「○ 主要業務：改良組合は、市の助成の下、道路の改修・整備をする。これは組（〔隣組〕）単位で行なわれる。その際、市は砂や車の面で援助をする。○ 構成・組織：改良組合は、部落の殆ど全戸主を組合員にしている。（戦前は全戸加入）組織は、組合長・副組合長（各一名）の下に書記兼会計（一名）がおり、連絡役に伝令数名が置かれる。さらに、評議員会が随時開かれる。○ 会費：毎年変動しうるが、本年は一律に2弗60¢である。直改良組合は、部落で柑橘類の栽培が行なわれたとき

には共同出荷する。サトウキビや米とは対照的に、パインは改良組合と関係がない。」（原岡 1969: 24）

「パイン：パインは8つの会社が、それぞれに、生産者を超部落的に、自社の生産者組合に組織している。そして平生、各社の「担当員が指導に当り、収穫期には、非常勤の「検収員」がパインの実一つ一つを級に認定した上で、契約会社が買い入れるということになっている。技術指導を改良普及所が行なうことはサトウキビと変りがない。」（原岡 1969: 24）

「〔牧野組合〕〔畜産組合〕両者共、4年前（昭和39年）に誕生。前者は牧場主の団体であり（28人加入）、後者はより小規模に飼育している人の組織である。……仔牛の購入価格は、現在120-130弗である。これの35%を政府が補助する。」（原岡 1969: 25）

## 第2節 事例の分析

### I・N

#### (1)

##### 集落の概況

集落戸数は120戸くらい。少し増えている。本土から海の観光レジャー関係でやってきているのがほとんど。農家戸数は60戸くらい。

稲作 2戸

稲作+キビ 40戸くらい

サトウキビ 20戸

畜産 3戸

畜産+キビ 17戸くらい

ふつう「むら」という。部落も使っている。各部落では産業部があるが、農協とは関係ない。部落組織の一つで農家に参加している。農協との関係では、生産部会が作目ごとに作られている。

公民館長 石垣兼保マンボウ氏

産業部：サトウキビ部会、稲作部会、畜産部会

神事部：行事が多いので。古い部落なので。

婦人部

青年部

老人部

12月10日に役員が替わる。任期は1年。館長、副館長、書記、会計、部長。班は昔はあったがなくなって、「教育隣組」を利用している。これは学校の組織で9班ありPTA組織となっている。

宮は4つあって、御嶽マケごとに世話人がいる。神司も4名いる。豊年祭は、7月9日、氏子でやる。これだけは御嶽ごとにおこなう。結願祭は10月7日で最大の祭り。神主は女性で神司と呼ぶ。

昔は、上の村、中の村、下の村といった。今も呼び名はあるが、別々に何かをすると



いうわけではない。

集落の人口は地元だけでみると減っている。小学生は地元が少ない。ほかから来る人はダイビング関係の自営業が多い。川平だけで7-8戸ある。これはボート1台あればできる。

#### 稲作

一期作	田起こし	1月	
	種まき	2月中旬	
	田植え	3月上旬	
	刈り取り	6月中旬	すぐにライスセンターへ運ぶ
二期作	田起こし	7月	
	種まき	7月下旬	
	田植え	8月上旬	
	刈り取り	10月下旬-11月上旬	

#### 防除 2-3回

二期作について。川平ではあまり作っていない。土地改良ができていないので、8月の植え付けで水が不足する。本人は半分くらい作っている。石垣島全体で半分くらい。水さえ解決できれば二期作にしたい。台風にやられるので収量は落ちて250kg/反くらいになるが。

土地改良がまだ進んでいないので、水管理は川からとるので大変。天水田の場合は水不足になることもある。わき水利用のものもある。

農用機械は個別で所有している。トラクター（小規模農家は耕耘機）、田植機、コンバイン。

反収。石垣島平均350kg/反。本人は500kg、多い人は600kgもある。

稲作は増えている。

共同はほとんどない。手植えや手刈りの時はユイマールがあった。ユイマールとは作業の貸し借り、等量交換のこと。相手は親戚や友人。農作業だけではなく、生活面でもある。家の増改築、竹切り（茅葺きの下に使う）。

品種はチヨニシキ。10年くらいになる。奨励品種もあるが、普及していない。

#### サトウキビ

農作業	刈取	2-3月	
	荒起こし	刈取後	
	植え付け	9月	その間に緑肥：豆科のクロタラリアを種まきして伸びたらすきこむ。必ずではない。
	除草、培土、防除	12月初	
	収穫	12月-3月	

反収。昨年5800kg/反だったが、台風や干ばつのため。今年は7tを予想。

土地改良されていると水かけできるが、そうでなければ、車にタンクを積んで撒くくらいで、ほとんど水かけできない。

収穫はハーベスターを使う。島全体で52-3%普及。手刈りもある。稲作の田植えとサトウキビの収穫がかちあうので、機械を利用している。農業開発組合が農機具をもつ

ていて受託（耕起、植付、刈取）している。個人所有はない。何千万円もするので。1日30-40t刈り取る。機械でやると、重労働はないが、代わりに費用がかかって利益率は下がる。

運搬は、運送業者のトラックで製糖工場に運び込む。

石垣島では収穫の15%は株出しをしているが、ここではしていない。というのは、害虫（アオゾウコガネ、ハリガネムシ）がいて、4-5月に産卵し、根を食べるから。2-3月に植え付けるものは被害が少ないので、株出しをする。

手刈りの場合、刈り取りはユイマールでやる。7-8名で作る、車1台分。メンバーはだいたい決まっているが、入れ替わりはある。

畜産が増えて、サトウキビ栽培は減っているようだ。

#### 畜産

畜産が伸びているのは価格がいいから。生後8ヶ月で3-40万円（本土で4-50万円）。飼料は、夏は採草で間に合うが、冬は不足するので輸入草を使う。中国からが多くなっている。

1戸平均10頭くらい。

一部では一貫経営があるが、川平では肥育はなく繁殖だけ。

#### 農家

専業農家は半数いる。高齢者のみの農家もけっこういる。

兼業先。公務員は石垣へ通勤。会社員は石垣へ通勤で通年雇用が多い。

後継者はなかなかいない。農業従事者で若い人は30歳をこえている。

#### 請負

機械をもたない小規模農家は田植えと刈り取りを作業委託する。個人の相対で。育苗は農協に頼んでいる人もいるが、自分で作っている人もいる。

#### 共有地

畑で20町歩ある。公民館のものだが「農業振興会」という名前でもっている。畑の少ない希望者に貸し付けて、収入は公民館の運営資金になる。

昔は60町歩あった。復帰直後に全部企業へ処分した。農地としては使えない土地なので。今、沖縄の建設会社である黒保組がもっていて開発する予定、なかなか手をつけないが。売った金を利用して公民館を運営している。1戸当たりいくらかと各戸に配分して預け、それを回収して運営費にする。配分後に移入してきた人には、準会員として年1000円の会費を徴収する。

その後20町歩を買い戻した。

大地主はいなかった。物心ついてからはいない。基本的に自作。

#### 本分家

本家：モトヤー

別家：ヤーバカリー、分家することを意味する。

#### 漁業

漁業はほとんど自家用。専業は1戸だけ。漁業権は養殖している真珠会社がもっているが、川平の人ではない。川平公民館がこの会社の株主になっていて、会社から年10万円の運営費が来る。この会社に勤めている人も多い。

本人について

水田2町5反、畑（サトウキビ）2町7反。このむらでは大と中の間くらいの規模。

農用機械：トラクター（45ps）、田植機（歩行2条）、コンバイン（2条刈）。

本人は4男で、土地（宅地140坪）を分けてもらった。父親が亡くなったときに遺産相続で田畑をもらう。父親が生前に決めていて、兄弟で平等に分けた。普通は長男が多い。土地の名義を換えたのは父親が亡くなる前。本人がヤーバカリーしたとき、もらうはずの土地をすでに作っていたが、それでは足りないので、他の人から借りて作っていた。墓参りは、本家の墓に集まる。

農業は自分の代で終わりのようだ。長男は石垣市の公務員、次男は東京の会社員。自分が難儀して子どもを育てたので、自分が無理矢理子どもに農業をやれとはいえない。子どもがやる気があるのなら応援するのだが。

(2)

二期作

今年は雨続きで刈り取りがまだ。いつもならすんでいるのだが、2週間くらいシリアメで。川平では6-7名。灌漑施設ができていないところが多く水が十分でないのだから。本人の場合は、水路があって水管理ができているのでやっている。こういうところではみなが全面積をやっている。収量は一期作が400kg/反で二期作が250-300kg。これは台風のためで、今年は台風がなかったので二期作が大当たりした。

減反

こちらではない。これまでもなかった。米の価格は落ちているが、作付け制限はない。沖縄県に形だけは来ているが、それぞれの地域で不作があるので調整しているらしい。全県的には減反分は消化してしまう。したがって、調整は農家には来ていない。

品種

これまではチヨニシキ。今年の二期作からヤエミノリ（奨励品種）。これは前から作ってはいた。いずれも二期作に適している。ずっと前は、トヨニシキ（まずい）、北陸？号（適していない）。戦前には台中65号、これは脱穀しやすかった。今のは機械向きで、束ねてトラックに投げても落ちない。

稲作とサトウキビ

一期作の田植えとキビの刈り取りがぶつかる。12月末ー3月田植え、12月10日から3月までの100日間刈り取り。

キビの刈り取りは規模の小さい人は手刈りなのでユイマール

田植えはみな機械で個人所有。コンバインも同様。ライスセンターで乾燥・調製するので、かち合うときがある。

農家

前はほとんどが農家だったが、年をとって老人世帯になって農業を辞めた農家が多い。

専業農家 40戸くらい。

兼業農家 20戸くらい。

稲作農家 稲作のみ 2戸

稲作+キビ 20戸以上

キビのみ 4戸 面積が大きい

畜産 2戸

畜産+キビ (+兼業) 30戸

面積が大きくないので、いろいろ組み合わせざるをえない。

#### 今後の展望

川平の農業。後継者が少ないので心配。稲作もふくめてみな減少している。若い者たちはみんな農業を嫌がっている。年をとったら戻ってきてくれるのかもしれないが。若い人では40歳のO・Eがいるが、あとは60歳代になってしまう。

田は委託するほかはないだろう。受託するものは今のところはあるが、将来はどうなるか。というのは受託農家にも後継者問題があるので。

キビをやっている人も畜産に変えている人がでている。畜産の方が楽だという。本人は毎日の仕事で嫌だが。キビは刈り取りで人手がかかるし重労働だ。機械でやると手取りが少なくなってしまう。

畜産は前よりは増えている。みな繁殖牛。若い人（後継者）がいる農家でやっている。今のところは儲かっているようだが、自由化でどうなるか。

花はない。石垣市では東の方でやっている人はいる。

野菜はキビとの複合で1戸。経済連へ出荷している。儲からないとしょっちゅう言っている。マージンをとられると手取り分もないとか。

#### 集落

戸数180戸。本土から来た観光業の人が多い。会社員は町へ行く。

前は産業部と別に実行組合があったが、公民館体制になって（2-30年たつ）産業部になった。産業部の3部会にはそれぞれの農家が加入するが、重複してはいる農家もいる。産業部長は副館長が兼任。

#### 請負

田の小作料は、反当1万円や5千円など。農業委員会では5千円。

大規模農家はたいてい受託している。部落内の老人世帯からほとんど。

部落では10年くらい前に始まった。今の7-80歳の人が農業をやめたときに広がった。

今田を作っている人はほとんどが60歳。若い人は大浜永太郎が1人なので、今やっている人が70歳くらいでやめたらどうなるかが問題。誰に委託したらいいのか。

#### 本人

4戸から3町歩を受託している。1戸はいとこ、3戸は老人世帯。受託を始めて10年くらい。

5年前にキビ畑を3町歩公社から購入した。畑がないので、子や孫に相続させるためにと買った。子どもは2人なので、長男と次男で話し合いをしてどうするか決めればいいが、とにかく相続しようと思っておいた。子どもが農業を嗣ぐかどうかにかかわらず、子どもに財産を残すという意味で。「子供に親からもらう財産がないとみられるのは心細い」。

相続は死んでからだといざこざが起こるので生前にやった方がいい。そうしている人が多い。土地を購入して残すというのは普通におこなわれているが、売買がよくおこなわれているというわけではない。「農家は簡単には土は離さない」。

石垣の場合は、土地ブーム（バブル期）のときに、青葉開発（本土の企業）に土地を

手放した。それをブームが終わって公社に売却した。公社が基盤整備をして農家に売った。「悪い土地が上等になっている」それで今年に3町のうち1町を水田にした。1町歩全体で60万円かかった。

こういうケースはよくある。農業委員会で企業と交渉して買い戻している。??で基盤整備したのはほとんどそれ。あちこちにあるはず。本人も当時4反をいい値で売った。その金を今回の資金にした。「ああいうのがなかったら大変だ」。

H・Y

(1)

本人

家族は本人(1930年生まれ)、妻(1935年生まれ)、長男(1955年生まれ)、嫁(1964年生まれ)。次男と長女、次女は他出。水田20aを委託している。畑は水田をつぶしたのも加えて、サトウキビが360a、バナナが40a。

もともと田畑は少なかった。小作でやってきていた。多いときで3町ほど。何とかして田を購入してやっていきたかったができなかった。水田の面積が限られているし干ばつがひどいので畑では芋しか作れない。それで水田を大事にしてどんなに貧乏しても売らなかった。それで買いたくても買えなかった。その代わり、やめるときまで小作をしていた。反当たり1万円で請け負った。昔は3分の1を地主にとり、2分の1というのもあった。

稲作とは別の方向でサトウキビやパインに切り替えた。稲作とサトウキビは作業がかち合うので、手植えの時は大変だった。

最初は稲作とパインでやっていた。パインはいくらあっても足りなかった。口上が4-5箇所あってとてももうかった。パインを作るとサトウキビもあり土地が足りなくなつて、山を切り開いてパイン畑を作った。昭和35年(1960年)ころのこと。

養蚕もやった。米と競合するので稲作をやめてサトウキビと養蚕とした。桑畑を2町歩くらい。植えるのは大変だがそのあとはひまで、最初はもうかった。養蚕は川平としての成績が評価されるので、悪いのを出す人がいてやめてしまう農家もいた。10年くらい続いて5年くらい前に八重山の養蚕は終わった。本人は最後までやっていた。昭和56年から平成6年まで。1回の収量は内地より落ちるが、年間に12回できる。桑が年中あるので刈った後つぎの蚕に間に合った。

その後はサトウキビだけを4-5町歩やっていた。

稲作

農業をやめてから15年くらいになる。コンバインが使えるまでやった。当時は機械化は余り進んでいなかった。育苗では、機械メーカーが指導したが失敗したりした。機械苗は鳥が根にある粕を食べやすいので、みんなが一斉に機械化しないとやられてしまう。15年くらい前から機械植が始まった。そのころに、ライスセンターが建った。センターにもっていけるので一人当たり面積が多くなった。今まで作れなかったところを水田にしたり、年寄りから借りたりした。

当時は二期作は余りやらなかった。というのは、一期作は暑すぎて粕が発芽しないので、二期作で種子栽培をやっていたので。

農業をやめたのは、センターになって経費が引かれるのと、センターで乾燥すると水



分が飛んで量が少なくなるのもうからないと思ったから。手数料が高かったのと歩留まりが悪くなったということだ。

今は作ろうと思えばいくらでも借りられる時代になった。というのは、作れない人が多くなったから。

品種について。手植えの時は台中65号。機械植の時にトヨニシキ。作りやすく、食味もよく収穫量が多いのでこれになった。ヒトメボレは5-6年前から入ってきたが、去年からみんながつくり出した。導入の時は時期や草丈などいろいろ問題があったしかし「作物はその地方にもっていくとその地方に慣れる」。

岩手県から種子をもらったこともある。二期作が台風でだめになったときなどに。岩手県が不作の時は二期作を早めに作って提供した。北風がまだ吹く時で作りづらかったが。

#### 水田

昔は天水田や小川やわき水を利用したのもあった。干ばつがひどいので、一カ所だけでは困るので「田圃は7カ所もて」という言葉があった。川から導水するところをスキーというがスキーは宝だった。浅田は水がすぐ引くので作りにくく嫌がられたが、機械化でその利用価値が高くなった。面積が多かった農家は深田が多かったので、逆に今はやりづらくなった。

#### サトウキビ

作業日程は、夏植の場合、1年目の8-9月植え付け、2年目の8-9月に別の植え付け、2年目の12月末から3月末に収穫。毎年収穫するので4町歩で2町歩収穫する。株出は毎年年末か年始に収穫するが、株出は機械にあうようにでてこないのので収穫がよくなく引き合わない。土壌がやせて連作障害も起きる。春植の場合、1年目の2-3月植え付け、2年目の12月末から3月末に収穫。春植は収穫は少ないが株がよくでるので連作できる。川平では今は夏植がほとんど。田植えとぶつからないので。

#### ユイマーロ

ユイマーロは、3-4戸が集まって、共同で1日1台（8tトラック）を出せるくらいで順番に回る。同じメンバーではなく、同じ集落内でいろいろな人と組んだので、集落中が親戚づきあいと同じで、そうでないと仕事ができなかった。田植えや行事も同じだった。

昔はユイマーロでやっていたので楽しかった。今は、家族だけになって、子供がやらなくなって夫婦だけになって、しかも老夫婦なので、機械に頼らざるを得なくなった。

#### 村の行事

昔はやりやすかったが、最近は休みもバラバラで会社によって違っている。それで次第にやりにくくなった。

#### 四大大行事

プール（豊年祭）：旧暦の干支できめるので毎年日が異なる。

結願祭：65歳以上の女性が御獄にいったまゐる2日こもって祈る。

節祭：「神願い」まで続く。

旧正月：御獄に行く。

それ以外は小さいが各家から出役する。御獄が4つあるので神行事が多い。男性だけ

は、アサニガエといっていくつかの祭の日の朝に御獄にお参りする。女性だけは、結願祭の夜ごとりと神願いの時。

行事が多いのは伝統的な集落だから。稲作だからというわけではない。節祭の時にマユンガナシをやる。身の笠をかぶった神が作物の作り方や人間や牛の繁栄を祝詞で授ける。そのなかに6穀がでてくる。

公民館の会合で改善の話がよくでるが結論がなかなかでない。若手がやりきれないといい、老人は伝統を守らなければと対立する。

行事は昔はもっと多かったが、戦後いくつか廃止した。節祭の行事が一番大きかったが、それも縮小した。

神司は御獄に1人ずついる。神司はその日だけ氏子の中からくじを引いてきめる。その人がやれるまで続く。集落の全戸がどこかの御獄の氏子になっている。

公民館の中に神事部があり、そこに神事総代が4名いて、その下にムラブサが下働きをする。

#### 集落

ムラは川平集落全体を指す。部落というのは昔の呼び方ではない。上の村、中の村、下の村。昔は競争があつて、踊りの違いもあつた。太鼓の持ち方も違って、今も残っている行事も別々にやっていた。今は全体でやる。

#### 公民館

公民館長、副館長、書記、会計、評議員10名。任期は1年。集落として統制がとれている。館長だけはみんなが希望するので人材に困らない。

神事部、産業部（農業だけでなく観光も）、婦人部、体育部、老人クラブ（65歳以上で120名）、青年部

正会員は65歳までで40名いるが、それよりも老人クラブのほうが多い。準会員は各戸1名。若い人は結婚すると仕事で市街に住む。会費は年間2万円。準会員は半額。

川平人口の中で外来者（ヤマト）がいっぱい来ているので、正会員にしたらという意見もあるが、習慣や行事参加という点で見合わせている。協力はしてもらうが会費を取っていない。

川平の共有地の売上代金を預かっているの、その返済ということで会費を取っているの、地元の人余り文句を言わない。（?）

#### 産業部

稲作部会、畜産部会、サトウキビ部会がある。JAの下部組織というより自主的な組織。複数の部会に入る人もいる。多量生産、反収増、歩留まりなどの勉強会、JAとのつながりでの講演会、先進地からの来客との懇親会など。

稲作部会は岩手との交流でよく勉強している。

キビ部会では、キビ作がなかなかすすまず、関心が薄い。公民館で5-6年前に企業に売却した土地を買い戻して2年かけてキビ畑にした。石糖を呼んで講習会を開いている。工場と昔は契約をしていたが、今は作る人が少ないので、いくらでも植えてくれと奨励している。工場は島全体で1つだけの、地元資本の石垣製糖株式会社。昔は八重糖と石糖の2社があつたが、無理だということで1社になった。製品は本島の別会社へ出荷している。

防風林が必要なので、県に観光を兼ねた村作りをするように補助を要請している。オオギバシヨウを植える。

T・H

(1)

本人

所有：田 8 反歩，畑 6 町歩（キビ今年収穫 2 町歩，今年植え付け 1 町歩，草地 3 町 5 反）

借地：2 町歩

畜産：母牛 20 頭。繁殖で年間 16-7 頭を生産する。

川平では面積は大きい方になる。いままで 2 町歩を二期作していたが，今は 8 反歩まで減らした。8 反歩を二期作で 1 町 6 反となる。減らしたのは，畜産が忙しいから。

稲作は自家用と民宿用で，出荷は 1-2 t。

家族

祖父 86 歳，祖母，父 65 歳，母，本人 40 歳（1960 年生まれ），妻，高校，中学，小学  
祖父が裸一貫から土地を売って面積を増やした。父の代には私有地払い下げで 6 反歩  
買っただけ。買っても経営的に成り立たないので。

稲作とサトウキビ

米とキビは父と本人でやっている。一期作でキビの収穫と田植えとがぶつかる。二期作ではキビの植え付けと田植えがぶつかるが，キビの植え付けを 10 月にずらすことが可能。一期作でぶつかるときは，整地を父が，田植えを本人がやる。機械を使うのは父。

畜産は 2 年前までは祖父がやっていたが，今は父と本人が米原地区でやっている。

稲田は米原と吉原にあるが，牛が増えたので半分を草地に切り替えた。

川平の水田はあちこちにある。崎枝からこっちは昔はほとんど川平で使っていたが，深田が多いのでやめているところが多い。

キビも散らばっている。土地改良が入ってまとまっている人もいるが，なかなか集約できない。高齢者は換地や売買を嫌がる。貸すときも身内にで，正式に農業委員会をおすのは余りしない。

土地の売買では，バブルの時に不動産屋に売ったが，転用できずに仮登記のままで不動産屋がもっているものもある。復帰直後にもあった。

貸し借りはヤミ小作で，多いわけではないが常時ある。高齢化で増えるだろうが，若手には回ってこない。中間層が元気なので，80 代が 60 代に出すというのが多い。

若手

専業はほとんどいないといっている。専業農家は，楽しみでやっているという人も含めて 70 戸をきるくらい。兼業が多いが，若手が地元にいらないのが現状で，親がやっているので同居して兼業となる。

本人は 40 歳で最年少。あとは N・M が 42 歳，N・N が 43 歳，O・E が 46 歳と，若手はこのくらいしかいない。

畜産

農家の定期的な収入が得られる。キビや米は収穫期だけだが，出産は通年である。牛

は年1産をうまくやれば毎月収入が入ってくる。補助事業（1900万円）で平成元年に機械を導入したが、稼働率が6割くらいなので、草地を増やして稼働率を高めようとしている。利益率というより回転がいいというのが第一だ。牛も子牛が生まれるまでに2年かかるが、順繰りに回していけばいいのが魅力だ。

両親がいるので休みは取れる。農協にヘルパー制度はあるが、余り浸透していない。和牛は乳牛と違って進んでいない。子牛を育てるのが技術上むずかしいので。大規模にやっている農家は休みを取っていないはずだ。肥育と違って繁殖は、出産、発情、養育などが大変だ。子牛は下痢や風邪が大変だ。成長が止まってしまう。獣医の利用は、今年から共済にはいつている。そうでないと1回の診察で3-4千円かかってしまう。5-6頭の時と違って、20頭になるとストレスや感染が増える。

増えた分だけ生産が上がるというものではない。畜産専業と違うので、牛の面倒を充分に見きれないこともある。

#### 子牛の出荷

子牛の成長は1日1kgといわれているが、本人は技術が伴っていないので0.7-0.8kg。下痢があると増えない。

系統で価格も異なる。買う側も農家を見て、ここならいい牛がでると高値をつける。

「牛を見るより農家を見る」時代になっている。系統は以前は島根や広島の本土から入れていた。家畜改良事業団から種を購入する。雄は種牛が優秀だとあちこちで使われている。精液のヤミ取引もある。買い込んでいていい結果がでると高値で売る。

出荷価格は生育や系統で、その時々で異なる。1月には2頭で45万円、2月は2頭で60万円だった。

石垣は毎月市場を開いているが、隔月のもあって、かち合うと購買者がこないこともある。後半は購買者がまばらになったりということもあって、競りの順番も価格に影響してくる。

#### サトウキビ

キビも毎年できが違う。今年は豊作。反当が1t違うと2万円違う。99年のキビは、糖度がのらなくて価格が標準より低かった。後半はよくなってきたが。

#### 本人の経営

中心としては牛。それに民宿用も含めての稲作。今は、牛で4割、キビで4割、米で2割。以前は3・3・3だったが、米を減らした分だけ牛が増え、キビは小作で増えた。

民宿は妻が経営している。収入は民宿から4割、農業から6割。ただし、機械代金などで、農業の純益はあがらない。平成元年に牛舎、5年に機械購入、当時母牛が40万円したが、今は24-5万円。それで四苦八苦している。見通しの甘さがあった。牛がいい時期に始めたので、その価格で計画を立てたため。もう2-3年で消却は終わる。ただし買い換え時期が迫ってくるが。

農業体験民宿に今年登録した。石垣市ではこの民宿だけ。

#### 川平集落

畜産農家は戸数としては横ばいか少し減る。規模は増えている。本人の20頭は川平では多い方。12-3頭や30頭、15-6頭、8頭など。少ない方では2-3頭もある。

## 観光

地元の良さをアピールできていない。地元の人が何を観光にできたらいいのかと思っていたら、外来人が思いもよらないやり方でやっている。

ダイビングはほとんどよその人。20年くらい前に始まった。本人の弟もやっていて、その客がここの民宿に来る。ダイビングショップは7-8くらい。その従業員も地元の人ほとんどいない。個人経営だし地元とのつながりはそんなにない。だが、子供が小学校に上がるようになると地元とのつながりがでてくる。川平小中は民芸や方言などで地元の先輩とのつながりがある。

観光以外の人は自分に関係ないという態度。農家などが関心を示さない。本人も若手として、外来者と連携するということは考えても見なかった。そこまで余裕がない、乗り気にならなかった。

本人は農業をやる前に10年間ホテルで働いていた。家に帰ってからはやる気にならず、民宿の仕事にも携わりたくない。農業は、生活していくには苦しいが、自由が利くし楽しい。ああすればよかったと後悔ばかりしているが、それでも収穫期にはやっていて楽しい。

今までは父が5-6頭規模でやってきたやり方をやっていたが、20頭になるとそれでは通用しない。草にしても、生草と乾燥では牛の成長が違う。

公民館は財産があり金があるので、いろいろな問題もあるのに、外来者を一般会員にしまうと、要求を拒めなくなるという問題が出てくる。土地を買い戻したというのも公民館の仕事だった。そういうときに外来者に対して、住んでいるだけで権限が発生するのかがどうなのか、という意見が老人には強い。神信仰も外来者が加わって結果的にすたれていくのが怖い。公民館と自治会に分けて、自治会としての組織に入れて会費を取ってもいいと思うが、2つに分けるのはおかしいという人もいる。地域に住んでいて会費を払わない人がいるのはおかしいという考えはあるが、会費を出して権限ができるとなると何かがあると問題だ。

見せる行事の時は外来者にも入ってもらっている。それ以外はほとんど地元の人だけ。外来者と付き合って、いい方向に行くかどうかはわからない。



## 引用文献

- 新井秀夫, 1969, 「産業化による農村経済の変化—川平の経済的背景」 早稲田大学アジア学会第7次八重山調査隊『八重山調査報告書—川平・古見—』, 10-23。
- 池原真一, 1979, 『概説・沖縄農業史』月刊沖縄社。
- 石垣統計情報出張所, 1997, 『八重山の水稻 平成9年3月』沖縄農林水産統計情報協会。
- 石垣統計情報出張所, 1999, 『石垣市の農林水産業 平成11年3月』沖縄農林水産統計情報協会。
- 大城喜信, 1997, 『展望 沖縄の農業』琉球新報社。
- 沖縄県農林水産部, 2000, 『平成11年度 沖縄の農林水産業』沖縄県農林水産部。
- 沖縄総合事務局農林水産部農政課, 1991, 『沖縄県下の農家の土地保有・利用関係基礎調査の調査結果報告書——城辺町, 石垣市——』沖縄総合事務局農林水産部農政課。
- 川平村の歴史編纂委員会, 1976, 『川平村の歴史』川平公民館。
- 川平部落会, 1950, 『郷土史』。
- 喜舎場永珣, 1935, 『石垣町史』(復刊: 1975, 国書刊行会)。
- 杉原たまえ, 1994, 『家族制農業の推転過程』日本経済評論社。
- 戸谷修, 1995, 「産業構造と就業構造の変動」山本英治・高橋明善・蓮見音彦『沖縄の都市と農村』東京大学出版会, 51-93。
- 林正昭, 1969, 「「ユイマル」—村落生活における協同労働」 早稲田大学アジア学会第7次八重山調査隊『八重山調査報告書—川平・古見—』, 30-42。
- 原岡信, 1969, 「川平の公的社会組織」 早稲田大学アジア学会第7次八重山調査隊『八重山調査報告書—川平・古見—』24-29。
- 宮井隆・中村泰三, 1963, 「農林業」大阪市大八重山群島学術調査隊『八重山群島学術調査報告書』, 47-89。
- 八重山支庁農林水産振興課, 2000, 『八重山の農林水産業 平成11年度』八重山支庁農林水産振興課。

<資料>

※本資料は、川平集落の歴史を編んだもので、縦書きで手書きで記されている。石垣市図書館に所蔵されており、閲覧に際しては、多大な便宜を図っていただいた。感謝申し上げます。

一九五〇年 郷土史 川平部落会

緒言

吾々は自分を知り親を知り祖先を知ると云ふことは自然の人情であり又当然の筋道であると思ひます 即ち現在を知ることによって過去を知り将来を慮ふ事によって人類の進歩もあり発展もあり努力もあり得る事だと思ひます 此の意味に於いて此の際当小学校の六十週年記念事業の一つとして部落の史記を書き残して将来の為にかなればと思ひまして郷土史の編纂をなす事になり茲に筆を執る事にいたしました

何しろ記録不十分である為部落の古老の傳説や口碑によりまして出来たもので史実としてどうかと思はる点もあると思ひますが此の点皆様方の御賢察と御判断によりまして補って下さる様あらかじめ御ことわり申しておきます

次に編纂委員の方の労を感謝しながら担当記事を御紹介いたして諸言といたします

川平郷土史編纂委員長	石垣永正氏
同 副委員長	島袋清一氏
同 幹事	大底広吉氏
同	南風野治氏
同 幹事補	仲本英珍氏
同	南風野喜一氏

編纂委員

一. 部落の沿革編	南風野英助氏
一. 教育編	仲本英助氏
一. 産業編	南風野栄副氏
一. 宗教編	南風野英三氏
一. 衛生編	仲野源雄氏
一. 人物編	喜舎場兼美氏
一. 名所旧蹟編	喜舎場兼次郎氏
一. 風俗習慣編	大仲松氏
一. 政治編	

一九五〇年十月編纂

一九五一年 月浄書

## 目 次

### 第一章 沿革

沿革	一頁
----	----

### 第二章 教育

沿革大要	四
本校の現況	八
創立以来歴代校長	一〇
創立以来の教職員	一一
豫算調	一四
幼稚園	一四

### 第三章 産業

農作	一五
農機具類の改良	十七
畜産	十七
工業	一九
交通運輸	二〇

### 第四章 宗教

群星御嶽	二一
山川御嶽	二一
赤色目宮鳥御嶽	二二
浜崎御嶽	二二
測地御嶽	二三
觀音堂	二三
久場川節眞世がなし	二三

### 第五章 衛生

衛生	二五
----	----

### 第六章 人物

仲間満慶	二七
石垣永將	二八
保嘉真山戸	二九
我那覇親雲上	三〇
仲間松大主	三〇
喜舎場兼清	三一
西垣松	三一
島袋松	三二
南風野実	三二
宮良直明	三二
仲本英領	三三
高嶺保里	三三

石垣永宣	三四
宇根永春	三四
第七章 名所旧蹟	
仲間岡	三五
獅子岡	三五
ヤドピキ屋	三六
火番岡	三六
アムヤナア	三七
大和墓	三七
パンダキ岡	三七
屋島墓	三八
於茂登ノ櫻	三八
荒川	三八
川平湾	三八
パマサヤ	三九
ヨウン ユカザ ナアチャ	
ウレマ野 ピシタマ	四〇
メーラーアーパー川	四一
ヤードーアブ	四一
タダバナリ	四一
第八章 風俗習慣	
服装	四二
祭事に関する風俗習慣	四三
冠婚葬祭	四五
相互扶助	四五
農耕と山刀	四五
ヤーザライ	四六
ステユイ	四六

## 部落沿革編

### 嘉平村

昔神代時代は仲間に部落は在り其の時代の元家は現在は四家で子孫繁栄して居る

嘉平村元家南西野家の火の神の神名は（ウリフウロル元ヌウフヤン）

其の子孫分家したる火の神の神名は（ウリフウロルパイテヌウフヤン）

仲底家火の神の神名は（ウルカウロル元ヌウフヤン）

其の子孫分家したる火の神の神名は（ウルカウロルパイテヌウフヤン）

高屋家の火の神の神名は（イレトーアレトーウロル元ヌウフヤン）

其の子孫分家したる火の神の神名は（イレトーアレトーウロルパイテヌウフヤン）

仲間家の火の神の神名は（ナカマバラウロル元ヌウフヤン）

其の子孫分家したる火の神の神名は（ナカマバラウロルパイテヌウフヤン）

田夢家の火の神の神名は（タダバラウロル元ヌウフヤン）

其の子孫分家したる火の神の神名は（タダバラウロルパイテヌウフヤン）

但し田夢家は現在廃家になれり

右の五家の子孫が廣がり交通の便や文化の進むにしたがい下へ下へと村はひろがれり

右五家元屋外に一、二の（元ヌウフヤン）はありますが之等の元家は仲間村より各部落に廣がりたる後一家を建て始めた元家なり

右の五家の元家より廣がりて現在百戸余りの戸数が（パイテヌウフヤン）である事又は昔よりの傳説により村の始めは仲間村であった事が分るのである

一、寛永九年より中山府より在藩を置き

同十八年より慶安二年迄大和在藩を置きて統制をはかると共に外寇に備へた

一、元禄十年七月十三日異國人漂流して嘉平村大兼久浜に着く

時の在藩頭諸役人彼所に到り何國の人なるか尋ねたるも言語通せざる為に知ること能はざるも糧食十五日分をあたへて順風次第歸国せしむるべく世話せるが故に喜色満ちたりしも其の後如何なる事にか怒氣を起して刀や槍を持ちて糧食の世話人を刺し怒氣ますます増長せるにより村人狼狽して騒動せるにより時の役職にありし宮良長亮が先頭に立ちてこんこんと異國人を制止するもさわざ止まず長亮仕方なく彼等と闘つて征服す

其の後部落は仲間 西村 慶田城 玉得 久場川 内原の六部落をして嘉平村となれり

一、寛永五年八重山の租庸を上中下下々の四段に分ち男女の頭数に賦課せらる

一、同年全島を宮良間切 大浜間切 石垣間切の三間切に区分し川平村は宮良間切に編入せらる

宮良間切 宮良村 石垣村 嘉平村 仲筋村 波照間村

新本村 平田村 ふる村

石垣間切 殿城村 竹富村 黒島村 花城村 右見村

新城村 小浜村

大浜間切 小浜村 崎原村 大城村 白保村 平久保村

鳩間村 慶田城村 與那國村 西表村

（新川大川はそれより四十七年後延寶二年に出来た）

一、享保十七年黒島村住民四百名を喜平村属地野底野に移住させて野底村を新設す

一、寶曆五年より崎枝 仲筋 桴海 野底の四村は喜平村の属地にして政治を行えり

一、安永五年の大饑饉享和二年並に嘉永五年の疫病其他マラリヤ等により人口減少して衰微して久場川 内原の二部落となり人口昭和五年十二月現在は五四三人で寶曆三年の人口調査表と比較して却って四八人減少せる状態なりしも近来マラリヤ皆滅と共に他より移住民も續々増加して繁榮に向ひつつある

一、昭和十九年十一月大東亞戰爭中沖縄戦線直前大島沖には聯合国の潜水艦の出没甚だしき頃日本海軍の命により当部落民十六才以下六十才以上の者及び婦女子は全部宮崎縣に疎開する事になった 当時の部落会長喜舎場兼美氏は疎開該当者の前途を憂慮し決



死の覚悟をして軍に対し度々哀願陳情し最後には部落有志南風野英助 岸本亨 崎山  
用次の各氏を同行して陳情に及び遂に疎開せずに済んだのである

## 教育編

### 川平小学校

#### (1) 沿革大要

延徳二年石垣市に学舎を創設して儒学教育の端緒を開いて二三六年後の享保十年（皇紀二三八五年）川平に始めて学舎を設けて士族の子弟を教育して来たが明治二十三年六月廃校の止むなきに至る

- |                      |   |
|----------------------|---|
| 一、明治二十三年六月<br>（六月七日） | 石垣南尋常小学校川平簡易小学校創立<br>授業生喜舎場英○氏当校勤務                                      |
| 一、同年八月               | 学校世話係を置く 喜舎場兼清氏を任命  |
| 一、同二十四年四月            | 大川尋常小学校川平分教場と改稱   |
| 一、同二十六年四月            | 始めて女性徒十名入学  |
| 一、同年五月               | 大川尋常小学校川平分校と改稱  |
| 一、同年十月               | 世話係を事務係と改稱  |
| 一、同三十年三月             | 始めて女子の卒業生を出す  |
| 一、同三十九年五月            | 独立して川平尋常小学校と改稱<br>訓導大浜信卓氏初代校長に任命  |
| 一、同四十三年              | 校舎を始めて瓦葺に改築 運動場拡張し風琴を創設す  |
| 一、大正三年四月             | 石垣尋常小学校川平分教場と改稱   |
| 一、同六年五月              | 裁縫嘱託女教員任命 本校裁縫科設置の嚆矢とす  |
| 一、同七年四月              | 独立して川平尋常小学校と改稱<br>独立開校式を行ひ記念事項として字民父兄一同体操器具並に<br>旗竿を設置す<br>伊舎堂孫訓導兼校長に任命 |
| 一、同九年九月              | 女子青年団修養会を開く   |
| 一、大正十二年三月            | 学藝會を初めて開く   |
| 一、同十三年               | 青年夜学会創設   |
| 一、同年十二月              | 処女会創立発会式を行ふ   |
| 一、昭和三年四月             | 高等科併置し川平尋常高等小学校と改稱<br>校舎狹隘に付校庭に堀立小屋を建て假教室とす                             |
| 一、同四年九月              | 校舎改築工事に着手   |
| 一、同五年一月              | 新校舎に一部学年を假教室より移轉す   |
| 一、同年二月               | 全校児童新校舎に移轉す   |
| 一、同年                 | 御木本眞珠養殖場より飲料水タンク寄附<br>（工事費百円）<br>男女青年團門柱並に水タンク寄附<br>宮良直明外三名より学校敷地を寄附す   |

- 一、同八年九月 稀有な暴風の為校舎大破損せらる
- 一、同九年四月 桴海假教場廃校となる
- 一、 修繕工事完了し本校舎に移轉す  
風琴一台後援会より寄贈（価格百二十円）
- 一、同十一年二月 記念木植樹大兼久ヤラブ播種
- 一、同十二年二月 堆肥舎落成 学校後援会労力寄附
- 一、同十三年二月 本校より初回の八重山農学校入学者を左の通り出す  
卒業生 仲本英一 仲本英清 石垣安信  
在学生 仲野静子
- 一、同年三月 高等児童修学旅行をなす
- 一、同十四年一月 養豚舎落成 川平女子青年団より子豚一頭寄附  
畜産教育の目的を以て尋五以上女兒に養豚せしむ
- 一、昭和十四年一月 農業教育研究会主催農場現地品評会
- 一、同十五年一月 縣指定学校経営研究会
- 一、同十六年五月 御親閲派遣（郡代表として仲楸忠蔵君）
- 一、同年十二月 大東亜戦争宣戦布公
- 一、同十七年一二月 大東亜戦争第一周年記念日
- 一、同年五月 石垣永美氏仔牛一頭寄附
- 一、同年六月 崎浜朝一氏山羊一頭寄附
- 一、同十八年六月 青年学校々舎落成
- 一、同年七月 縣指定青年学校経営 軍人援護 興亜教育研究会開催  
支廳長東恩納寛仁氏 視学天願朝行氏 山口町長 南風原社会教育主事 女学校長新垣良栄氏 各國民青年学校長及び教頭 青任束校卅二名 正午より研究会開催 翌日午前十時終了
- 一、同十九年二月 初五以上修学旅行
- 一、同年七月 校庭に於いて仲本軍曹 前浜伍長の町葬あり
- 一、同年九月 川平駐屯隊来着全校舎提供  
隊長渡部高太郎中尉以下
- 一、同年十月 石垣島敵機来襲爾後頻々として空襲を受く されど当部落は四ヶ並に大浜町に比し被害少く授業等も比較的支障なかりしは不幸中の幸なり
- 一、同年十一月 当部落宮崎縣へ疎開（該当者のみ）に就き懇談の為平良署長石垣町助役等来字
- 一、同年同月 宮崎旅団長閣下 大舛支庁長 井上海軍大尉 翁長町長石垣助役宮良社会教育主事 於青年會館部落民へ御講演引續き海軍部隊立入禁止区域決定
- 一、昭和十九年十一月 職員児童部落移轉作業に協力 九日間臨時休業（高田方面）
- 一、同年同月 前記部落移轉取止め
- 一、同年十二月 川平駐屯海軍部隊長大河原茂美中尉全校児童に対し御講演

- 一、同二十一年四月      本校舎使用不能の為第一、第二学級青年学校々舎 第三学級  
芭蕉工場に行ふ
- 一、同年同月      翁長町長真喜屋氏 学校被害状況視察の為来校
- 一、同年五月一日      校舎復旧工事着手
- 一、同 同月二八日      学校復旧工事一應終了（三教室）
- 一、同年同月二九日      本校舎にて授業なす
- 一、同年七月      初等学校に改稱 高等科七、八年と改稱
- 一、同二十二年四月      校舎復旧工事委員会並教員増加の協議会
- 一、同年四月      工事着手
- 一、同年五月      校舎修理作業終了
- 一、同年九月      部落負担教員増加なる 従来の三学級を四学級に改正 宮里  
昌子教官補任命
- 一、同年十月      川平実業高等学校開設さる
- 一、一九四八年十一月      七、八年実高校生修学旅行
- 一、同年十二月      クリスマス学藝会開催
- 一、一九四九年三月      学制改革により実高校廃止
- 一、同年四月      川平小学校と改稱  
川平中学校併置さる
- 一、一九四九年四月十五日      假校舎建築開始
- 一、同年四月十八日      假校舎落成
- 一、同年七月      中学校開校式並祝賀会
- 一、同年十二月      川平小学校創立六十周年記念日 高宮文教部長 石垣教育課  
長 安室孫亨氏 部落民多数来校盛会なり
- 一、一九五〇年四月      養護助教諭設置さる

## （2）本校の現況

### 教育方針

教育基本法第一條に基き現下の状況並校区の実状に鑑み健康なる子弟の養成を期す

### 教育基本法

第一條（教育の目的）教育は人格の完成をめざし平和的な社会の形成者として真理と正義を愛し個人の価値をたつとび勤労と責任を重んじ自主的精神に充ちた心身と共に健康な社会人の育成を期して行はなければならない

### 設備

- 一、校地 敷地一、〇八三坪 運動場九二〇坪 実習地八〇坪
  - 一、校舎 教室五六坪 職員室十二坪 其の他十五坪 假校舎三〇坪
- 在籍 四月三十日現在

### 小学校

性別	学年	一	二	三	四	五	六	計
男		一一	一七	五	四	七	一	四五
女		七	七	九	一〇	六	一一	五〇

### 中学校

性別	学年	一	二	三	計
男		八	三	一一	二二
女		八	六	五	一九

#### 高校入学者調

一九四八年	二	農高校
一九四九年	三	農高校
一九五〇年	三	一 高校 二 農高校

#### 卒業生累計

校別	性別	男	女	計
小学校		二九六	二四〇	五三六
中学校		九	一	一〇

#### 過去一ヶ年出席調

小学校	九九・〇五
中学校	九七・七八

#### (3) 創立以来歴代校長

勤務在校年月数	氏 名	出身地	摘 要
自明治二十三年六月	喜舎場英整	石垣	石垣尋常小学校
至〃 二十四年四月			川平分教場授業生
自〃 二十四年四月	大宜見信一	大川	大川尋常小学校
至〃 二十五年三月			川平分教場授業生
自〃 二十五年四月	大浜方意	大川	授業助手
至〃 〃 八月			
自〃 二十五年九月	大宜見信一	大川	授業生助手
至〃 二十六年五月			
自〃 二十六年五月	桃原永彦	大川	授業助手
自〃 二十七年一月	同	同	雇教員
自〃 二十七年五月	石垣用宗	同	准訓導
自〃 二十八年十月	花城永能	登野城	同
自〃 二十九年十一月	喜友名盛清	同	同
自〃 三十一年一月	譜久村正至	大川	雇教員
自明治三十一年二月	波照間永彦	登野城	准訓導
自同 三十四年一月	桃原永清	大川	同
自同 三十四年六月	大浜信卓	同	同
自同 三十九年	同 人	同	訓導兼校長
至〃 四十年三月			
自同 四十年四月	喜友名盛清	登野城	同
至〃 四十二年三月			
自〃 四十二年四月	喜舎場永珣	同	同
至〃 四十四年三月			

自 "	四十四年四月	大浜政良	大川	同	
自大正三年四月		仲嶺正能	登野城	石垣尋常小学校	川平分教場訓導
自 "	四年十月	平良加那助	沖縄		
自 "	五年四月	伊舎堂孫詳	大川	訓導	
自 "	七年四月	同 人	同	訓導兼校長	
自 "	九年三月	嘉手納喜昌	石垣	同	死亡
至 "	十一年三月				
自 "	十一年三月	宜野座安知	新川	同	死亡
至 "	十二年三月				
自大正	十二年三月	当山鉄三	黒島	同	
至 "	一四年三月			竹富農業組合長	
自 "	十四年三月	富川盛保	登野城	同	
至昭和	二年三月				
自 "	二年三月	玻名城長耀	石垣	同	石小校長
至 "	三年三月				
自 "	三年三月	饒平名知秀	沖縄	同	
至 "	" 八月				
自 "	三年八月	佐久真長助	新川	同	石垣市社会 厚生課長
至 "	七年八月				
自 "	七年八月	大浜信光	大川	同	補給部長
至 "	十二年三月				
自 "	十二年三月	黒島善苞	新川	同	死亡
至 "	十七年三月				
自 "	十七年三月	島袋盛文	沖縄	同	浦添村長
至 "	十九年三月				
自 "	十九年三月	波照間永郎	登野城	同	
至 "	二十一年三月				
自	一九四六年三月	仲本正貴	石垣	同	大原校長
至	一九四八年三月				
自	一九四八年三月	富村致佑	同	同	石中教諭
至	一九五〇年三月				
自	一九五〇年三月	識名信光	同	同	

(4) 創立以来の教職員

勤務在校年月数	氏 名	出身校	出身地	摘 要
自明治三十六年五月	喜舎場兼清		川平	事務係
自同 四十年四月	島袋真津	高卒	同	代用教員
自同 四十二年四月	南風野實	同	同	同
自同 四十四年四月	仲野加那	同	同	同



自同	四十四年	大浜当芳	同	大川	同
自同		村山信〇	同	登野城	准訓導
自大正	六年五月	伊舍堂芳	同	大川	裁縫嘱託
自同	七年四月	伊舍堂孫意	同	同	准訓導桴海勤務
至同	十二年三月				
自		石垣孫亨	検定	石垣	波照間校長
至同	十二年三月				
自同	十一年八月	宮良璋	高卒	荒川	裁縫科嘱託
至同	十二年三月				喜舎場璋
自同	十三年三月	石垣信弘	検定	大川	健在
至同	十四年三月				
自同	十二年三月	伊志嶺安甫	同	同	石垣市役所
至同	同 六月				
自大正	十二年五月	大浜芳	高卒	石垣	裁縫科嘱託
至同	十三年三月				
自同	十二年七月	田場由起	同	登野城	桴海勤務
至同	十三年二月				
自同	十三年三月	喜舎場兼美	同	川平	同
至昭和	五年三月				
自大正	十三年四月	岸本まかに	同	同	裁縫科嘱託
至昭和	三年三月				
自大正	十四年四月	伊舍堂孫意	同	大川	准訓導
至昭和	三年三月				
自大正	十五年三月	宮良静	同	石垣	裁縫科嘱託
至昭和	三年三月				
自昭和	三年三月	新垣常祥	一中	登野城	健在
至同	七年三月				
自同	三年四月	石垣永正	検定	川平	現部落会長
至同	九年三月				
自同	三年四月	仲本笑	工藝	同	仲野笑
至同	八年三月				
自同	五年四月	宮良直太郎	師範	同	死亡
至同	同 八月				
自同	五年九月	大浜寛行	検定	石垣	
至同	七年三月				
自同	七年三月	識名信光	師範	同	現校長
至同	九年三月				
自同	七年三月	大浜寛惟	同	同	熊本校教諭
至同	十年三月				
自昭和	八年三月	黒島節	工藝	小浜	

至同	九年三月				
自同	九年三月	石垣敏夫	師範	大浜	在東京
至同	十一年三月				
自同	九年三月	伊舎堂秀	同	大川	健在
至同	十一年三月				
自同	十年三月	嶺岸東○	同	登野城	在岩手
至同	十三年三月				
自同	十一年三月	玉代勢秀当	同	石垣	死亡
至同	十二年七月				
自同	十一年三月	大浜はる	同	大川	死亡
至同	十二年三月				
自同	十二年三月	山城よし	同	同	在東京
至同					
自同	十二年五月	上地文一	教員養成所	中頭	在沖縄
自同	十二年九月	謝花寛一	師範	那覇	在沖縄
至同	十三年八月				
自同	十三年三月	田本大志	師範二部専攻科	石垣	農業
至					
自同	十三年三月	宮良当典	新竹中学	大川	死亡
至同	同 十二月				
自同	十三年十二月	上原とみ	工藝	同	在沖縄
至					
自同	十四年三月	北川はま	師範	白保	在鹿児島
自昭和	一四年三月	前田信一	師範	國頭	在沖縄
自同	十五年四月	大浜信吉	一中検定	大川	大原校教諭
自同	十四年四月	山城節	一高女	同	
至同	同 八月				
自同	十六年三月	石垣竹	師範	同	石垣校教諭
至同	十七年三月				
自同	十七年三月	宮良敏	一高女	同	石中
至同	十九年三月				
自同	十六年三月	川村俊夫	師範	大島	在大島
至同	十七年一月				
自同	十四年三月	仲本正貴	検定	石垣	大原校長
至同	十八年三月				
自同		豊里繁		自保	在沖縄
至同	十八年三月				
自同	十八年三月	崎山英美	師範	大川	在與那国
至同	二十一年三月				
自同	十八年三月	崎山好	師範専攻科	與那国	同

至同	二十一年三月				
自同	十六年三月	石垣永正	検定	川平	
至同	二十一年三月				
自同	十八年三月	仲本英助	教員養成所	同	農業
至同	二十一年八月				
自同	十九年三月	宮良静	二高女	新川	在沖縄
至同	同 八月				
自昭和	一九年九月	崎浜朝一	水産	川平	農業
至同					
自	一九四六年三月	宮良千代	大阪実践女	石垣	
至同	四月				
自	一九四七年五月	大浜成	八重農	大浜	大浜校教諭
至	一九四七年十二月				
自	一九四六年八月	藤田長信	京城師範	石垣	平眞校教諭
至	一九四八年三月				
自	一九四六年八月	長田信一	教員養成所	同	沖縄通譯
至					
自	一九四七年十二月	平良米	八高女	同	石垣校教諭
至	一九四八年三月				
自	一九四七年九月	宮里昌	同	川平	現教諭
自	一九四七年	西垣竹二郎	教員養成所	同	沖縄通譯
自	一九四七年十月	仲本英助	同	同	
至	一九五〇年三月				
自	一九四八年三月	宮里英詳	師範	石垣	石垣校教諭
至	一九四九年三月				
自	一九四八年三月	波照間みね	八高女	川平	登野城校教諭
至	一九五〇年三月				
自	一九四八年五月	豊川永保	台北商業	登野城	
至	同 十一月				
自	一九四八年十二月	新城幸	鹿児島高女	石垣	石垣校教諭
至	一九五〇年三月				
自	一九四九年三月	仲本英清	教員養成所	川平	現教諭
自	一九四九年五月	高嶺英言	農林	同	農高助教諭
至	一九五〇年三月				
自	一九四九年九月	伊良皆高庸	二中	新川	現教諭
自	一九四九年三月	崎山用直	教員養成所	登野城	農高助教諭
至	一九五〇年三月				
自	一九五〇年三月	内原英芳	農高	石垣	現教諭
自	一九五〇年三月	崎山用昭	三中	石垣	同
自	一九五〇年三月	安里房	八高女	新城	同

自 一九五〇年四月 大浜耀 八重農 石垣 幼稚園  
自 一九五〇年四月 玻名城政 同 登野城 養護婦

(5) 豫算調べ(一九五〇年度)市関係

一九五〇年度方出予算 川平小学校

一. 諸給二〇, 四二八円

養護婦月手当五七五円 年六, 九〇〇円

使丁日給十五円 一人三六五日分 五, 四七五円

養護婦使丁増俸見込額 三, 〇九三円

宿直賄料職員五円 使丁三円 三六五日分 三, 九二〇円

住宅料月五〇円 三人一年分 一, 八〇〇円

時間外勤務手当平均六〇円 四人分 二四〇円

二. 需要費 一三, 〇〇〇円

事務並教授用備品消耗品代 一三, 〇〇〇円

三. 修繕費 三, 〇〇〇円

校舎修繕費 三, 〇〇〇円

豫算総計 三六, 四二八円

川平中学校

一. 諸給 一八〇円

時間外勤務手当平均六〇円 三人分 一八〇円

二. 需要費 二三, 八七五円

三. 修繕費 一, 〇〇〇円

豫算総計 二五, 〇五七円

(6) 幼稚園設置

郡下各部落に幼稚園設立し居るも当部落には其の設置なく日頃部落民の間にも其の必要を要望し来りしも実現を見ず遺憾に思つて居た処石垣永正氏部落会長に就任するや東奔西走し一九五〇年四月幼稚園の設立を見たのである

わかば幼稚園と命名し初代園長職名信光氏保母大浜輝子

在籍

男 七 女 一一 計 一八

産業編

一. 農作

本部落は相当古くから農業を以て本業とし農業より生ずる収入を以て家庭生活より公課に至る殆んど總べてを賄ひ農業以外の仕事と云い共其の見るべき物なく自給自足に止まる主なる農作物としては米粟甘藷大豆麥甘蔗等があり米と大豆は本郡内に於て其の産地として有名である米を以て唯一の換金作物として居る関係上稲作に於いて最も関心が拂はれ古から行はれて居る行事より今日に至る行事の上より察するに農業の總べてが稲作に集中されて居る感がある

稲作面に於いては部落附近と遠方で高田クウラ方面であり東に行つて桴海(現在富野)方

面に多少あるのみで僅かな面積なりしに今より四十年頃前崎枝部落の廃村により其の部落民所有を全部買占め又近くはフーネー方面の一部をも買占め仲筋桴海方面へも進出其の約三分ノニ以上を買占むりに至り今日は七、八〇町歩の水田面積獲得し住民の生活を潤はして居る

右の作物は其の栽培起源詳かでないがアヨーユンタの文句より見て稲粟の栽培されしは相當古いようである然し皆在来種でありシヌグ イネ アカブザ シソー ピネジュ ウシノー等の稲であり此の種は草丈高く穂にはヒゲがあり取扱ふ度に人にささって氣持が悪く田圃より藁のままを束ねて家へ持ち帰り家の前か後に丸く積み置き（シラと稱す）必要に応じて一束二束取下す等其の不便察するに余りあり

大正十年頃台中長糯嘉義愛國等の優良品種が当時指導層により移入栽培されたが長い間の在来種に執着した頑古な者も少くなかったが此の蓬来種は収量に於いて取扱ひの便質に於いて在来種より卓越せる所あり五、六年の後には在来種は其の姿を消したり

大豆は島豆小浜豆等が役来栽培されて居たが昭和八年頃優良品種ヒクアンダー青ヒグーの移入により改良されたが青ヒグーは何日か其の姿を消しヒクアンダーのみ栽培されるに至りしが質に於いては在来種を凌ぐが収量の点には在来種に似通ふて居る地方によれば在来種の方が収量に於いて優秀な所もあるので現在は本部落がヒクアンダーの産地の王座を占めて居る

因に一九五〇年行つた八重山復興博覧会の出品を見るに一等一点二等一点三等三点の成績を得て居る

甘藷に於いては昭和初年頃改良を見たが従来アカグ クラガー アーパが栽培されて居たが之亦縣一号等の優良品種の移入が嚆矢で百号其の他個人移入ではカメガーインナヨー等があり現在は縣一号が廃れた外三種が栽培されて居る

甘蔗も在来種（讀谷山種）から優良品種たる大莖種に移り在来種と改良種は其の比ではないので一、二年の短年月に於いて見事改良され在来種はたちまちにして廃れたり

其の他の作物に於いては民間移入栽培があつたが見るべき物がない

#### 農機具類の改良

農耕用牛の鞍は元来旧式鞍で木の自然に曲つた物を利用一對に組合はせて用ひ来れ共大正五、六年頃八重山営林所の山原松伐採に当り日本内地人の松木搬出に股鞍（直木の二本組合せた物と木の自然曲りを組合せた物）を使用せしにより其の割合製作が簡単で然も頑丈なる為め今日は殆んど之を使用するに至れり

鋤は元来旧式ヤマのみにて畑には鉄のヘラ水田には木製のヘラを用い来れども明治四十三年頃クラブ（右へかへして前木の中央の所に土切りの輪車を取付けた物）が使用されて居たが大正十年頃より台湾鋤の移入を見遂次クルバシヤ等の便利な物も台湾式を應用された其の後昭和五年頃優良農具が日本内地より輸入され現在の磯野鋤を使用するに至れりしも旧式ヤマは取扱簡便で場所により必要に付今尚ほ散見せらる

稲こきに於いては新式みのる式脱穀機が昭和八年頃日本内地より移入され能率的一大飛躍であつた それ以前は竹を人差指の長さ程度に二本切り其の二本の片方に藁を以て連結しフドーシと云ふ物を作り稲を一穂一穂そいで居た上人夫で一人一日十束（マラギ）をそぐのが精一杯だつただろうと思ふ 其の後シンパが流り居りしも急激な農業の進歩には間に合はず新式脱穀機の出現によりシンパも其の影をひそんだ



## 畜産

畜産は有畜農業上欠ぐ可からざる物で本部落でも古から重要視され稲作と相併行して不動産を求めるに必要な資金は總べて畜産より出て居る 本部落の富豪家は此の畜産より築き上げた家が多い耕作用として各戸に牛一頭馬一頭以上を所有するのが常であり繁殖用として牧場を経営して繁殖せしめ有蓄農業を保たしめたり 明治三十五、六年以前はウレマ野牧場のみにして其の後石崎牧場をまき其の他に中筋桴海牧に股がり牧場全盛時代であった部落民の所有する牧畜の数は実に三百頭余もありと云ふ余り繁殖し過ぎて限られた面積にては耐え兼ね周囲の垣の不完全も手傳ひ次第に脱走して附近の作物に被害を及ぼす事度々被害を賠償させられたり小言を云はれたりして次第に牧場への不熱心となり当時は本部落民のみの経営でなく新川を主として四ヶ字よりの加入があつたが経営困難の爲め一人減り二人減りして遂に昭和四年頃石崎牧場の廃牧となり其の他の牧場も次第に耐え兼ねて廃れ残るのはウレマ野牧場のみとなれり部落の習慣として従来牧ユリと稱して稲の刈入れが済むと同時に牧場を開け放ち外はみじゆぬ岬に門戸を立て内原を除く外全地域に亘り自由に牧畜せしめて居たが蓬来米の栽培爾後二期作の栽培により牧ユリが禁ぜらるに至り益々牧場の経営は困難が重なるばかりこゝに又石崎牧場に代るべきテチバリ牧場を昭和五年頃牧くに至りしも昭和七年川平石垣間の縣道の開鑿となり幅三間の門戸は持續困難となり之又廃牧の憂き目に逢ひたり たまたま昭和十四年屋良部町有牧場を民間へ貸付けるのを幸機に改良牧場として竣工をみたるもだにの発生及び牧場内に開墾地があつた爲め被害を及ぼす事又度々僅か二、三年にして廃牧となる それ以前即ち昭和八年石崎牧場を新らしく牧場に復活したき聲ありて向ふ十五ヶ年の年限を以て一部部落民に貸付けり昭和二十三年には期限満了多少契約の変更はあつても今日迄持續し來れるが終戦直後僅かに三十頭との在籍頭数なりしも爾後牛馬不足に痛感繁殖に懸命目下在籍百頭を越えたる爲め六十町歩の地域にては飼育困難と云ふ見越から一九四九年（昭和二十三年）越地牧場を牧くに至れり昭七、八年頃改良和種の移入により遂次牛種も改良されつつあり目下は優良牛をさえ産出して居る馬に於いては割合牛の如く熱心を欠げて居る

## 工業

昔土石器の使用されしは其の形跡に明らかでない大正の初頃より以前鍛冶屋を上と下との二ヶ所に置き部落内より適任者を鍛冶工に当たらしめ部落民の農具の修理製作に従事せしめたり鍛冶工には村事（村作業）を免ぜらる特典があり一般の工賃は夫役（手間代り）を以て替えて居た旧十一月七日はフーキの祝いと云ふて部落各戸より穂米を出し合ひ祝費其他鍛冶経営の費用に充て明治三十年頃迄部落経営として續き來れり其の後民間へ移譲したるも町の優良技術に比較して依然として技術奮はず次第に使用者減り廃業に至れり農村部落として而も米の産地として昔乍らの労力不経済を考へさせられ其の実行伴はざる欠点ありしが昭和十三年川平に於いて機械力使用のトップを切り石垣永美氏篠原光次郎氏共同経営の精米所をグサマドー大屋眞津氏の畑に設置せられたるも永續せず昭和十七年川平農事実行組合共同にて宮島御嶽後方に精米所を設置し部落民の便宜を圖りたるも作戦上場所をウラバリ仲本英領宅墓場後方林中に移轉部分〇の入手困難燃料の入手困難で終戦と共に使用不能に陥ち昭和二十二年惜しくも他部落へ賣却され部落民は文明の利器を失ひ在來のヒキウスを止むを得ず使用せしめらるに至れり

## 交通運輸

従来交通運輸の機関としてなく頼みとするは馬の脊中ばかり舐運搬から石垣街の交通貨物の運搬に到る迄馬を頼る外なかったが昭和七年川平石垣間の縣道開通を機として馬車を使用する事になり終戦直後自動車の運行が始まり

民政府経営の定期バス貨物車としては川平実行組合と浦崎栄一氏の共同経営に係る自動車の運行により産物の搬出町との往復下駄履きのまま街への往復も出来る部落民の喜び従来山村僻地宝の持ち腐れも遂に実の宝と化し街へ御目見えする等之等交通運輸機関に於いて部落民の文明への大接近なり

昭和七年頃石垣川平線道路開鑿當時田舎に斯る大中の道路はさほど必要を感じなかったせめて馬車が通れば満足と考え自動車の運行等は夢だに見なかったが今日夢だに見ざる物が現実に現れ部落民を喜ばせるは之時代の流とは云へ戦争の副産物とも云へよう

## 宗教編

### 一. 群星御嶽

昔時仲間村時代（弘治年間頃）或る夜半南風家々人某が目を醒まして身たるに中天にある群星の直下より現在御嶽地位に長提燈の如き不思議の火が上下へ昇降し居たるを認めたるに其後必ず神日和には前記の如き提燈の上へ下へ昇降したるを以て現場に至りて見たるに白米の粉を以て周囲を印されたるを見家人は勿論のこと村中にも語り合ひ御嶽建設の御指示なりと協議一致し此処に拝所を設け五穀の豊作を祈願し吉願の如きも本御嶽に於いて施行し居るものなり

尚神司は南風野屋の娘をして御神の御選定に従ひ任じ川平最高の御嶽として崇拝し現在に於ける氏子

### 一. 山川御嶽

昔時平田主は上国の都度悪天候に煩はされる事多く或時宮古滞在中漲水港の御嶽に海上安穩の祈願をなしたり若し念願通り叶ひたれば帰郷の暁は此の御嶽の神の御袖を賜はり来りて一嶽を建つとの念願をなしたり 時に念願通り叶ひたるにより御嶽を建てたり之山川御嶽なり

現今は猪垣の願等は本御嶽に於いて神司によりなし居るものなり然して平田主の本妻には女子なく内縁関係に在りたる直地家の女との間に女子を産み其の女子は長じて後田夢家に嫁ぎたるにより御嶽元は平田屋（現在波照間本家）なるも神司は後田夢家の女子より神の御選定により任じ居るものなり現在に於ける氏子

### 一. 赤色目宮鳥御嶽

昔時当字の農作物を守る為め野尾と稱する役目あり此の役目は毎月出四ヶして字石垣の宮鳥御嶽に行き農作物の経過報告なす事となれり然して其の野尾には小浜屋の男が其の職に在りしが右は宮鳥御嶽の神司の女の子と内縁関係を結び後年に至り宮鳥御嶽の御袖を分賜して川平に一御嶽を建て出四ヶする事を省けり之赤色目宮鳥御嶽なり

神司は小浜屋系統より神の御選定により任ず現在に於ける氏子

### 一. 浜崎御嶽

昔時八重山より上國の際は川平湾に待機して風波の順良なるを見計ひ出帆するを常とせり或る時或る八重山の上層部の役人が川平に於いて順風の日和を待つ中前田夢家の女子と内

縁関係を結び其の女は川平湾（現在御嶽の位置）に於いて海上安穩の祈願をなしたり其の信仰深き事琉球王の耳に入り琉球王より香爐を賜はり此所に一嶽を建てたり之浜崎御嶽なり

然して琉球王は使を通じて其の女の最大希望を聴きたるに女は墓なりとの答により官費を以て墓を造り與へたり尚墓造る工事中彼は浦田より水を汲みて湯茶を炊きしが其の水を汲みたる川を「う〇つかさ川」と稱し其の下の平原を開田して彼に與へ其の田の米は現在に於いても豊年祭の時は一升花を御供へし居る

神司は前田多系統より神の御選定により任ず氏子

#### 一. 測地御嶽

由来鳩間村穀物の神を祀れる友利御嶽の御神の御袖を分賜して一嶽を建て作物の神として拝み居るものなり

現在に於いてはヤーラ願節祭の神願等は本御嶽に願ひ終り居るものなり

#### 一. 觀音堂

昔桃林寺の僧上国の際川平湾に風波の順良なるを見計らはんとして投錨せる時同行の小僧は何氣なく散歩に行きたるに風は順風となりたれば舟子勇んで僧の一行は小僧の事も思はず急ぎ舟を出しぬ小僧は後から来て其の有様を見て落膽して逆風となりて再び此の港に船をいれさせ給へと祈願す出帆した船が平久保崎に居る時小僧の祈願通り風が急に北に廻り逆風となりて船は再び川平湾に戻り来りて小僧を共に乗せて無事那覇港に着くを得たり其の後小僧は出生して佛像四個を携へ来りて祈願せる場所に於いて堂を建立す之觀音堂の始めなり

尚川平に於いては喜舎場家が觀音堂とは由緒深い

#### 一. 久場川 節眞世がなし

昔時仲間村時代にも川平村民の最も快樂なる遊びは節遊びなれり 或る旅人が節遊びの日南風野家を訪問して曰く自分は旅人なるが夕刻より此の村中に一夜を泊めさせて貰ふ可く乞ふけれども一人として泊めてくれる方なく困却せり乞ふ今夜一夜を泊めて貰ひ度しと云ひしに南風野家の家人は深く同情し謙遜に且つ叮嚀に此の旅人を迎へたるに旅人は深く満足して更に曰く

自分は人間に非ず天使なり人間に農作の途を授くべく命を受けて下りたり依って其の法を授けんとて眞世がなしの神説を唱へ傳習せしめたる後、後年自分の代りに戊年生れの男子を命じ戊日に神説を唱へば諸作物の豊収疑なかるべしとて姿を消え去れり 然る後南風野の諸作物は年と共に豊収を得何不自由なく暮したれば村人は不思議に思ひ其の眞相を聞きたれば南風野家の家人は前記の事実を語り聞かせたるにでは来年よりは是非私にも其の眞世がなしを御迎えさせてくれとの懇願により現在に於ては各戸共御迎えして居るものなり 然して南風野家の祖先は遺言としてトニ元屋の次は南風野家より分家したる者の家を他家より先に御迎えするとの事を子孫に遺言せりとの事なり

#### 衛生編

##### 衛生

當川平部落は四ヶを離れること五里二丁町の処にありて道路險惡交通不便にして病魔の爲め慘憺たる苦痛を受けつつありたり

其の民間療法としては草根又は犬等を食しつつ過ごせり

然るに幸いにして東京帝大医科大学教授三浦医学博士の調査を始めとして次に傳研技師守屋医学博士調査をなされたり

明治四十二年縣当局は大浜用要縣議の発言により初めて衛生技師中川恒次郎氏を派遣し予防撲滅に従事せしめられたるも経費の都合上間もなく予防事業を中途に廃せられ当時の有病地住民は悉くマラリヤ罹病せる惨状なりしも顧る人なかりき 而して一方有病地帯の住民は年々萎靡衰退を辿りつつありて到底黙認を許さざるに至れり

茲に於て官民有志相計りてマラリヤ撲滅期成会を組織し会長に譜久村正恭氏を推し其の〇に陳情するに至れり依つて大正十年十二月豫防班なるものの設置を見るに至れり これより先大正八年台灣總督府防疫官羽鳥重郎氏の調査あり續いて翌大正九年内務省醫學博士宮島幹之助、田辺両氏を派遣せられ実施踏査をせしめられたり両氏は二ヶ月余滞在せられて密なる調査を遂げられ現在マラリヤ防遏所は其の報告に基き設置を見たるものと云ふ

當字住民は其の恩恵により健康を維持しつつあり其の一例を示せばマラリヤ予防班設置前部落の大正十年十二月の戸数は一〇三戸人口四八五人なり

#### 現在比較

當字中央にある宮島御嶽は草木繁茂しマラリヤ予防撲滅に障害ありと宮良予防班長は仲野防疫監吏に命じ部落民との打合せをなし昭和元年より五年迄の間に伐採作業を執行せり

明治三十五年赤痢病発生せるも花城医師村役場より派遣せられ患者の治療に従事されたる為死亡者なく全治せり

大正八年コレラ病流行せるも部落民一致団結其の予防対策を講じ當字に患者二人を出したるも死亡者なく全治せり

醫療機關としては花城医師内藤医師瀬之口医師伊波医師の諸氏川平に駐在し醫療事務に従事されたるも其の後村医及び町医制度になり時々出張して醫療事務に従事しつつあり

#### 人物編

##### 一. 仲間満慶

今から四百五十年前仲間村に於いて父を元の主母を仲間つかさとして生れた我が郷土の産んだ大英雄憲章姓（英）の元祖である

其の当時八重山は群雄割據の時代で各地に頭目が居り其の中で石垣の長田大主川平の仲間満慶大浜のオヤケアカハチは特に有名であつた満慶は武藝に時代を見る事に於いて其の名は高い事大主議の長田大主と熱血漢のアカハチの相反せる思想の中にあつて満慶は常に眞理を愛し正しき理論を説いて八重山の將來の事を深く考へて居た

アカハチは満慶の存命中は自分の思ふ通り出来ないと思つたのか或一日白馬の御馳走をするからとて満慶と長田大主とをナカスメーと云う所に招待した 長田大主は病氣と稱して出席せなかつた（アカハチは長田大主は欠席すると想像して居たに違ひない）満慶は今日の招待は只事でない危険をはらんで居る事を察しながら至誠を以て道を説くは武士の道なりと覚悟を決し單身其の場へ行かれた其の場で両雄火を吐くが如き論争されたが意見纏らず遂に満慶は歸られた

アカハチは大勢の討手を繰出し弓矢を以て満慶を追つた



満慶は鉄扇を出して飛んで来る矢をはずしながら後へ後へと歸る途中かねてアカハチの策略で掘ってあった落し穴にあって云う間に落ち無念の涙を吞みつつアカハチの卑怯なる仕業を罵笑しつつ八重山の将来を思ひつつ最後をとげられた（道の要所要所には数多くの落穴を掘ってあったと云ふ）

ヤドピキヤーは満慶を祀った霊場で七夕には一門の方々が御参りされる

## 二. 石垣永將

一名元宮良の主とも云ひ嘉善姓（永）の元祖で今から三百二十年前の人 昔時八重山は石垣大浜宮良の三間切に区分されそれぞれに頭が居られたその頭を主とも稱す

氏は宮良の頭をして居られ博愛心信仰心深く常に住民を愛して居られ又外國人とも交際して外國の事情も知って居られたと云ふ 住民は氏の徳を慕ひ尊敬し氏の人望は日に日に高くなって来た 之を見た外の役人が嫉妬心を起し何か其の人の揚足を取るべく探して居る内に氏がキリスト教信者である事が分った（当時キリスト教は嚴禁されて居た）ので其の事を中山王府に告訴され遂に裁判となり火刑の判決を云ひ渡されたが泰然として受刑されたと云ふ

火刑執行の日薪を積み其の上に永將翁を坐らせ役人が火をつけると傘をさして煙と共に昇天されたのを見たて居り傳へられて居る 火刑された場所に堂を建てて一門の人々が信仰して居る 其の堂にちなんだ其の屋敷をオンナーヤーと呼んで居る

附記 この事件は日本の島原の乱より前の事で日本の或るキリスト教会には氏の事が記されて居ると云ふ

## 三. 保嘉真山戸

仲間村時代の人で仲底家の元祖 部落西南方にある水質良好な飲料水として部落民の愛用して居るフガカーを発見して掘られた恩人である仲間村の住宅より現在の部落に自分の墓地を選定する為に往復されて居る時物のいびきの音が毎日同じ所で聞へた 之は不思議と思ひ或る一日立寄って見ると桑の大本の根に大蛇がいびきをかいて寝て居たので此所は吃度何かの知らせであるに違ひないと思ひ其所を掘られたところが清水が噴出したので井戸にされたのである氏の功績を永遠に残すべく當時の人々が氏の名にちなんだ保嘉川（フガカー）と命名したのである

いびきの音は大蛇のいびきとも云ひ又は水の噴出る音であつたとも云ふ 此の河は昭和十四年改修し簡易水道を設置して利用し居たが資材其他の関係で永續する事の出来なかつた事は遺憾である

尚力も非常に強くあつたとの事で別名を仲底力とも云ふ

桴海のサーラマに鬼が居て人々に害したので鬼征伐をされたと云ふ

## 四. 我那覇親雲上

宮良屋の元祖である 昔時首里城の城壁が何回積み上げても長持ちせず崩れるので遂に其の工事を八重山へ命ぜられた

八重山では人選の結果竹富の西塘氏を主任として川平の我那覇右見の赤嶺両氏此の三人を石垣積みに派遣された優秀な技術者揃ひで城壁は見事に出来上つたのである

其の時積み上げた石垣は大東亜戦争まで百年の間現形のまま残って居たが沖縄戦線で破壊され現在は跡形もない

石垣積みの功により親雲上の職と東西苗代十二から田を賜った



其の後幾十年時代は変り琉球より役人が各地を巡視に来られ住民の世論を聞く為集合させた席に於てチビピク屋の加那真と云ふ人があんな大面積の苗代田を一人で占有するとは不当であると異議申出があり親雲上の子孫は祖先の功績により琉球王より賜はった証文も確にあると云ひ遂に調査する事になった

琉球王より戴った証文が板に書いてあった為に数十年の間に白蟻の被害を受け又時世も変り證據不充分との理由でその田は取り上げられたのである

今日部落民が東西苗代を唯一の苗代として使用出来た事は親雲上の功績を無にする様にありけれども又一面加那真の奇抜な質問によることである 氏を祀れる墓所に子孫は旧一月一日と旧九月九日には墓参して居る

#### 五. 仲間松大主

元宮良の主に随行して度々旅をされた旅先で武藝を覚え武藝の達人であったと云ふ 大主の役名を與へられた

仲間家の元祖であらる 仲間家には大主の肖像画を軸物にして拝んで居る

有名な人物であるが此の人に対する傳説があまり無く知って居る人もないので委しく書く事の出来ないのは遺憾である

#### 六. 喜捨場兼清

慶應元年生れ其の当時学校なかりしに為に会所（寺小屋）に学び独学力行して廃藩置縣前は筆者と云ふ役職を勤め其の後教員（当時事務係）村会議員区長等の職を奉じた部落出身者にして右の職を勤めた〇〇は氏が初めである

部落の指導者として盡瘁し東京大博覧会の時は郡より選ばれて參觀の光榮に浴したあの當時階級意識の濃厚な時代に於て常に四民平等を唱へ何事も平民的であった事は氏に先見の明があったと云へよう

尚部落で一番目に瓦葺を建てて部落民に刺激を與へたのも此の人である

#### 七. 西垣松

慶應二年生れ学校に出ないので無学文盲でしたが其の当時村の総代其の他の職をして一般から慕はれた徳望の人

昔の人ではあるがよく時代の進展と併行した想思を持った人と云ひ得る 氏が子孫に遺された言葉に「自家は部落内に空屋敷を以て居るが之から部落の二、三男が分家する為に屋敷にさせれと云ふ人が居れば惜しまず交換して作らなさい」と云はれたと孫の昇は話しそれを履行して居る

#### 八. 島袋松

島袋アーシユの次男として明治十九年に生る当時の生徒は尋常科（四年）卒業で満足して居たが氏は好學心の篤い人でそれで満足せず高等科（登野城校）に入学した部落より高等科に入学したのは氏が初めである 卒業（四年）後は教員をして將來を囑望されて居たが天命には勝てず二十四才の若さで死去せるは本人の為部落の為遺憾である

#### 九. 南風野實

明治二十四年生れ資性温厚な人で第二回目の高等科卒業生

教員を振り出し徴兵検査には近衛歩兵として入隊し除隊後部落に居て活躍して居たが大志をいだいて台湾に渡りあの当時台湾は就職難でしたがよく努力して警察界に入った部落民にして海外に雄飛せるは氏が始めである

歸郷して町会議員となり部落発展に関する種々の計画を立て居りしが壽命盡き四十六才の働き盛りで他界せるは遺憾である

一〇. 宮良直明

貧農の長男に生れ幼にして父を失ひ母親の手で成長した

自分の家に不動産の少なきを憂ひ勤勉貯蓄して遂に崎枝赤崎に水田を買求め農業に精励し昭和 年崎枝原野に開墾を始め居りしも戦争の為中止せざるを得なかつた崎枝に開墾を思ひ立ったのは氏が始めである

一面教育にも熱があり長男直太郎を部落より一番目に師範学校に入学させ卒業後川平校に教鞭を取って居たが一年足らずで死去せるは独り宮良家の残念ばかりでなく部落としても遺憾とする所なり

右は故人となられた方である尚其外に川平節で名高い大名屋ぬカンチ 後浜屋ぬナベマも居るが其の傳説が不充分の為掲載出来なかつた事を遺憾に思ふ

仲本英領

明治十三年生れ小学時代より秀才であり沖縄本島に共進会のあつた時生徒總代として学校事務係喜捨場兼清と同行して沖縄へ行った事もあり

八重山第三回目の徴兵検査に目出度く合格入隊日露戦争に出征して軍人の最も名譽とする金鵒勲章を戴いて歸郷し其の後村会議員区長となり部落の為に盡した

子女の教育に理解あり激励し子女四名にそれぞれ中等教育（沖縄学校）を受けさせた人である

言葉は少いが実践力のある人

高嶺保里

高嶺アーシユを父として明治十六年生る其の当時平民の子弟は学問なんかせんでもよいとの思想の下に於て氏は学問が好きで熱心に勉強したと云ふ農家の二男で分家して自力を以て田畑を買求め農業に精励し篤農家として表彰された事もある

子供の時の勉強が物云はせて農会總代に当選して働いた

自分が思ふ通り教育を受ける事の出来なかつた事を念頭に置き子供等には希望通りの教育を受けさせる可く決心し二人の子に中等教育を受けさせてある

石垣永宣

幼にして父母を失ひ姉等と共に一家を經營して成人した

農業の傍ら音楽に興味を持ち当地で音楽の大家として知られて居る

壮年時代激労の為老年に至りリョウマチスを患ひ歩行困難となるや時間の空白を惜しみ草履作りを始めたそして草履代を貯へて戦争中は献〇〇〇〇〇〇〇職員に草履を無償で配り在職員を感激させた事もある

仕事の余暇には歌詞や作曲をなして楽しんで居る荒川平節外に多くの歌詞がある

宇根永春

明治二十五年宇根家の四男に生れ高等小学校を卒業し兵隊に行き除隊後分家し自力で不動産を買求め一人で製糖用具を取揃へ大規模な農業經營をし部落の為には区長部落会長をした 農事は現在には子に任せて公共の為に為に働き殊に学校に対して献身的に労力を惜しま

ず盡し歴代校長先生を感激させて居る  
前後二回に亘り学校功労者として表彰されて居る

## 名所旧蹟編

### 仲間岡（モリ）

仲間岡は獅子岡と相並んで立派な夫婦の小岳である両岡とも海拔約 米あり仲間岡は仲間村の盛んな時代に仲間満慶と云ふ英雄が居住した岳で名高く同岡に登り四方を眺むれば川平地区全景が見渡され遠く平久保崎石崎鳩間島西表島屋良部崎等を目前に映じ洋々と續く大海原に雄大な於茂登山を眼前に控へて北の大自然の裡に仲間満慶も一大英雄となられたのである

### 獅子岡

獅子岡は怪傑満慶が岡の中腹北側に二個の巨石を運びて獅子の顎に擬し以て川平村の守護の為に建設したもので其の名を附せられたが中山から派遣された視察員が此の獅子は正しく中山を詛ふものであると誤認し直ちに下顎を破棄し尚村民唯一の仲間井戸まで埋めたのである

爾後川平村より満慶の如き英雄の生れ出ないのも其の為だと古老は云ふて居る

### ヤドピキ屋

往昔の大英雄仲間英極満慶氏の生存中八重山の善政の企劃川平村向上発展への対策及び八重山防衛上の秘策を練られた所で川平で最も名高いヤドピキ屋である同所は上段と下段とに別れて居る上之段は満慶翁の英霊を御祀りせる所である毎年七夕祭には郡下の憲章姓（英）一族相集ひ慰霊祭が行われ満慶翁の英雄を子々孫々の至るまで尊奉しその遺志を継承せんと数十名の人々が来られ盛大な七夕祭を施行されて居る尚一般の人々も折あれば参拝して居る

下之段は満慶翁の生存當時御使用せられし武器類を格納せられし所である  
翁死去當時は石戸を立て開閉自由なりしも数年後に至り盜難の虞れありとして密閉し今日に至ったのである故に開閉自由なりし当時の名稱で岩戸引屋（ヤドピキヤ）と稱されて居る

### パイバンムリ（火番岡）

通信機関の無かった当時火番役が常置されたのである火番役は責任觀念の強固な動作の機敏な者より通常二人選定されたのである火番役の任務は沖縄から宮右を経て八重山へ来る船（ヤンバルセン）が平久保崎より現れたら早急に蔵元へ飛脚が通報する重大な責務を負はされたので其の時の乗用馬は誰の馬でも命令一下乗用が許された当時險惡な四里余の惡道路を一時間で乗破し石垣の町中よりも川平パチケーパチケーと大聲で群衆の中をもかまわず乗馬が許されたのである當時の火番役は見張りしながらサーラ筵を一ヶ月 牧製作して納付の義務があった

尚當時の火番所は平久保川平崎枝竹富各部落に常置され夜間航行船を平久保火番が発見すれば直ちに信號火を以て川平火番と連絡し川平石崎を廻航すれば崎枝火番が発見して竹富火番と連絡して常に密接な連携を保ち沖縄からの船に対し十分な処置が出来たのである

### アムナヤア

アムナヤアは下田原地区大川良の上流にあつて海岸より現場まで約三千米余にある川幅約一間余水は二又より合流して一丈余の高さより白布を晒した如く落ちて下の大岩に砕けその飛沫は物凄く四、五間先へ飛び其の轟音は数百米より聞へ誠に神々しい八重山の小瀧である 此処は川平の俗名でミズムトと稱し大旱魃の際は雨乞の祈願を致す所である

雨乞祈願の爲め同所への登山人は川平宮鳥御嶽の神司及び水姓の女外 名の定員が祈願登山するのである祈願者は五十才以上の中老婦人に限られて居る此処へは平素も雨乞祈願の折にも成る可く男子の立寄りには遠慮して居る

#### 大和墓

山原山中にある二個の大和墓は明治十八年西所長が大袖村（フシテ）の廃村の墓を平家落武者の墓と誤認し散点せる墓の白骨を一ヶ所に合祀し墓標を建てて大和墓と独断命名したのである

#### パンダキ岡

仲間岡獅子岡の後方にあるこの岡が西岡の如く高ければ俗名火の神の様に三つ並立したであろう 此の岡を歩くの人々は間違つて火番岡と云ふて居るその理由は川平部落より旅立ちする人あれば此の岡にて盛大な見送りをしたのである当時の定期船の出帆は概ね夜間で船が屋良部崎を出るとパンダキに集まった若い男女が各自三十束宛携行した藁を六尺丸に束ね之れに火をつけて高く上げ此処が郷里であるぞと此の火により別れを告げたので火番岡との間違いがある

#### 屋島墓

屋島墓は川平石崎牧場内の四ヶ所の岩穴にあり同所は屋島の戦ひに敗れた平家の落武者の墓なりとの傳説あり尚彼等は遠く屋島より漂流し同所に来たり生存せんと企てたるも偶々川平婦人数名が薪を頭に載せて俗稱マラダカ坂より登るのを見て吃驚し此所の人間は人食人種なりと恐怖し全員自殺せりとの傳説もある

#### 於茂登の山櫻

山原荒川太田桴海に至る於茂登山の中腹に数十本の山櫻が点在す此の櫻の木は何処から飛来して今日に及んだが勿論筆者も知らない 何人も此の櫻木の生育せる経過を十分に知らないので年号等明記する事は不可能であるが冬の枯も過ぎて春来れば於茂登の木々緑葉の中に綺羅星の如く爛漫と咲き誇る山櫻其の自然の光景こそ誠に麗はしい名高き於茂登の山櫻である

#### 荒川

荒川は桴海部落に通ずる道路にあり水源は宮良川と同一なりと云ふ この川は水量極めて豊富で未来水力諸事業に対する最も有望な水源を保持せる川にて現在は宝の持腐れである

#### 川平湾

川平湾は湾口北に向ひ南に入る湾の全長約三千米最深所十五尋最浅所四尋湾幅最長千米余（満潮時）最短所二百米湾内にはムク離一本岸等がある湾壁にはユミ離マジヤ離クバ離サイ離等が点在す同湾は四季を通じて波静かで鏡の如く朝は彼の雄大な於茂登山のさかさまに寫る其の大自然の光景こそ筆紙に現す事出来得ず月夜にトバルマを歌ひ乍ら烏賊釣りも一入興味深い尚魚釣りに出ればタマン クチナギ アウムル ガーラ等の上品な魚が何時でも釣れる同湾は魚や烏賊章魚其の他の繁殖場であり尚捕獲場である戦前同湾に御木本幸吉氏経営の真珠養殖をせるも中止となり現在では水産會のカキ飼育中である同湾は漁港と

して且又避難港として群下第一の良港であることは敢へて過言でない同湾を築港すれば二、三千噸級の汽船は楽に出入りが出来棧橋が出来れば横付け可能である川平部落の発展は川平湾の築港により実現されるのである現在は宝の持ち腐れである此の湾に対し水産業者及び為政者の実地踏査の上優秀な技術と計画により此の良港の利用価値を十二分に發揮されん事を切望するものである

#### パマサヤ

當時の婦人は御用布上納物として上布を製品し上納するのであった毎年旧二月十日迄に製品出木得た者は腕利優秀者として第一位を賞され藁馬を乗せて部落を一周せしめ末製品者の奮起を促したのである斯くして徐々に製品された上布はパマサヤに持ち来り晝間は海浜に晒し夜間は海水に漬け入念に晒したのである その監視役として通常二人の婦人が置かれたのである尚上布晒場清掃は若い女子が出勤して一片の小石もなく麥畑の如くであった上布の種類はビク布カナイ布等が最も優秀品であった

#### 傳説

ヨーン ユカザ ナアチャ ウレマ野 ピシタマ

とまた松の下を通り来れば名高いヨーン山（夜暗山）に来る即ちヨーン山名稱の傳説は今から凡そ数百年前川平の精農青年が石垣の町より新妻を連行して帰川途中（現名ヨーン）ヨーン山まで来ると冬の日はとつぷり暮れて暗夜（ヨーン）になったのでヨーンとの名稱であるそれから数百米行くと益々歩行困難暗夜なので二人はとうとう野宿せねばならないので道端の芽を引き假宿を速成し其の夜は野宿をしたのでユカザ（奥座）の稱あり其の夜は明けて二人は肩を並べて東の空よりの日の出を伏拝んだ所をナアチャ（明日）と稱す二人は元氣滂濶として家路へ急ぐ途中の原野で部落の人々と出会った 会ふ人毎に御目出度ふ御目出度ふ羨ましい羨ましいと云はれたのでウレマ野（羨野） ウレマ野も過ぎて部落近くへ来ると親類の人々澤山出迎へに来て居られた山迎への人々がボーレーピセマ川平へ御嫁に来てボーレーピセマと言はれた所が現在のピシタマである

#### メーラーアーパー川

右の川は川平越地牧場内に在る事の起りは川平宮良屋の某男と一里離れた崎枝の某女とが果かない恋愛を致し人目を避けて月夜毎に密会し平石に二人共座して細長い小石を以て対話中座せる平石を掘ったのである格言の通り思ふ念力岩をも通すと二人は面会する度に此の石を掘りつつ未来の希望を語って居たが二人の恋はとうとう不成立となったが二人は死後も同一視線の通ずる個所に於て墓場も造る事との約束で崎枝の方は亀川氏農場西側に川平の方は底地に而も墓口は格子戸式に造られて居たが先枝部落も廃村となりたる為川平の方も現在移轉されて居る右同川は男の掘った方は浅く女の掘った方は深く掘られて居るので女は愛情が深く男は愛情が浅いと云はれて居る尚二人の絶縁対話中南北より大雨が降り二人はびしょぬれとなり女は黒髪を散乱せしめて思ひ諦めを暗示したと云ふ尚此の雨を夫婦雨（ミユート雨）と云ひ又涙の別れ雨とも云って居る

#### ヤードーアブ

ヤードーアブは真地原にあり此の洞穴の名稱の附された理由は昔川平に悪疫流行したので其家の家族八名は此の洞穴へ避難したのであるが此の悪疫神は部落の民衆を大分苦しめて居たが民衆之に対し相當の予防を施したので悪疫神もとうとう部落の人間には敵はず引揚げなければならなかったので歸路路傍の洞穴に悪疫の種を全部ヤードーアブに捨て去った



のである然るに洞穴に避難して居た八名家族が一斉に悪疫に罹り倒れたのでヤードーアブ（八名倒穴）の名の傳説がある

タタバナリ（田多離）

田多離は川平大兼久海中に船艦の様な姿をして居る

此の石の傳説は左の通り今から凡そ五百年前宇平得の田多某が上沖中悪天候の為一時川平湾に寄港されたその間川平の田多屋に滞在して優遇されて上沖された歸路土産として長持（ヤフンガイ）を田多家に贈呈された同家は不運にも火災に遇ひ全焼したが此の長持だけは完全な姿で何の変化もないので之は縁の悪い物として川平湾に流したが潮流により現在の位置で化石となって雄々たる姿をして居る

## 風俗習慣編

### 一. 服装

琉球藩王當時男も婦人同様に頭髮を結ぶ習慣で衣類及び其の材料も交通不便の為他よりの輸入は極めて困難で従って自給自足により之を織られ婦人は晝は農耕に出で夜間の内職として隣近相寄り芭蕉麻等の繊維をつむいで一家族の着物を手織すると云ふ実に不便な時代で派手物を身に着ける事は普通家庭には難事で一般に芭蕉麻布の粗製品で袖は短く廣く裾は短く軽くと云ふ形で禮服用として袖も裾も稍長い物を着用し帯には博多帯風の物をしめ婦人用にミンサ帯と云ふ少々派手味の物があつて一般に賞讃されたのである 而して廃藩置縣と共に總べての部面が改革され男子のちょんまげは時の川平校校長大宣見信一氏により学童を最初に青年壯年老人の順序で断髪を執行したのでありますが老人組には二、三名頑固な方もあつて大正の初年頃までちょんまげの頭は一、二名見受けられたのである其後日本々上との交易は次第に頻繁となり衣類織物其の材料等は町の呉服店より容易に入手が出来帽子羽織袴足袋布帯と云ふ服装に一変して婦人の内職の苦勞は昔の夢として消え去つたのである而し終戦後之等和服も次第に其の影を薄くなし今日では男女共に洋装へ変わりつつあるのである

### 二. 祭事による風俗習慣

當部落は純農村故に農事に関する祭事が一ヶ年に拾数回も行われ此の祭事から来る風俗習慣が又大なるもので次にイロハの順で之を記し度い

（イ）笛 大鼓 銅鑼等は毎年旧五月又は六月の穂利祭に之を鳴らし初め九月或は十月の節祭迄は之を鳴らして其の後は滅多に此の樂器を使用せない事になって居るのである其の由来を傳聞するに穂利祭 結願祭 節祭は豊作感謝の祭で大いに踊り舞ひ歌ふ行事で此の樂器を用ひ其の他の行事は豊作祈願の祭りで樂器を納めて真心を以て祈願をなし且つ樂器を離れて大いに働く意と傳ふるのである

（ロ）ムヌン 此の祭りは害虫に対する行事で一ヶ年に六回も之を行ふ明治三十二年頃迄全住民が海浜に出る習ひでありましたが昨今は三人の祭司が部落民を代表して此の祭を行ふ一般民は各自の田畑より害虫を取集め厚紙や其他の容器に之を入れて道端の見易い場所に置く祭司は午後三時頃より別々に農道を通過し取寄せた害虫を集めて部落の裏海岸に出て三人の祭司の集めた害虫を一括して害虫除けの願をするのである而し今日の一般民の害虫採集は全く之をなさない只祭司が農道を通るのみで従って迷信的行事と青年

層は論評するのでありますが諺に神は自から助くるを助くるの道理で此の行事も後何年續くか疑はしい時代となった

(ハ) 節祭にシットイと云ふ他地方の人々が最も嫌がる遊びがある

之れは千鳥群と書いてチトレンニと呼ぶ シットイは略稱である

節祭は常に激勞する農民を開放して官民の別なく男女老幼挙つての最大慰安行事で五日間も續く真中の三日目の夜は踊る歌ふ飲む徹夜して遊んだのである これは明治四十四、五年前の事である而し人間の根氣がそんなに續く筈はない一人去り二人去り終わりには酒の豪者又は男女青壯年が残つて夜明けと共に之等の連中が部落の中央の大道に出て昨夜早引した人々を狩り集めて千鳥群の中に入れて早引の制裁として若い女子が面白半分で青木の細枝でシットイシットイを連發して此の人々をたたくこれが有名なシットイである而し今頃如何に慰安行事と許されても徹夜して踊る歌ふ飲むと云ふ馬鹿化した豪者は一人も居ない故に若い男女が夜明け方集まつて節踊見物にと他地方から来られた人々を無理矢理に引張り出して此のシットイをやるために川平の節祭は他地方の人々に嫌がられ折角の慰安行事も傷物にされる事は筆者の最も遺憾とするところで片時も早くこの悪習の撤廃を望むのである

(ニ) 神トガ又はウヤミシヤと云ふことがあります之れは神事を軽んじた者が神前に於て御詫びをすることで種子取ムヌン猪垣修理の日等は野火を嚴禁し尚此の日は部落内には歌舞音響等も嚴禁する又各拝所の奥殿には神司以外の人々は絶対に入る事は許されないのである 之等の定を破った者を神トガとして神前にウヤミシヤをするのであるこの神トガを行ふに本人を神前に遠に跪きさせ後手にして黒縄を以て手を縛り額を土につけて神前に供物を供へて神司が御詫びの願を終るまで身動き一つ出来得ないと云ふ実に原始的な神事で滅多にない十年に一回位見る神事である

### 三. 冠婚葬祭

冠婚葬祭の儀式又は方法は町のそれに倣つて別に變りはありませんがそれに用する料理の材料取寄せが実に大掛りである親類縁者隣近所總動員と云ふ態で海の上手は海に山の上手は山へ川の上手は川に手配して有り余程の材料を取寄せて作った料理は御客様はもとより子供に至るまで山盛の御馳走を貰ふことを御主人の誇りとする傾向でありましたが時代は斯様な贅澤を許す筈はない各方面から大いに改良されつつありますが手近に豊富な材料があり行けば只で採れるので粗製でも御馳走が余り多過ぎる感じがする

### 四. 相互扶助

家屋の新築修理又は農耕祝祭事等に対する相互の扶助は実に立派なものである筆者は一昨二十三年家屋の新築をしました材木の伐り出しから家屋の落成まで毎日十四、五名以上の人々が手傳つて貰ふ而もノミ カンナ チヨノ等の道具も持参して大工様の仕事を手傳つて予想以上 工事も片付け何一つ心勞せず無事に落成する事を得た外に飯米野菜其他必要な品も澤山送つて貰ひ經濟面に非常に助かり家主は大工賃 木挽賃 釘代等僅少の支出で大きな仕事を出来し得る現状で実に嬉しい風習である

### 五. 農耕と山刀

男が農耕に出る時必ず山刀を腰に差して出掛ける風習がありますが當地は田畑の周囲道路の両側等殆んど山林である而も地味肥沃で雑草木の繁茂が夥しい故に常に此の雑草木を切り拂ふ必要から山刀も無二の農具となつて居るのである

#### 六. ヤーザライ

色々の迷信が澤山あるようですが茲には本誌に関連する一、二の例を記述いたします 田圃に居る鷺（ヨーササーのこと）此の鷺が部落上空で聲高く鳴き通る時は各戸共米藁臼を叩くこれは何を意味するか存じませんが兎角家事の前兆として火の用心をする 又鳥が何百羽も集って家の周囲の樹木に止り騒がしく鳴く時は其附近に死人が出る前兆と云ふて殊に用心する犬が自家の門や或は高い所で遠方を眺めながら如何にも悲しいような長い聲で鳴く時がある此の時は其の方位に凶悪の事が起る前兆として之又用心するのであります が何れの場合もヤーザライと云ふ事をする 屋敷の内外を浜の白砂を撒布し淨め最後に門口に之を撒布するのであるが吉凶の前兆をこの鳥や犬は知るや否戸は別問題として吉凶に対する各人の日常の用心と云ふ事は最も必要と云ふ意味に於て此のヤーザライと云ふ事も決して悪い習慣でないと思ふのである

#### 七. ステユイ（袖結）

両方の袖を背中に引き寄せて両手が少々自由に動かせる程度にこれを藁の心で縛りつけた姿がステユイである自分の心境ををこの服装で表す意で他人に対し是非共御詫びをせねば済まぬ場合此の服装でその御宅を訪門するこの時訪門を受けた主人は如何なる事情があつてもその事件を許し或は幾分でも聞き入れると云ふ風習で余程の重大事にこの服装をなされたものである而し羽織袴の流行と共にこのステユイは其の影を消したのである 従つて羽織 袴に代るべき禮服であつた事が想像されるのである 今日雨乞に神司が神衣を着けてこの袖結で祈願され又ウヤミシヤの場合もこのステユイで御詫びの願が挙げられ尚黒島口説にステユイ ウスビバ等の文句が残されて居るのである